拝　啓

１２期徒の諸君、３年生になってからめっきり会うことが少なくなって、私は毎日寂しい思いをして暮らしているせいか、最近はすっかり顔色も良くなって、食欲も進み体重も増え、白髪も段々黒くなって来たような気もしていますが、みなさんはいかがでしょうか。週に１回の宗教の授業だけでは、いろいろと言いたいことがあるのに欲求不満に陥る可能性があるので、プリントの形でブリブリ言いたいと思います。しかし、ここに書くことはみんなには少々難しいことで、恐らく大部分の人にとっては全然つまらないことだと思います。だから今はこのプリントは読む必要がありません。無理に読むと健康を害し、便秘になって勉強にも悪影響を及ぼすかも知れませんから。そのときになって文句を言われるのはいやですから、前もって言っておきます。このプリントは、ですから金の箱にでもしまい鍵を掛けておいて、みんながある日絶対絶命のピンチに立たされたとき、鍵を壊して箱からこれを取り出し読むようにしてくれればうれしいです。

昨年から哲学史の話や、宗教の時間では「人間とは何か」について話していますが、「そんなことは役に立つんか」と秘かに不平を言っているかも知れないので、今日はそれについて一言。

哲学というと「何やこのわけのわからんことは」と言う感じがしますが、哲学とを人生観と言い換えれば、少しは分かるかも知れません。（もちろん正確には哲学と人生観とは違う）。ともかく、人間はどんな人でも自分の人生観をもっているのです。「うっそー」とはなから信じない態度を表明してはいけません。たとえば、早いはなしが、「このような哲学とか宗教とかは、勉強しても一銭にもならへんで」と言う人は、つまるところ「人は金儲けのために生きてこそ意義がある」という人生観をもっているわけです。あるいは、「哲学とか宗教とは暗いで。もっと楽しく生きたらええんや」と言う人は、つき詰めれば、「人は精神ではなく、体の快楽のために生きるのが目的である」と考えているのです（哲学と宗教は別に暗いものではないが）。あるいは、「哲学や宗教は、高校入試にも大学入試にも何の役にも立へんで。時間の無駄や」と考えている人にとって、人生とはまずよい高校や大学に入ることなのです。なぜかと言えば、そうすれば後で安定した生活があるから。結局の目的は安定した人生というわけです。ともかく、人は意識するかどうかは別にして、結局自分の人生観にしたがって生きます。だから、正しい人生観をもつことは、非常に大切。

もうひとつの注意。むかし、日露戦争の一年前（１９０３年、日英同盟の一年後）旧制第一高等学校（今の東京大学）で哲学を勉強していた藤村操（当時１８才）という青年が、その勉強の結果「人生は不可解なり（ひらたく言えば「ようわからん」ということ）」と結論して、日光の華厳の滝に身を投げて自殺したという事件がありました。このお陰で「哲学をすれば自殺する」という考えが一般の人に広まり、当時大学生の息子をもつ親で、「おまえ、後生だから哲学だけは勉強せんといてけれ」と息子に頼む人が続出したとか。

１９世紀のドイツにショウペンハウワー（1788-1860）という哲学者がいました。この人は実にユニークな哲学を打ち出したのですが、生前は（つまり生きている間は）ちっとも成功せず、彼の大学の講義にはほとんど生徒が集まらず、彼の書いた本は彼のお父さんさえ買ってくれなかったという悲惨な人生を送った人です。そのせいかどうか知りませんが、彼は「人生とは苦しみの連続じゃ。じゃからして、幸福とは生きる意志をすてることじゃ」と言う結論を打ち出したのです。ショウペンハウワーの哲学は彼の死後に有名になって、それにかぶれた人たちから自殺者が少なからず出た。

同じく１９世紀に出たマルクス（1818-1883）は、「人間の使命は、資本家とそれを保護する政府を撲滅して（皆殺しにして）、労働者が支配する私有財産権のない共産社会を作り上げることだ」と言いましたから、それを信じた人は革命運動に身を投じました。例の赤軍派の事件は、１９６０年代の大学生がいかにこの思想を信じて行動したかのよい証拠です。

なんてことを言えば、みんなも「哲学は害になるやんけ。こわいもんや」と長崎弁で言うでしょう。そんなに簡単に騙されないでちょ。たしかに哲学や思想とは人を変える力がある。それにたいして今みんなが必死に勉強している数学や英語や理科は、人畜無害です。たとえば、三平方の定理を習ったからといって、あるいは質量不変の法則を知ったからといって、「だから明日から、もっと回りの人に親切にしよう」という決心がでるわけではないでしょう。それにたいして哲学は人に深い影響を与えるのです。

哲学は道路標識みたいなものです。道路標識がめちゃくちゃなら、それに従えばとんでもない場所に行く。でも道路標識がなければ、どこをどう言ったら良いのか分からない。もちろん哲学を知ったから良い人に直ぐなるわけではない。それはちょうど、カーブの投げ方を知ったからといって、すぐにカーブが投げられるわけではないのと同じ。正しい人生観に従った生き方をする努力が必要。でも、まず第一に理論を知ることは大切。そのために、こうして目の痛くなるもの我慢して、肩がこることももろともせず、ワープロを打つわけです。私がこれから書いて行くことはそういうつもりで書くものです。

それでは、今日はこのへんでお開きということにしましょう。

1997.4.25　A.O.

注．さし絵と本文はなんの関係もありません。

拝啓１２期生のみなさん

今日は久しぶりに授業ができましたが、漢字をたくさん覚えた人もあって実りの多い授業であったと思います。「人間とは何か」というのは非常に重要な問題なのですが、それを解く鍵は霊魂の問題なので、真面目に考えて欲しいと思います。

「よりにもよって明日から中間試験というこの忙しいときに、こんなプリント読めるか」とひそかに思っている君。別に今読む必要はありません。前にも言ったように、将来絶対絶命のピンチに立たされたときに、箱を開いて読むようにしまっておいて下さい。また、もし今読もうとする健気な人なら、これを読むには５分かかるので、普段風呂に３０分入っているなら２５分にして、あるいはトイレに１０分かかるなら５分ですませて時間を捻出して下さい。ただし、余り無理すると便秘になるのでご注意を。

授業とは別にこのプリントでは、哲学や思想の歴史を簡単に説明するつもりです。最初のプリントを出してから２週間夜は寝て考えた結果、そのためには哲学や思想の歴史を見て行くのが一番簡単だという結論に達しました。なぜかというと、これは他の色んな分野でも同じなのですが、何かの問題を考えるとき、いきなり「さあ考えまひょ」と言っても、「何を考えたらええんかさっぱり分からん」となるので、まず僕たちより前に出た人々の考えたことを調べて、そこから出発するのが賢いやり方ですから。実際、アリストテレス（BC.384~322）も、その『刑而上学』（「けいじじょうがく」と読む）の中でまず何をしたかというと、彼以前の哲学者たちが何を考えたかを説明しているのです。

哲学が生れたのは古代ギリシアでした。ギリシアといえば地中海、地中海性気候と言えば夏は乾燥、冬は降雨と、すらすらと出てくるように、一般に雨が少なく戸外での生活が盛んなところです。ギリシア人は古代には都市を中心に国家（警察ではないがポリスと言った）を作っていましたが、その都市の中心はアゴラと呼ばれる広場でした。そこでいろいろな駄ジャれを言ったり議論をして毎日を過ごしていました。「そんなら、仕事は誰がすっと」という疑問が頭を掠めるかもしれません。仕事はもちろん市民がしていたのですが、きつい仕事は奴隷がしていました。ただ市民には、一旦戦争が始まると武器を担いで戦場にいく義務がありましたが。

ともかく、このような生活をしていたギリシア人の中でも特に頭の切れる人たちが、「見える世界の裏には、何か変わらない根源があるんとちゃうか。それは何やろ」とかんがえた人たちが出ました。こういうことを聞くと普段ひまな時には鼻くそをほじくって「どんな味がするやろ」と言ってべろべろなめて時を過ごしているような凡人は、「なんとつまらんことを考えるのや。暇人やな」と自分が暇人であることを忘れて悪態をつくのですが、これは実は不思議なことです。我々が住んでいる世界は絶えず移り変わっているが、同時に変わらないものもある。例えば、あなた。小学１年生の時の君と今の君では、身長や体重や、時には考え方さえ違うかも知れません。けど同じ自分でしょう。

あの人たちは主に自然界を見て、例えば動物は死ねば土に戻る、また土から植物が生れる、などの変化を見て、これらの変化の底には何か変わらないものがあって、それが形を変えて色々な物になるのではないか、と考えたのです。そして、タレス（BC.547死）は、それが「水」だと、アナクシメネスは「空気」だと結論を下した。これを聞いてまた、普段からひまな時にはソファーに寝そべってせんべいをバリバリ食べてテレビをぼやっと見ることしかない凡人は「なんちゅあほなこと言うんや」と言って、自分の頭がからっぽであることを忘れて、真面目に努力をする人を馬鹿にするのですが、これらの人々の偉大さは凡人がまったく気が付かない不思議に気がついて、そして解決を求めようと考えるという辛い仕事を敢えてしたことです。これらの哲学者は、自然（physis;フィシス）を対象としたので、自然学者と呼ばれます。物理学はPhysics（フィジックス）と呼ばれるが、この人たちは現代の物理学の始まりなのです。

当時もギリシア人の中には、これらの人々のしていることを「そげんなことしても、何の役にも立たんで」とあざ笑う人がいました。そこで、タレスは「哲学者を馬鹿にしたらあかんで」と言ってある行動に出ました。つまり、彼は星の動きの観察から天気をあるていど予想できたようで、ある年に「今年はオリーブが豊作になる」と読んで、オリーブの実から油を取る機械（圧搾機）を全部買い占めて、収穫の後でオリーブを圧搾しようとした農民に高い値段で機械を貸し大もうけしたそうです。

しかし、他の哲学者たちは、そのような批判を全く気にかけなかったようです。ソクラテス（BC.470~399）は、「我々は金もうけや他の何かの目的のために、考えるのではない。ただ、知りたいがために学問をするのである。つまり、我々は知恵（ソフィア）を愛する（フィロ）者である」と公言してはばからなかった。ここから、哲学（フィロソフィア）の名前が生れことはすでにご存じのはず。

そして、時代が下るにつれて、この人たちの関心も単に自然だけなく、人間にも移っていた。これらの色々な考えを一つにまとめようとしたのがプラトン（BC.427~347）とその弟子のアリストテレスでした。以後の西洋の思想と言うのは、主にこの二人とキリスト教から生れて発展したと言えます。

アリストテレスは「哲学が役に立たない」と言われる非難に対しては、哲学とは「学問の棟梁（とうりょう）で何の仕事もしたいないように見えるが、実は一番大切なものなのっじゃ」と開き直っていました。でもこれは本当なのです。哲学がなければ、色々な学問は、うど土台を失った家のように倒れてしまいます。アリストテレスはまた、「学問とは原因についての確かな知識」と定義しました。そうすると、哲学は「原因の中の原因、すなわち最終的な原因を知る学問」となります。つまり、物事について「なぜ、なぜ、なぜ」、（関西弁で言うと「なんでや、なんでや、なんでや」となる）と尋ねていく学問である。たとえば、物理学では雨が降る原因は空気中の水蒸気が飽和して云々、空気中の水蒸気が飽和する原因は海水から水が蒸発して云々、と説明して行きますが、哲学では最終的に空気や水蒸気はなぜあるか（つまり存在の原因）、あるいは原因とは何か、とかいった問題を取り扱うわけ。他の学問はみんな、ものが存在することや、原因と結果の関係などは当り前のこととして、そこから出発しているわけですが、その当り前と考えられていることを説明しようとする学問なのです。

これらのことを「当り前だのクラッカー」（この表現ついてはお父さんかお母さんに聞いて下さい）と思うのはすれた大人たちであって、子供はこれらのことも不思議に思う。このような不思議に思う感性が学問、特に哲学にはとても大切です。でも、折角子供のとき持っているこの敏感な感性は、受験勉強や忙しい日常生活とともに消し去られるのがとても残念です。みんなには、「なぜ」と問いかける態度を失って欲しくないというのが私の気持ちです。

それでは、また。

1997. 5. 12　　A.O.

今日の授業ではみんな真面目に参加し、またすぐれて的確な発言もあり、余は満足じゃ。これから暑くなってくるので少々難しいかも知れませんが、この雰囲気で頑張って下さい。

最後に見たビデオについて一言。教会は神様が存在すること、またその神様が私達のことに配慮して下さる方であると信じています。もしそうなら、現代にも奇蹟があって何の不思議もない。そして、実際不思議な事件というのはたくさんありますが、教会がそれを奇蹟だと認定することは非常に希です。しかし、言っておきたいことは、教会が奇蹟だと認定しても、カトリック信者でも別に信じる義務はないと言うことです。もちろん、一度教会が認定すれば、公然と反対することは駄目です。教会が何のために認定するのかと言えば、それはもしそれがマリア様の出現ならば、その場所で公の礼拝をしても構わないという許可を与えることです。

私があのビデオを見せたいと思ったのは、あれには教会好き好んで奇蹟を認定しているのではなく、逆に非常に厳しい審査の手順をふんでいることがはっきり出てくるからです。奇蹟があったから、人は神を信じるわけではありません。福音書にも出てきますが、イエス様が奇蹟をしても、信じない人は決して信じなかった。その良い例は、イエス様があのラザロが死んでから四日たってから生き返らせたけれど、その報告を聞いたユダヤ人の指導者たちの出した結論はイエスを処刑でした。どんなに明らかな事実でも、人は認めたくなければ認めないのです。

私たちの間でも似たようなことが起こります。例えば、ある人がある貧しい病院に１千万円を寄付したとしましょう。しかし、その人のことを余り良く思っていない人は、「あいつが寄付したのは、人から良く思われたいからやで」とか「あの金は何か悪いことしてもうけた金とちゃうか」とか、悪く考えて、事実を素直に認めないことがあるでしょう。奇蹟も同じです。最初から神の存在は認めたくないと考えているなら、それが事実でも必ず何か別のわけがあるに違いない、という結論に固執するのです。

私は個人的には、びっくりするような奇蹟があろうがなかろうがどちらでも構いません。それより、この美しい自然がこのように存在すること自体が奇蹟だと思います。前にも言いましたが、私たちが毎日見ていることを当り前と思わず、その不思議さに目を留めることが、真理に到る第一歩ではないでしょうかね。

それでは、哲学談議に移りたいと思います。今日のはとびきり難しいので、ここから先は健康な人だけ読めば良いと思います。少しでも体に異常があったり睡眠不足ならば、読まないようにして下さい。でないと、目まい、頭痛、水虫、Ｏ１５７、あるいはへたをすると頭のアキレス腱断裂とかになって、今季の出場絶望ということになりかねませんから。

前回は「学問とは原因を追求することで、その学問の中でももっとも根本的な原因の探求するのが哲学である」と言いましたが、哲学と一口に言っても色々な種類に分かれるのでございます。例えば、哲学の始まりは自然界の原因を考えていったことでしたが、その学問は自然学と呼ばれるようになった。でも自然の中には人間、動物、植物、無生物といった区別がある。ギリシア人は生物が生きているのは魂（プシケー）があるからだと考えたので、生物についての学問を魂の学（英語で Psycology）と呼び、自然学と区別しました。この魂の学の中でも特に人間を対象としたのが、人間学（人間のことをギリシア語でアントロポ　と呼んだ。英語では anthropology ）と呼ばれます。その人間学の中でも、特に人間のものを知るという能力についての学を認識論、また人間の行為の善と悪についての学が倫理学というふうに分類されるのです。また、自然学の中でも特に物質だけを対象とした学は、後にコスモロジー（コスモとは宇宙の意味）と呼ばれるようになる。

ここまで来たら、「もう頭がドカンしそう」という人もあるでしょう。それならここで読書を止めて下さい。と言いながら先に進みますと、見て分かるように、分からないかも知れないが、学問はその対象（つまり何を研究するか）によって区別されるわけ。例えば、霊魂学は生物を対象とし、宇宙論は物質世界を対象とする、ように。ここでみんなに質問。それでは、考える対象としてもっとも広いものは何でしょうか。（ここで２分考える）。分かりましたか。これが分かれば私は心底感心する。それは、「あるもの」です。というのは例えば、学問が生物を対象とするなら、無生物は除外される。物質を対象とするなら、非物質は除外される。しかし、「あるもの」を対象とする学問は、すべてのことを対象とする。「あるもの」の外にあるのは「ないもの」、すなわち「無」ですが、「無」は存在しない。むかしある高校生が「ぼくは時々無ということを考えると怖くなるのですが」と言っていましたが、怖くなる必要はない。なぜなら、「無」はないからです。ともかく、この学問は後世「形而上学」と呼ばれるものですが、アリストテレスはこの学問を「第一哲学」、また万物の根源を考えるところから「神学」とも呼び、これこそ学問の中の学問とした。

アリストテレスはそして「すべてのあるもの」の根源を捜しました。しかし、彼は無から万物が創造されことは想像できませんでした（このしゃれ、分かりますか）。無からの創造というのは、聖書にだけのっている考えで、これを初めて指摘した哲学者はキリストとほぼ同時代のフィロンというユダヤ人の哲学者です。アリストテレスは宇宙は永遠と考えていた。しかし、自然界の動き（変化）は最終的には、自らは動かされず他を動かす、いわゆる不動の動者によって原因されていると結論しまた。この不動の動者が存在することの証明は、後に１３世紀になってトマス・アクイナスという人によって神の存在の一つの証明方法として取り上げられた。もし、興味があるなら、中央公論社、世界の名著、『トマス・アクイナス、神学大全』の１巻、２問、３項を読んでください。

アリストテレスが西洋の中世の中期（１３～１４世紀）に及ぼした影響は絶大でした。そこで、逆にルネサンスになると盛んに攻撃されるようになり、近代には一時非常に悪口を言われたことがありました。その一つは彼の自然科学の知識が幼稚であったと言うことです。確かに、例えばアリストテレスは、宇宙を月の上の世界と月の下の世界の二つに分け、月の上の世界には５０幾つかの天球が回っているとか、あるいは物は重い方が早く下に落ちる（ガリレオが実験でそうでないことを証明した）という誤った理論を持っていました。しかし、言っておきたいことですが、自然科学の知識が幼稚であるから哲学も間違っているとは言えないということです。哲学はこの現実世界を注意深く観察し考えることによって深められるのですが、そのためには別に高精度の望遠鏡や顕微鏡が必要ではない。面白いことに、アリストテレスの考えた時間と空間は、ニュートンの物理学には合わなかったけれど、アインシュタインの理論には合うのです。

かもめ祭はご苦労様でした。芸達者な人が多くて来年の予餞会は楽しみですね。今週は授業がなくなったので、その代りにプリントを書きます。

前に哲学とは「あるもの」を「あるもの」として考える学問、その根本的な原因について考える学問であって、哲学は何かを作るためとか、お金をもうけるためとかのためには、何の役にも立たないと言いました。しかし、それは、哲学とは現実と懸け離れた空想の産物であると言う意味では全くありません。それどころか、哲学のはじまりは現実世界をよーく観察することです。もし現実に合わない哲学があるなら、（実際そのような哲学はたくさんあるのですが）、それは誤った哲学ということになるでしょう。

「あるもの」の中でも、特に興味深いものが「人間」だと思いますが、今日はこれについて一言。先月の宗教の時間に、みんなにこの問題を考えてもらったけど、そのさいに「人間とは理性的な動物である」というアリストテレスの定義を紹介し、しかしながら人間には感情というものがあって、理性だけでは説明がつかないとも言いました。覚えてないでしょうね。このことは覚えていると役に立ちます。あのとき、感情は喜怒哀楽の４つだけ紹介しましたが、アリストテレスは感情を１１に分類しています。

「人間らしい人間とは、この感情を理性が支配すること」とも言いましたが、覚えてないでしょうね。しかし、人間には感情を完全に支配することができない。私たちも、時々カットなってしまって「今ちょっと我慢せなあかん」と思うのですが、生意気なＡ君の顔を見たら、我慢できずにどなってしまうということがあるでしょう。でも、感情を完全に支配するのは無理にしても、そうする努力をしておれば、段々成熟した人間になるのです。

ところで、もうすぐ中学生の総会屋の大会、すなわち中総体ですね。スポーツの試合をする人が一番気にすることは何でしょうか。それはおそらく「びびる」と言うことだと思います。この「びびる」と言うことは、全く理性に反することです。だって、ちょっと考えれば、たかがスポーツ、しかもたかが中学生のたかが一地方の大会で勝とうが負けようが、世界の情勢にも、学校の将来にもほとんど何にも影響を与えない、ましてや命を失うこともないことは、頭（理性）では分かっているのに、びびるのですから。これに負ければ、自分も家族も死んでしまうような状況でびびるなら、話しは分かる。

この「びびる」といことはどういうことか、ちょっと考えてみたいと思います。　「びびり」とは、さっきのアリストテスの１１の感情の中では、「恐れ」の中に入る物です。世界の思想家のなかで最高峰のひとりである、聖トマス・アクイナス（１３世紀のイタリア人）は、その『神学大全』の中で「恐れとは、未来の悪に係わる」と言っています。つまり、スポーツに当てはめれば、失敗という悪を心配することとなる。聖トマスは更に、「恐れは収縮を引き起こす」と言っています。つまり、怖れると萎縮する、というわけ。つまり野球でいうと、投手がボールを投げるのが恐くて思い切って腕を振り下ろせないという状態、テニスで言うとバックアウトを怖れてラケットを思い切って振り切れない状態（バスケやサッカーでもそれぞれ実例を考えて下さい、きっとあるはず）です。

さらに不思議なことは、形勢が不利でびびるだけでなく、いわゆる（か神戸の方言かも知れませんが）「勝ちびびり」と言って勝っているのにびびるというご苦労なこともまで人間はすることがあります。以前２期生の中学の総会屋の大会のとき、我が三川台中学テニス部は（１期生のときは１セットの取らずに負けたほど弱かった）は第一シードと２回戦で当たり、なんと第一試合でうちの一番手が相手の一番手（個人戦では市内で優勝）に４－３で勝ったのですが、なぜ勝ったかというと単に相手の前衛がびびりまくって信じられないようなレシーブミスを連発したからです。外から見ていたら、「なんでびびるんや」と不思議でしたが、人間ってそんなものです。プロの選手もびびることがあるのですから、中学生がびびって当然。面白いことは、一番手が勝つと、うちの二番めに出たペアーが逆にびびったのです。これが勝ちびびり。勝ちを意識して思い切りが悪くなり、相手は３番手だったのに２－４で負けてしまいました。第３試合もその流れで２－４で敗れ、彼らの中学時代の青春は終わったのでした。もっとも第３試合にでたペアーは個人戦で県大会に出ましたが。

また、聖トマスは「恐れは震えをもたらす」とも書いています。試合のためにコートに立たとき、音楽の発表や演説のためたくさんの人の前に立ったとき、足の間接がガタガタ言ったという経験はありませんか。最後に、トマスは　「恐れは働きを妨げる」と言っています。試合に臨みながら、足が動かなくなる、というのがこれです。

それでは、これらの恐れを克服する方法があるのでしょうか。さっきも言ったように、完全に克服することはできませんし、もしそれができたとしたら人間でなくなってしまう。例えば、肉親が死んだのに、「別に泣いても死んだ人が生き返るわけでもあるまいし」とか言ってニコニコしていたら、「こいつは何ちゅう冷血漢や」と思うでしょう。ただ、普段から感情のコントロールに気を付けよう。とくに好き嫌いに流されないようにするのは効果的です。

もう一つの方法は、考えないこと。動物がびびらないのは、何も考えないでしょう。びびるのは、「アウトするんとちゃうか」とか「これに負けたらどうしょう」とか色々考え過ぎるからです。それよりも、目の前のボールに集中して、その他のことは考えないこと。ただし、本当は考えながら試合を進める方がレベルが高い。動物的な勘で動くと言われる長島監督のカンビューター野球より、頭脳による野村監督のＩＤ野球の方が、野球としてはレベルが高いと思います（これは私の個人的な意見で、他の意見も尊重します。また、どちらが面白いかは別問題かも知れません。念のため）。

もう一つの方法は、しっかり練習して自信を付けておくことでしょう。練習を十分せずに試合に臨む人がびびるのは当り前。ただ練習したからと言ってびびらないわけでもないし、自信があっても、試合中に自信を忘れることもある。さっきの第一シードの選手は練習も十分で自信満々でしたが、試合中に体が硬直したようになりました。人間って不思議な存在ですね。

あと残すところは２週間。悔いの残らないように、最後の練習に頑張ってちょ。素晴らしい感動のドラマを見せてもらいたいと思っています。

1997. 5.27

拝啓１２期生のみなさん

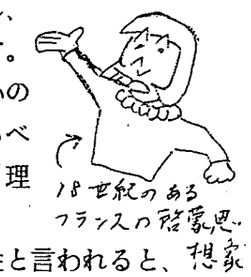
5/97

今日は雨。いよいよ梅雨ですね。数年前から気象庁は梅雨入り宣言をやめて、８月ころに今年の梅雨は何月何日に始まり何月何日に終わったと報告するようになりました。気象庁が梅雨入り宣言をしたから梅雨になるのではなく、先に実際に梅雨が始まって、それを見て気象庁が梅雨入り宣言をするわけですよね。「当り前のことを今さら何ね」と言うでしょう。けど、「神様は、いると思う人にとってはいるけど、いないと思う人にとってはいない」なんて言うのを聞いたことがありませんか。これも同種の錯覚ではないでしょうか。神様がいる、あるいはいないと言うのは、人がどう思うかに全く関係のないことです。こんな屁理屈にだまされてはいけません。

先日中総体が近いのにかこつけて、理性と感情の関係を緊張するという例でお話ししましたが、言わんとすることは分かったでしょうか。理性と感情は本来なら調和しているはずのものですが、キリスト教によれば原罪の結果しょっちゅう喧嘩する兄弟みたいになってしまった。ともかく、この関係は複雑で、近代になって正反対の二つの考え方が出てきました。

ヨーロッパはローマ帝国の末期からキリスト教が勢力を広げ、９世紀ごろには西欧の全住民は一応カトリック信者でした（当然不真面目な人も一杯いた。それは今も同じ）。しかし、１５１７年ルターが宗教改革を始めてからあっという間にたくさんの宗派が生れ、それらの間で戦争も起こり西欧世界は大混乱になった、ことは覚えていますか。この混乱の舞台となったイギリスで（清教徒革命；1642年、名誉革命；1688年）で、「どの宗教がええとか悪いとかは、わからへんのやから、宗教について考えても無駄や。本当の近代人は宗教より理性に随うべきや。ただ無知な民衆は宗教に満足しとる。それはしばらくほっとけばええ。せやけど、民衆に正しい教育を与えたら、そのうち宗教をすててわしらと同じ理性に随う人間になるやろう」という考えが生れました。ロックなんかもその連中の一人です。この考えを啓蒙思想と言います。

啓蒙思想は１８世紀にはドーバー海峡を渡ってフランスに広がり、ここで大流行しました。フランスではカトリック教会が勢力を持っていたので、啓蒙思想家は教会を厳しく攻撃しました。「教会こそ民衆に迷信を教え込み人類の進歩を妨げているのざんす」と。また、「人間の理性は絶対。だから理性によって理解できないことは間違いざんす」としたので、キリスト教のいう奥義（神が教えたことで人間の理解を越えるもの、たとえば三位一体）を否定しました。フランス革命はこの思想にそって実行されたので、革命政府はひどく教会を迫害し、多くの司祭、修道者、信者が殉教しました。無数の教会堂と宗教関係の美術作品を壊し、キリスト教の暦や祝日を廃止しました。彼らは教会を理性の敵と考えたのです。教会でミサに参加するとか、ロザリオを祈るとか、聖体行列をするとかの信心の行為などは、全くの無知蒙昧な迷信と考えたのです。「この迷信に取って変るべきは理性ざんす」と熱狂して叫びました。有名なパリのノートルダム教会で「理性の神」の崇拝という儀式が行なわれたこともあります。



そして１８世紀は理性の世紀と呼ばれるのですが、１００年間も理性、理性と言われると、いいかげんうんざりするのが人情で、１８世紀も末となるとまずドイツで「人間は理性だけやあらへん。感情の方が大切ぞ」と言う人が増えてきました。これがロマン主義運動です。この運動はドイツから全ヨーロッパに広がり、また単に思想界だけでなく、音楽（たとえばベートーベン）、文学（たとえばゲーテ）や美術（ドラクロア）の世界も巻き込んで行きました。このロマン主義者の気持ちは分かるでしょう。例えば、「私はするめが大好きで・・」と言うとすると、啓蒙思想家は「ユーがなぜするめが好きか、そのわけを理性的に説明しんさい」と来るわけです。そんなことを言われたら、「好き嫌いは説明できるものとちゃうで。なんでもかんでも理性というか理屈で割り切ろうとされると、息が詰まってしまう」と反論したくなるでしょう。と言っても、実は私は小さいときよく「なんで、なんで」と言って、大人から「この子は、屁理屈ばっかり言って」とよく叱られたのですが。しかし今度はロマン主義も行き過ぎて別の運動が始まるんです。

ともかく理性と感情の関係は簡単ではない。先週は感情を押さえることについて話しましたが、逆の場合もあるのです。「好きこそものの上手なり」という諺を知っているでしょう。この「好き」というのは感情の一つです。好きでものごとをしている状態を現代語では「のり」というみたいですね（お茶づけのりの「のり」でも接着剤の「のり」でもない）。のるとやっていることに身が入る。普段学校に行く時は朝なかなか起きない人が、釣りに行く日には一人で朝早く起きるのをみたことがありませんか。そして、釣りをしているとき楽しくて、ルンルン気分（もっとも魚が釣れなければ、段々暗くなるかも知れませんが）。

だから、よいことをするとき、それが好きならその感情はおおいに増進すればよい。あるいはわざと自分をのせるようにするべきです。たとえば、試合を目標にして練習する時、自分をのせることができれば、回りの人ものってくる。トマス・アクイナスは「善は広がる」と言っていますが、良い雰囲気は広がって、また広がった分増えるのです。一人で楽しむより二人で楽しむ方が、楽しみは２倍、３倍になる（こういうのを相乗作用という）。これは受験という共通の目的をもって勉強しているクラスにも当てはまる。よい雰囲気があれば、結局みんなそれから良い影響を受けて結果にも表れる。この意味でムードメーカーはみんなにとって有り難い。入試で面接試験が取り入れている大学のねらいの一つは、このような積極的でクラスやゼミ（蝉の音便ではなく、小クラスのこと）で雰囲気を盛り上げる人を見つけることです。

でも、問題は、どうしたら辛いことにものって行けるか、です。はばかりながら、私見を述べさせてもらいますが、第一に、辛いと思う時、少なくともその感情に負けないこと。そのために、あらゆることには正と負の両面があることを思い出しましょう。例えば、トレーニングはしんどいという負の面があるが、力がつくという正の面がある。そのプラスの面を考えるように努めることはできる。また、将来の報酬（たとえば勝った時や試験に合格したときのの喜びとか）を考えるのも良いかも知れません。

そして、もし神様を信じているなら、どのような些細なことでももしそれを神様への愛のために行なうなら大きな価値があることを思い出すのも役に立つかも。ちょうど、親が子供のために辛いことを耐えている時、その子のことを考えると喜びが沸くように。

いずれにしても、上に言ったことは高い目標であって、急にできるようになる筈がありません。おそらく一生努力しても完全には感情を支配することは無理じゃないかと思います。でも、この方向に努力することは大切です。でないと、動物のような人間が出来上がるから。この努力をする機会が毎日たくさんあります。この一年、このような心構えで頑張れば、どうでしょうか。

1997. 6. 2　　A.O.

前略。少々御無沙汰しておりますが、皆様には中総体も終わり、期末試験に向けて日々汗をかいておられること思います。定期試験のときはクラブもなく早く帰宅できますが、それは何のためかと言うと「勉強するために決ってるやん」と答えが帰ってくるでしょう。ところが、私が覚えているところでは、私がその当然のことに気が付いたのは中学２年のことだったと思います。たしかなことは、中２の時に始めて試験前に計画を建てて勉強したことを覚えています。そうするうちに分かった事ですが、計画を建てるはやすし、実行はきよし、いや難し、なのです。家に帰ると４時から夏木陽介主演の「青春とはなんだ」という番組の再放送をやっていて、それを見ていたことを思い出します。「４時から勉強したらたっぷり勉強できんのに」と分かりながら。この番組は５時に終わったのですが、では５時から勉強していたかというと、どうだったか覚えていません。

我々人間は二つの世界に住んでいるということができる思います。つまり、現実の世界と頭の中の世界。上のケースでは、現実の怠け者の世界と、頭の中ではきちっと勉強する人間の世界。現実は複雑だが、頭で描く世界は非常に単純明快です。だから頭で考えるようには人間は動けない。もし動けたら苦労はない。これは勉強だけでなく、スポーツでも、その他の技術でも同じ。「内角球は、左足を開いて腕をたたむようにして打つんや」と言われて、その通りにしてもなかなか打てるようにならんわけ。普通は。

もう一つの例。主要五教科の一つ「数学」とは、実は半分頭の中の世界についての学問なのです。つまり、「太郎くんは林檎を一つ持っていましたが、花子さんから林檎を一つ貰いました。そうすると太郎君は幾つの林檎を持っていますか」という問題があるとします。答えは１たす１は、２。つまり２個。こういうと「そんな簡単な問題を出して、馬鹿にしとる」と怒るかも知れません。けど、この例で注目して欲しいことは、数学では林檎の「質」を全く無視して、「量」だけを考えるという点です。太郎の林檎と花子の林檎は、寸分の違いもない同じ林檎ではなく、かたちも大きさも味も違う別のものでしょう。なのに、どちらも「１」という数字でくくってしまう。つまり、数学という学問は、現実に存在するものが持っている「質」（数で表わされない側面）を無視して、「量」だけを取り扱う学問なのです。

幾何も似ています。例えば、「点」は「場所を占めない点」と定義され、その結果点が動いてできる「線」は幅がない。幅がない線は現実に存在しますか。また、現実には円と線が接する時、一点で接するのではなく線で接するでしょう。幾何で言う点や線や円などは、頭の中だけに存在するもので、現実世界のものでないのです。もちろんだからと言って全くでたらめではありません。それらは現実世界を元にして考えられた世界ですから、現実の一面を確かに現わします。

皆さんは、数学ではピッタリした答えが出るのに、国語や社会では答えの可能性が色々あって採点に困るという経験があるでしょう。これは、数学が頭の中の世界についての学問だからなのです。頭の中だけなら、それを考えるのに経験がそれほど必要ではない。そこで、数学には、非常に年少の天才が現れることが珍しくない。これに対して、現実世界のことを扱う学問の場合（哲学はまさにそれなのですが）、経験を積まなければ深い考察をすることは無理です。

現実世界について考えるために、第一に必要なことは観察です。次に観察ししたことを考える。そして、出した結論をまた現実に当てはめて正しいかどうか確かめる。このような作業をして、考えを深めていくのです。皆さんは、このことを認めてくれると思うのですが、世界の歴史にはこれを否定した人がでました。そのトップバッターは１７世紀のフランスの哲学者デカルト（1596~1650）と言う人です。彼は「人間の感覚はいつもちゃんと働くがどうかわからないざんす。だから今まで言われてきたことは全部疑ってかからないといけないざんす」と言ったのです。でももし感覚を疑えば、いったいどのようにして現実の世界を知ることができるのでしょうか。彼の結論は、「それは無理ざんすけど、頭の中で考えた事で、非常にはっきりして他と区別できるものならば、それは正しいと言えるざんす」ということでした。

何ごとも確かめることが大切

デカルトの考えとその影響についてはまたゆっくりと話するつもりですが、ここでは皆さんに現実世界は簡単ではない、それだからこそ面白いことを考えてもらいたい。テレビゲームの世界も結局頭の中の世界で、現実の世界も全く違う。デームで人を殺しても殺された人は痛くもかゆくもないしょうが現実は違う。ゲームの野球では選手はビビりますか。現実のスポーツの試合では、選手のメンタルな面が試合を左右することがしばしばなのに。

現実は面白いと言いましたが、もちろん辛いともあります。けどその辛い事も考えようによっては面白くなる。ともかく、現実の複雑さと面白さが分かるためには実際にいろいろと試してみることです。例えば、上の試験の前に計画を建てて勉強したいことがない人は、「計画を建ててそれを実行に移すことなんか朝飯前のお茶ずけさらさらやんけ」と涼しい顔をして言うでしょう。

もう一つの勧めは、理論を現実の世界に照らし合わせて確かめてみることです。私が大学生の頃は、いわゆるマルクス主義者の全盛期でした。彼らはマルクスの理論を信じて革命運動をしたり、自分はしないけど応援したりして、それに反対する人たちを「おまえブルジョワやな」といって馬鹿にし、自分たちは労働者の味方だと威張っていました。でも１９８９年以降、そのマルクスの考えを実行したら人間の基本的人権だけでなく、経済も目茶苦茶になってしまうことが判明した。マルクスの考えは非常に単純明快で、それゆえに人を引き付けるころがあったのですが、それは頭の中で考えられた者で、現実世界を反映していなかったわけ。実は、１９世紀からカトリック教会はマルクス主義の非人道性を非難していたのですが、多くの知識人は「マルクス主義者にあらずんば人にあらず」とばかりに、逆に教会を金持ちの味方と言って非難したのです。

同じ事は宗教にも言えます。私が言う事も鵜のみにする必要は全くありません。「うそとちゃう」と疑ってもらって結構毛だらけ猫灰だらけ。私は考えて貰う事が嬉しい。「神父さんが言ったから信じる」ではなくて、自分の頭でまず考え、現実と照合して、結論を出して下さい。ただ、宗教の問題は簡単には証明できません。けれど、それを言う人がどんな生活をしているか。また教えの内容が常識に照らし合わせて認められるか、などは考える事ができるでしょう。もし、このような態度を持っていたら、何とか真理教の問題はあれほどひどくはならなかったのではないかと思いますが。

それではまた。　1997. 6. 21

最近例の殺人事件の犯人の顔写真を載せた週刊誌が問題になっていることをテレビなどで見て知っていると思います。昨日のテレビでは、出版社の方はこれが少年を保護する法律に反している事よりも、「報道の自由」に関わる重大な問題だ、すなわち言い換えれば、報道のためには法律を破る自由もある、という旨のことを言っていました。もし、犯人が編集長の息子だったなら、同じように写真を載せたでしょうか。私はそれが知りたい。

みなさんは、戦前には教育勅語というものがあったけれど、戦後それが廃止され代わって教育基本法というのが制定されたことは覚えているでしょうか。この神戸の事件を機に、この教育基本法の見直しが話題に上ったようです。この教育基本法を作ろうとしていたとき文部大臣であったのが田中耕太郎という人でした。この人は立派なカトリック信者で、教育の目的を「真理の探究と人格の完成」としたのですが、この案は審議の間に反対を受けて、紆余曲折を経て（「すったもんだの末」の難しい表現）「人格の完成」は残ったけれど「真理の探究」は削られたそうです。

どうして「真理の探究」は嫌がられたのでしょうか。それは、たくさんの人が「真理」という絶対的な基準に縛られたくないからです。つまり、人間を超える真理を認めると、自分の好き勝手はできなくなると感じるのです。また、真理の裏には絶対的な神様の存在が見え隠れするわけですが、神様も多くの人にとって好ましくない存在なのです。ちょうど家に親がいたら好き勝手できないから、一人のほうがいいという子供のようなものです。これに対してキリストは「真理はあなたたちを解放する」と言いました。真理に従わない理論なら、結局人を虐げる結果に終わってしまうという事実は歴史の中で何度も繰り返されましたし、これからも繰り返されるでしょう。

むかし、ギリシアにアテネというポリスに民主主義の政治が花開いた頃（紀元前５世紀、ペルシア戦争に勝利してからのだいたい１００年間）、アテネでは平民でも政治家になれるという時代がやってきました。ところで民主主義の政治で大切なものは何でしょうか。それは話し合い（討論）でしょう。そこで人々が夢中になったのは、いかにして話し合いで相手をとっちめることができるかということでした。そこで弁論術が大いに人気を博したのです。このようにあることの需要が高まると、それを利用して「もうけたろ」と思う人間が出るのは世の常で、アテネでも「弁論術、教えます」とチラシを新聞にはさんで配ったり、電信柱にはったりする人が多数出てきました。

この人たちは「ソフィスト」と呼ばれ、世界の歴史で初めて現れた専門的な教育者と言うこともできます。が、彼らが教えの中心は、「白を黒という詭弁（へりくつを難しく表現した言葉）」で、討論の相手を言い負かす方法に置かれました。また、真理については、「真理なんてなあらへん。１００歩譲って、もしあったとしてもそれを知ることはできへん。もう１００歩譲って、たとえ知ることができたとしても言い表すことはできへん。だから、真理なんて考えることが無駄や」と言っていました。ソフィストの代表者のプロタゴラス（BC.486-396）という人は、「人間は万物の尺度（定規）である」と言ったそうです。つまり、「何が正しいかは各自が決めるもんや」と言うことです。このような考え方の人は現在もたくさんいます。

こういうふうに客観的な真理はない、それは人によって様々であるという考えが広がると、「善悪も区別も人によって違うさかいに、善だ悪だとみんなに強制するのはよくない」となり、社会、とくに青少年が堕落します。子供を害するポルノや残酷なビデオなどは、市場に出してはいけない、と主張しても、「それは表現の自由を侵害する」と言って反論すれば、何もできない。不思議なことは、これが病原菌がついているかも知れないと思われるかいわれ大根ならすぐに取り締まるのに。ポルノや暴力シーン満載の本が、人間の精神にどのような影響を与えるかは、以前の連続少女殺人事件や今回の事件でも十分に証明済みでしょう。けど、体に悪いものは神経質なまで取り締まるが、精神に悪いものは、「表現の自由、言論の自由」という一見立派なガードによって、まったく野放しにされている。しかし常識でもわかるように、自由は絶対的なものではない。社会の善に反することをする自由はない。その自由の乱用の結果、今の日本や先進諸国はこうなった。

アテネもそうなりました。その状態を見て嘆いたのが、ソクラテス（（BC.470-399）という人でした。彼もある意味でソフィストなのですが、態度は他のソフィストとは異なっていました。彼は「おいは何も知っとらん」と言って、教えを乞うことに専念しました。そうするとソフィストは「よしよし、かわいいやっちゃ。何でも教えたるさかいに聞いてみ」と質問を受け、それに答えを与えるのですが、ソクラテスはその答えに満足せず、さらに質問。ソフィストが答えると、さらに質問。という風に質問を重ねて行くうちに、当然最後には先生づらしていたソフィストは、実は自分も何もわかっていなかったということを認めさせられる、という極めて意地悪なことをしたのです。この結果、彼はソフィストたちの恨みをかって最後は裁判で死刑に処せられます。

ソクラテスが言いたかったことは、「もし学問ばしたかとやったら、まず自分は知らんということば認むる（これを「無知の知」と言います）ことから始めんば」ということでした。また、真理がないと言う人に対しては、「真理がなかと言うとやったら、少なくともその命題（真理がない、という命題）はひとつの真理やろう。そいやったら、真理はあるたい」と言ったわけです。そして、彼は誰でも善意の人なら認める真理を追求して行き、その仕事は彼の弟子のプラトン、そのまた弟子のアリストテレスという偉人によって引き継がれ仕上げられたのです。

皆さんが受験勉強を嫌がる気持ちはよくわかりますが、ものは考え様で勉強を「真理の探究」として挑戦してみたら如何でしょうか。実際、学校で習うことは一応みな将来なんらかの役に立つことです。歴史などはもしあの教科書を全部マスターしたら、一人前の社会人として、世界のどこに出ても恥ずかしくない教養を得たことになりますよ。

また、主要５教科の勉強と同時に、人間としてどう生きるかの問題も考えると将来役に立つと思います。三川台を卒業したら、こんなことを言う人はあまりないでしょうから。

P.S. 昨日は ソフトボールに さそって 頂き ありがとうございました。

1997. 7. 5

今日のビデオは如何でしたか。世間では離婚のことをいとも軽々しくバツイチとかバツニ言うそうですが、その陰でどれだけの子供たちが苦労しているか、少しわかったのではないでしょうか。私たちから見たら、馬鹿な生活を送っている不良少年の多くが実はかわいそうな家庭環境に生まれ育った少年たちであることも、少しは想像がつくようになったのではないでしょうか。

ところで今日で宗教の授業が終わりです。「やった」と思っている諸君も多数おられるかも知れませが、二学期にはもっと充実した授業をしたいと願っていますので、よろしくご協力のほどを。一学期では人間とは何かを考えたかったのですが、時間があまりなくて非常に不十分な内容となってしまいました。その分このプリントでいくらか補いたいと思っています。

○　○　○　○　○　○　○　○　○

むかしむかし中国に春秋戦国時代(BC.8c.~秦の統一まで)という乱世の時代がありました,この時代には才能さえあれば別に大学を出てなくても大臣や大将になることもできたので、屁理屈が得意な人は、国を強くする方法を教えますとか、戦争に勝つ方法を教えますとか、口先三寸で外国を騙しますとか言って、自分のアイデアを使ってくれる有力者を探していました。その結果いろいろな思想が生まれ諸氏百家と呼ばれたことは、みんなも習ったことでしょう。

さて、そのような思想家たちはそれぞれ有名な先生の回りに集まってグループを作り、「わしゃ何派や、おまえは何派け」と、互いに対抗意識を燃やし、相手の悪口を言うことに余念がありませんでした。その中でも特に大きな集団になったのは、儒家と法家と言われる二つでした。儒家とは孔子（BC.6~5c.)の始めた教え（儒教）を奉ずる人々で、その中でもとくに「もうしもうし」とブリブリ言っていたのが孟子(BC.4~3c.)でした。法家とは旬子（BC.3c.）という人に従った連中で、あの秦の天下統一の一つの原因は法家の学者を大臣にしたことです。

ところで、この二つのグループの間では大きな論争がありました。それは「人間とはええもんやろか、それとも悪いもんやろか」という問題です。「しょうーむな」と言って、ここで目を紙面から離してしまわず、もうちょっと辛抱して読んで下さい。儒家の人々は「人間は本来ええもんや」と主張し、「スブタにハッポウサイ、チャウシュウメンにギョウザ」と言っていました。（中国語を知らない人のために、日本語に訳すと「もし、赤ちゃんがハイハイして井戸に近づくのを見たら、誰でもその子を止めて助けるやろ。それは誰にも見られんでもそうするんやさかい、人間ちゅうもんはええもんやんで」となります）。他方、法家の人達は「そんな理屈には満足できへん」と言って、「トンナンシャーペイ、ピンフでロン」と言い返しました。（これも念の為に訳しておくと、「人間は欲望にしたがってだけ生きとんやから、生れつき悪いもんや。せやからええ社会を作ろと思たら、厳しい法律をようさん作ってびしびし取り締まる以外に方法はありまへん」）。そしてその例を挙げて、「シーアン、ナンキン、カントンにテンシン栗」と言ったわけです。（簡単に意訳すると「もし道に千円札が落ちとって、回りに誰もおらんかったら、みんなポケットにないないするやんか」ってわけ）。

人間が本来悪いものだとするのを性悪説（「ショウワルセツ」ではなく「セイアクセツ」と読む。性とは生まれつきの性質という意味）、その逆を性善説と言う。実はこの問題はヨーロッパでも考えられたのです。例えばフランス人のルソー（18世紀）は「ウヒョ、人間は本来良いものざんすから、教育とは子供の良い面を引き出してやることざんす。だから校則や罰は少なくして子供の自主性にまかせんさい」とフランス語で言って性善説を説いていましたし、他方イギリスのアダム・スミス（18c.)は「人間は自分がもうけることしか考えとらへん。だから政府は個人がもうけることについて手出しをせんで放っておいたら、自然に国全体が豊かになりまんねん」と性悪説にたって『国富論』を英語で書きました。

みんなはどう思いはりますか。もしルソーの言うことが全く本当なら、先生が何もいわんでも、ほんのちょっと生徒たちを誉めたりすることで、生徒はちゃんと宿題をし、学校の掃除をし、いつも明るく楽しく清潔な学校が世間にうじょうじょしている筈。ところが実際は、世間の学校にはいじめ、校内暴力、退学、０１５７などで荒んでいるのいっぱいあるのが現状でしょう。「その原因は、先生がうるさく言い過ぎて、校則を一杯作って生徒の自由を尊重しないからざんす」とルソーは言うでしょう。確かに、怒ったり叱ったりするだけなら、子供はできることも萎縮してできなくなり、逆に誉めたり生徒の良いところを注意深く見付けて認めるなら生徒の隠れた才能が伸ばされるもの本当でしょう。そして生徒の自由と人権を認めず、むやみやたらに厳しい教育も珍しくないけれど、一般に学校でなぜ先生がうるさく言うかというと、うるさく言わなければ生徒は普通自分から進んですべきことをしないからじゃないか。私も、もし遅刻しても罰はない、宿題しなくっても怒られないなら、遅刻はしょっちゅうするし宿題もしないでしょうね。

今度の殺人事件や、昔のナチスが６００万人を、スターリンが２０００万人を、ポルポトが２００万人を虐殺した、なんてことを聞くと人は悪いもんやと思いたくなる。が、逆に無数の名もない人が貧しい人や病気の人の世話をほとんど報酬ももらわずにしていること、さきのビデオの施設の先生たちの姿を見ると、「人間は良いもんや」という考えに傾く。また、同じ人間でも同時に二つの面を持つことがある。普段は優しい人なのに、怒ったら目茶苦茶なことをする人もいる。きみたちでも、あるときは親切に、あるときは冷たい人になることがあるでしょう。あの少年も小さいときからあのような血に飢えた殺人鬼であったのでは絶対にないはず。

まず人間が良いことと悪いことを区別できるという事実自体が、人間が１００％悪いものではないことを示している。もし１００％悪いものなら、悪いという概念さえもたないはず。むしろ悪いことをした後で痛快な感じで満たされ満足感に浸るはず。悪いことをした後、良なんとなくしっくり来ない（難しい言葉で言うと「心の呵責を感じる」）ことは、人間が善いものであることの証拠でしょう。では、どうして、悪いことをするのか。それは次回に説明しましょう。

夏季模試頑張ってください。　1997.7.7

ご無沙汰しています。あと夏休みまで秒読み体制に入りましたが、あとの休みまでの時間は適当に手を抜いて体力を消耗しないようにやろうなんて、思っても言わず、言っても実行しないように、お願いします。

前回、性善説と性悪説を紹介して、「人間はええもんか」について考えてもらいましたが、今日はこの重要問題についてキリスト教はどう教えるかについてお話したい。今回の内容が特にややこしく複雑怪奇なので、読む前に十分ウォーミングアップをして下さるようお願いします。でないと、この手紙を読むうちに、頭蓋骨を骨折したり、脳味噌に肉ばなれを起こしたりして、大切な夏休みを棒に振ってしまう危険性があるからです。

さて、本題。ある人が「人間とは、自然が造ったとしたら、最高傑作品だが、神が造ったとしたら、失敗作だ」と言っていました。これは言いえて妙です（「うまいこと言う」をきざに言うとこうなる）。

「もし人間が神様から造られたのであれば欠陥品である」ということですが、自分のことを振り返ってみてそう思いませんか。しないといけないと分かっちゃいるけどできないことがしょっちゅうあるでしょ。もし人間が欠陥のない優良商品なら、人間は悩まないはず。悩む存在は、人間だけです。犬が悩んでいるのを見たことがありますか。そこで、どうして神様はこんな欠陥のある人間を造られたのか、と言う疑問が当然沸いてくるのです。

キリスト教によれば、神が造られた人間は現在の私達とは少々違っていたのです。どう違っていたかというと、最初は理性が体を完全に支配できた、らしいのです。だから、例えば、アダムは、学校から帰えると、決まった時間に勉強を始めることができたはず。イブが造った料理が気に食わないものだったとしても、嫌な顔をせずに食べられたはず（アダムも人間ですから好き嫌いがあったはず。好き嫌いは罪ではありません。念のため）。夕方になって、畑を耕すことに疲れを感じたとしても、決められた時間まで苦もなく仕事を続けてし終えたはず。

これが私達ならば、まず朝決った時間に飛び起きるのも、嫌いなものを食べるのも、疲れたときに仕事を続けるのも、簡単にはできない。もちろん、訓練によって、徐々にできるようになりますが、いくら訓練してもやはり少しは辛いのです。

それでは、どうして、最初の素晴らしい状態が続かなかったのでしょうか。それは皆さんも良くご存じの通り、原罪のせいだと教会は教えているわけ。つまり、いってみれば、最初の状態はすべてが調和（ハーモニー）していた状態だった。肉体は、自分の上にある理性に、人間は自分を支配すべき神に完べきに従っていた。ところが、イブとアダムが神様の命令に逆らったため、肉体も理性に逆らうようになった。つまり下剋上の状態になってしまい、ハーモニーが崩れてしまったわけです。そして、なんとこの状態が子孫にまで受けつがれるようになった（「そんな殺生な」と思うかも知れませんが）。だから、人間は欠陥を持っているのです。でも、この欠陥は神様が人間を造り間違えたせいではなく、人間が罪を犯した結果なのだ、というのが聖書に基づく教会の教えです。

この教えが本当かどうか、つまり、最初の人間が私達とは少し違ったということは証明できません。なぜなら、万が一アダムとイブの骨が出てきたとしても、「こんな奇麗な骨だったら、原罪はなかったはずや」とか「こんなぶっとい骨やったら原罪があったはずや」とかは言えないから。骨から最初の人間の状態まで類推できない。では、この原罪の教えは、単なる作り話しか、と言えば、余りにもよく今の人間の状態を説明するのではありませんか。

また、人間が原罪をもって生れてくることは、４、５才の子供をみても分かると思います。のような子供たちは、とてもかわいらしくまだ罪を知らないはずなのに、でももう我がままでしょう。そのくらいの子供が我がままを言って親を困らせているのを見たことはありませんか。

しかし、問題はこれで済んだわけではない。「ゲゲッ」と言わずにもう少し耳を傾けて下さい。次の問題は、それでは原罪がどれほどひどい害を人間に与えたのか、ということです。この点に関して、ルターは「人間は原罪の結果、とことん腐ってしもうたんや。せやさかい、人間はもうええことしよと思ても、できへんのや。人間のする行ないはみんな罪なんや」とドイツ語で言っていました。この説を聞いた人々は腰をぬかして、「もしそうなら、人間はどがんして救われると」という尋ねました。そうするとルターは、「なんぼ罪を犯しても、イエスキリストが私を救ってくれると信じさえすれば、救われるんや」と答えたわけ。これが有名な「信仰のみ」の教えです。

これに対してカトリック教会はすぐに反論しました。教会によれば（また聖書にもはっきりそう出てくるのですが）、人間は確かに原罪の結果人間は悪に傾くようになり、そのため良いことをしようとすると抵抗を感じるが、まだ「良いことをする能力」は残っている。

もし、人間がよいことができないなら、何をしても罪なら、その人は自分がした悪いことに責任を持たなくても良くなります。悪いことをした人に、「なんでおまえ、こんなことをしたんや」と怒ったとしても、その人は「だって、ぼく良いことはできないんだもん」と答えるでしょう。万一そんなことを言ったら、「なに寝ぼけたこと言ってんねん」と言われて頭を２、３発殴られるのが関の山。別の言い方すると、ルターは人間が自由であることを否定したのです。

ここまで我慢に我慢をかさねて読んでくれた人のためにまとめますと、キリスト教によれば、人間は良いものだけど、悪に傾いている。むかし、子供が万引きなどの悪さをしたことを知らされた親が、「うちの子に限ってそんなこと」とよく言ったと聞きましたが、そのような親は人間がみんな悪に傾いていることを忘れていたのです。このような錯覚は、私たちも簡単に陥りますよ。自分の心に悪い考えが浮かんでも、驚くことはない。それは自然だ。また友達の行ないに悪いことを見つけたとしてもびっくりすることはない。しかし、それをほっておいてはいけない。それを正すために戦わないと、少年の殺人者が生まれたりして、恐ろしい社会になるのです。

それでは、海に行けばさめに、山では雷に、町では自動車に、家では食中毒に、学校では妖怪に気を付けて、１学期の疲れを落としてください。

1997. 7. 16　AO.

拝啓１２期生のみなさん　　10/97

夏休みが終わり、ふと気がつくともうみなさんの暗い中学生活はあと半年余り。この世では、楽しいことも苦しいことも永遠に続くことはなく、必ずいつか終わるというわけですね。この短い時間を有効に使えるために、今日もまた残暑に負けず、難しいお話を一席。

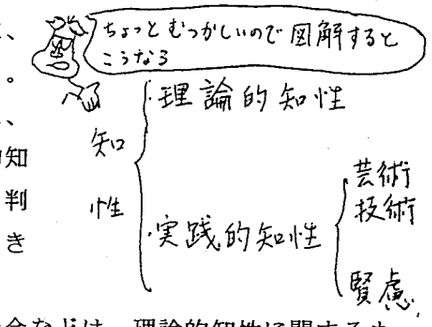
当面のみなさんの問題は「あれ」ですね。「あれ」は確かに大切ですが、でも「あれ」が気になって夜も眠れないなんて、情けない人間はこのクラスにはいないと思います。むしろ、周りの人々は「もっと気にしろ」とやきもきしているのが現状かも。

ところで、今日はそのことに関連して、「あたまがええとはどういうことか」という問題を考えたいと思います。そんなことを言うと、「そりゃ、学校の成績が好い人が頭がいいのじゃないの」と言うでしょう。これは現在の日本人のほとんどみんなが支持する考えでしょう。学校で優秀な成績の人は難しい大学に行く。だから難しい大学の人は頭がよく、会社は争ってそういう大学の学生を採用する。その結果、良い大学に行くために良い高校に、そのために良い中学、よい小学校、はてはよい幼稚園に、血眼になって入ろうとする、受験地獄ができあがるわけです。

このような受験社会は、別に日本だけの現象ではないようです。お隣の韓国なんかもっとひどいらしい。また、かつて中国で科挙という役人になるための採用試験があったときは（隋の時代から清まで）、受験教育、受験産業、はてはカンニングの技術までがすさまじい発展を遂げたそうです。でも、現在ではこの学歴第一の考え方が行きづまっていると考える人が多い。現在我が日本はかなり危機的な状況にあるわけですが、それはこの日本を牛耳っている高学歴のエリートのせいではないか、というわけです。それでは、哲学ではどう考えるのでしょうか。

哲学、哲学と言っても、私が言う哲学は、実は古代ギリシアの哲学（代表者はプラトンとアリストテレス）と、それを吸収してまとめた中世のキリスト教哲学（代表者がトマス・アクイナス）のものです。日本でもてはやされる西欧の近代哲学には、時にひどい欠陥があるのです。もしそうでなければ、現代社会はこれほど混乱していなかったでしょうに。でも近代哲学もおりに触れて紹介したいと思っています。そこには、とてつもない考えをした人がいて、かえって面白いこともありますから。

さて、頭、と言ってもヘッディングをするため、あるいは帽子を載せるために使うものではなく、考えるために使う頭は知性と呼ばれます。この知性は、何を知るかに従って、理論的知性と実践的知性に分けられる。理論的知性とは学問的な知識を得るもので、実践的知性とは、生活の中の個々の状況で正しい判断を下すものです。実践的知性は、生活の中での実際的問題をどのように解決すべきかを判断するもの（これを賢慮と言う）と、また何かを造り出すとき（技術、芸術と呼ばれる）の二つがある。



ところで、学校で習う授業、つまり数学、国語、理科、社会などは、理論的知性に関するものだけです。英語は、文法ならば確かに理論的なのですが、ヒヤリングとかよく話すこととかは、実は技術なのです。だから、英語の成績は悪いことは必ずしも英語を上手に話せないということを意味しない。英語の成績がよい人が必ずしもペラペラ話せるわけではない。逆に「おれは英語が話せないから頭が悪い」と悩む必要もないわけ。

さて、みんなが非常に気にする学校の成績、つまり主要５教科の成績は人の理論的知性に対する評価なわけ。それに対して、みんながあまり気にしない技術、音楽、体育などのいわゆる技能教科は、実践的理性の技術と芸術に関する評価ざんす。日本の教育で重要視されるのは理論的知性で、技能はそれほど大切には思われていないことはみんなもよくご存じのこと。ましてや、知性のもう一つの面、実践的知性の賢慮は、まったく評価されないでしょう。私はこの日本の評価の仕方が悪いと言っているのではなくて、ただこの評価は人間の部分的な評価でしかない、ことを忘れないようにと言うのです。

というのは、社会に出たら理論的知性より、実践的知性がより大切になることがしばしばなのです。たとえば、人間関係をうまくやっていくのは実践的知性の問題です。むかし新聞で小さいときから塾通いで東大に入った人が、どうやって友達を作ったらいいのかわからずに悩んでいるという記事を読んだことがあります。難しい数学の問題は解けるけど、どうやって知らない人に話しかけるのかが分からなかったそうです（もちろんこれは極端な例外でしょう）。また、政治や商売の世界で必要なものはどういったことでしょうか。それは、人間の気持ちを読み取り、社会が必要としているものを機敏に察知することでしょう。これには、数学や英語や理科の知識は何の役にも立ちません。だから、ほとんど学歴の無い人で、優れた政治家や企業の経営者になった人も多いのです。（もちろん立派な学歴を持ち立派な政治家や経営者になっている人も少なくない）。江戸時代のある商人は、江戸で大火事があったのを見てすぐに木曾に行き材木を買い占め、江戸の町の再建が始まるとぼろ儲けしたそうですが、このように機を見てすぐに決断して動くことは、学校では教えられないことです。現代のスペイン語を作ったと言われるセルバンテス（1547~1616）、近代英語を作ったといわれるシェークスピア（1564~1616）は、どちらも大学教育を受けなかったそうです。かつて日本のプロ野球で頭脳的な投球で有名だったある投手の、高校時代の先生に知り合ったのですが、その先生は「あいつはあほやった。全然勉強しよらんやった」と言っていました。学問のための頭脳とスポーツのための頭脳も違うようです。

私が言いたいことは、主教５教科は大切ではないとか、また大学なんか行ってもしゃないとかいうことではなく、学校の成績だけで人を判断したら（どうしてもその傾向があるのですが）大間違いだということです。昔大学でスペイン語を教えていたとき、試験の後で成績の悪い人に「試験の成績は、君がスペイン語をどれだけ理解しているかを表わすだけで、君の人格を評価するわけとちゃうよ」とわざわざ言ったことがある。というのは、時々学校の成績が悪いと、自分が否定されたように考える人がいるのです。立派な学歴を持ちながら、人格を疑うようなことを平気でする人もいることなんか、新聞をちょっと読めば一目瞭然でしょう。

では実践的知性は、どうやったら伸ばせるのでしょうか。これは難問ですが、一つ言えるのは、これにはどうしても経験が必要ということです。どうやって経験を積むかと言えば、人生の先輩（親や教師）とよく話すこと、たくさんの人と交わる機会を持つこと、よい本を読むこと、などではないかな。そして、実践的知性を伸ばすためにはたくさん失敗する必要があります。

1997. 9. 4

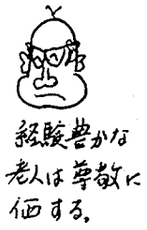
A. O.

体育祭の準備を陰から拝見していて、その見事な下級生のリードの仕方に感心しております、はい。人数は少ないのに見事なパワーですね、はい。

先週、理論的知性と実践的知性という、実に聞いただけで眠くなってくるような話をしましたが、抗議の電話もかかって来なかったので安心しました。そこで厚かましくこの話を少し進めます。と言うことで、実践的知性についてもう一言。

実践的知性とは、生活の中で何か問題にぶつかったとき、どういう手段を取ったら良いかを教える知性です。この知性に優れている人を、「賢明の徳（英語で prudence と言う）をもった人」と言われ、聖アウグスティヌス（５世紀）はこの徳を「望むべきこと、避けるべきことを知ること」と定義しました。例えば、友人が毎日テレビを６時間も見て勉強していないことを知り、注意してあげようと考えたとしましょう。それは非常にいいことですが、さてどのように注意しようか、これは難しい。あまりにはっきりと「中３にもなってテレビを毎日６時間も見てる馬鹿がどこにおるねん。このあほんだら」と言えば、相手は聞いてくれるどころか大喧嘩になるのは目に見えている。逆に相手を傷つけることを心配して何も言わなければ、友達を助けることにはならない。では、どうすべきか、何を言うべきか、それを教えるのが賢明の徳なのです。この例では、相手がどんな性格の人か、私とその人とはどのくらい親しい関係にあるか、なども考えに入れねばならないでしょう。ともかく、賢明な人は上手に相手を諭すことができる、てわけ。

ところで、この賢明の徳に成長するためには（私がしつこく言うので耳にたこができたかも知れませんが）、経験を積むことが大切です。でも経験を積むには時間がかかる。そこで、自分が経験を積むかわりにできることが、他人の経験を参考にすることです。その仕方に二つある。一つは、他人に「助言を求める」ことです。もう一つは本を読むことです。今日は助言を求めることについて少々お話させてください。



助言を求めると言っても、誰でもよいわけではない。常識で考えれば、助言を求めるべきは、自分より経験の豊富な人ですよね。ですから、残念ながら自分と同世代の友達の助言は、あまり頼りにできません。友達を信用するな、と言うことでは全くない。ただ、もし問題が複雑なことならば、ほとんど同じくらいの経験しか積んでいない人がよい助言をするのは簡単なことではないことは分かるでしょう。つまり、宿題をどこでしようか、次の休みの日に何をしようか、というような問題なら友達に尋ねれば良いでしょうが、将来の進路をどうしようかなどの人生の問題ならば、親や先生など信頼のおける経験のある人に相談すべきです。ある知り合いが大学２回生のとき、卒業後何をしたらよいのかを１年上の先輩に聞いたところ、もらった答えは［そりゃ、お前の好きなことをしたらええ」と言うものでした。一見かっこいい忠告ですが、「もし好きなことができたら、誰も悩むかいな。好きなことが簡単にできへんから、聞いてんのやないか」と私は言いたい。

しかし（ここから逆のことを言うので気をつけて下さい）、「徳は中庸（真ん中）にあり」と言います。つまり、過ぎたるは及ばざるがごとし。例えば、勇気の徳は、走ってくるダンプカーに立ち向かうなら、それは無鉄砲であって徳でもなんでもない。勇気は、臆病と無鉄砲の中間にある。勤勉の徳は、仕事をよくすることですが、家族への義務を蔑ろにしたり、自分の体を壊すまで働くなら、これも徳ではなくなるのです。

同じように、賢明になるために、他人の助言を聞くのは大切だが、聞かなくてよいことは聞く必要がない。何でもかんでも他人の言うことを聞いてから決めようとするなら、優柔不断に陥る。

みんなはイソップの次の話を知っていますか。ある村からロバを売るために町に行こうとした親子二人の話です。最初お父さんがロバに乗り子供がロバの手綱を引っ張っていました。そうするとそれを見た人達「なんやあのおやじは。自分だけロバに乗って子供を歩かとるやんけ」とお父さんを批判した。これを聞いた二人は、話し合ってお父さんがロバから降りて、今度は子供がロバに乗ったわけ。そうして進んで行くと、道にいた人達は「なんやあの子供は、おやじを歩かせて、自分がロバに乗ってやがる。親不孝もの」と罵り始めた。それを聞いた二人は、「そんならしゃあない。二人とも乗ろう」と言って、ロバに二人が乗ることにしました。そうして進んで行くと、沿道の人々は「なんや、あの二人は。二人でロバに乗って。ロバがかわいそうに思わんのかいな」と言い始めた。そこで二人はロバから降りて、歩いて行きました。しばらく行くと、それを見た人達は「あの二人の田舎もんはあほちゃうか。せっかくロバを引いとんのに、乗らんと歩いとるで」と。

言いたいことは、何をしても文句を言う人は必ず出て来るということです。だから人の言うことばかり気にしていたら、なにもできへんというわけ。世間の多くの人が、自分で物事を決めることが出来ず、回りの人のするのと同じことをして安心しています。だから、みっともないことでも、流行しているからというだけの理由で、自分もするわけ。この生き方は、突き詰めると、自分の人生の主人は自分ではなく、周りの人の判断ということです。それは恥ずかしいことだとは思いませんか。例えば服装や髪型なら「町を歩いたら、若い子がようさんスキンヘッドにしとったから、俺もそうしょう」とか、「みんなが頭を金髪に染めとうさかいに、俺もそうする」ではなくて、「私はこれが本当にカッコイイから、この服を着る、この髪型にする」と自信をもって身繕いしてほしいですね。絶えず流行を追いかけて何が美しいのかを考えずに、服装をしょっちゅう変えるなんて、惨めじゃないですか。と言っても、いつも同じ服を着る必要はまったくないけど。３カ月で終わる流行歌ではなく、何世紀も親しまれるクラッシックのようになってください。

最後に、「本当にええもん」を知るには、本物をよく見ることです。前にも言ったように、例えば美術なら良い美術作品を、音楽ならよいコンサートを、スポーツなら一流選手のプレーを見よう。また、人生を立派に生きた人の伝記を読むことは、自分の人生を価値あものにするために参考になるでしょう。では、さいなら。

1997. 9. 12.　　A.O.

プロ野球のペナントレースも終わりに近づきましたが、私にとっては興味のない展開となってしまって残念です。いよいよ本格的な食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋ですが、皆さんにはこれらのどれにも当てはまらない受験勉強の秋になるのでしょうか。受験はそのためにすべてを犠牲にするほどのものではないから、普段のの生活を楽しみながら勉強に普段よりは少し精を出して頂きたいと密かに願っています。

ところで毎日体育祭の準備お疲れ様です。特に応援の練習は大変でしょうね。けど、これは皆さんにとってとても貴重な体験だと思います。というのは、「人を動かす」というとても大切なことを経験できるからです。

体育祭では、四つのグループに別れてそれぞれの色で団長を決めて、この団長がすべてを仕切るわけですが、この仕事がうまく行くためには、団員が団長の命令に従わねばならない。でも団長が人に命令する権威は、どこから来るのでしょうか。と言えば、「それはみんなが決めたんやさかい、従うのは当たり前やろ」と言うでしょう。それは一理ある。でもそれでは、団長が団員の選挙ではなく、先生が任命したとしたらどうでしょう。「それは、学校では生徒が先生に従わんばごとなっとるやろが、そいけん先生の決めた団長に従わんばいけんたい」と答えるかも。それでは、なぜ学校では先生が命令する権威を持っているのでしょうか。家庭では、両親が子供に命令する権威を持っている。子供は親に従わねばならない（みんな知っているでしょうね）。会社では、それぞれの部署の長が部下に命令する権威をもっている。これらの権威に従わなければ、家族も学校も会社もどうなると思いますか。崩壊してしまうでしょう。今日の問題は、これです。つまり権威とはどこから来るのか。

人が二人以上集まって何かをしたければ、権威が必要です。たとえば、二人で旅行するとする。もし一緒に旅行したければ、一つの計画を立てて二人ともそれに従うなければならない。計画の立てる仕方は、一人が立てるか二人で相談しながら立てるか、どちらでもよいが、一旦決まった計画は強制力をもちます。でないと、もし二人が好き勝手にやれば、一緒に旅行することはできない相談となる。ということで、社会というものは、それ自体の中に権威を持っているわけです。

それでは、この権威はどこから来たのでしょうか。現在の日本で教えられるのは、皆さんもご存じのかの有名なルソー（1712-1778）の社会契約論です。つまり、「政府が命令する権威（主権という）を持っているのは、昔むかし人々が自分たちの生活を安定させるために、話し合って一人に政治をする権威を与えたからざんす」ということです。これは統治する権威（主権）は国民にあると言うことです。そうなると、政府とは国民がよいと考えることなら命令することができるが、国民が悪いと考えることは命令することはできない、と言うことになる。これは一見正しそうですが、その是非については後ほど見てみましょう。

キリスト教では、これと違って権威は神から来ると言います。キリストがローマ総督のピラトから裁判を受けているとき、ピラトは「お前を殺すも生かすもわしの胸三寸やで」とギリシア語で言いましたが、キリストは「もし上から与えられなければ、あなたは私に対して何の権限ももっていはいない」と言われた。パウロも「神から出ない権威はない」（ローマ､13章 、1）と言って、時の皇帝（ネロ）のために祈るように勧めています。キリスト教によれば、この宇宙の秩序を定めた神は、同様に人間社会にも秩序を定めるために社会の長となる者に権威を与えられた、と考えるわけです。

「もし、権威が神からきたとやったら、権威ある人どげんこつでも命令のできる絶対的な支配者になるんじゃなかとね」と言う人もあるでしょう。１７世紀のヨーロッパでは、「王様の権威は神からきたとやっけん、王様はどげんこつでも命令できっと（これを王権神授説という）」と言った王様（有名なのはイギリスのジェームズ１世、これは英国国教会の人です。カトリックではありません。念のため）が出ました。けれど、これは誤解。それは少し考えればわかることですが、権威が神から来ているからこそ、権威を持っている人は自分の好き勝手に権威を使うことはできないわけ。むしろ神の望み通りに権威を使わねばならない。

ここで、神の望みと、上で言った「国民の良いと思うこと」を比較してみましょう。「国民が良いと思うこと」って、どうやったら知るとができるでしょうか。それはおそらく国民の多数が望むことであって、それゆえ多数決で決まったことになるでしょう。はい、質問です。多数決で決まったことが必ずしも正しいことなのでしょうか。そうではないことは明らかだと思います。なぜなら、人間は間違うことがあるし、それ以上に自分の都合や好き嫌いを、正しいことに優先させることがあるからです。たとえば、ご存知のように、ナチスという政党は選挙で選ばれた。国民の多数決でヒトラーは、政権を握り、その後安楽死（障害者や老人、病人など働けない者を殺す）を許可する法律を作っていったり、ユダヤ人絶滅を図ったりしたりしたわけです。

あるいは時には国は国民の気に入らないことを命令しなければならないときもある。たとえば、税金。だれも税金を納めたいとは思わないけど、税金がなければ国民生活に必要な色々な物ができないわけ。もし、国民に税金のアップをすべきかどうかを聞けば、絶対多数で反対となるでしょう。けど、この「国民がよいと思うことをする」という原則に従っていたら、何年か後には国は大変な事態になるわけです。

権威に従わねばならないということは、逆に言うと権威を持っている人には、正しいことを命令する責任がある、ということです。これは団長やクラブのキャプテンや、親や教師や政治家や社長が部長が肝に銘じなければならない。それと権威を持つ人は、自分の部下について良く知る必要がある。たとえば、部下の得意ことと不得意なこと。部下のできることをさせて、できないことは別の人にまかせるとか。これが、前に言った実践知性の働き所です。今をときめくヤクルトの野村監督は、他の球団で活躍していなかった沢山のプレイヤーを自分のチームに入れて一人前に仕立て上げたのですが、（たとえば田端という投手は、ダイエー時代３年くらいでほとんど一軍で試合をしなかったのですが、昨年からヤクルトに来て二年連続で１０勝以上しているのです）。どのようにして人を育てるのか、知りたいところです。こんなことを中学生に望むのは酷ですが、今やっていることは将来への練習だと思って活用してください。

1997. 9.20　　A.O.

運動会ご苦労様でした。これでいよいよ言い訳もなくなり、勉強に集中しなくてはならない時期になりましたね。今日は私が日頃考えていることで、皆さんにも関心があるかも知れないことについて少しぼやかせてもらいます。それは受験勉強について、です。

皆さんは、試験というものがどこで始まったかご存じですか。日本のように国全体で試験に血眼（ちまなこ）になるということは、おそらく中国で始まりました。それがご存じ科挙（選挙とも言った）で、隋（581~618）の時代に採用されて、清（1644-1911）の末期まで続きました。この科挙というのは役人（難しい言葉で言うと官僚）になるための国家試験ですが、中国では少し偉い役人（たとえば県知事）になると孫の代まで遊んで暮らせるほどの収入を得ることができたので、猫も杓子もこの試験に合格しようとしたのです。現在の日本では官僚になりたい人は東京大学の法学部（文一と言います）を受け、これもとても入りにくい難関ですが、科挙の難しさはそれどころではなかった。その結果、まだお母さんのお腹の中にいるときから胎教によって子供の教育を始めるほどの大変な受験熱となり、はてはカンニングの技術もすごい発展を遂げたのです。この裏では当然何年も何年も失敗を続け白髪の老人になった人も多くいたわけで、そのような人たちの中には、「これも政治が悪いせいや」と逆恨みをして反乱を起こした人も出ました。あの太平天国の乱（1851~1864）の首謀者洪秀全もその一人。ご参考までに。

なぜこのような悲劇が起こるのでしょうか。それは、誰でもわかるように、ある一定の仕事に多くの人が群がるからです。そして、どこの社会でも収入が特別に多い仕事があますから、試験地獄がない社会なんて、この地上にはどこを探してもないと思います。ただ、今の日本では一流の高校から一流の大学、そして一流の会社というようなルートが決まっていて、そこから外れると落ちこぼれたように考えられるという誤った通念が広がっているのが問題でしょう。世の中には実に多様な仕事があって、みんなが自分の才能や好みに合わせて仕事を選べば、それほどの過当競争は起こらないのではないかと思いますが。

さて、私は現在の日本の受験の制度（ここでは高校の受験勉強を考えています）はよくない弊害が沢山あると心配している一人です。そのわけは二つあります。一つは受験勉強に比重がかかりすぎて、高校生が楽しい（というより人間らしい）生活を送るのが難しくなるから。もう一つは、受験勉強は非常に偏った勉強で、多くの高校生を勉強嫌いにして、大学に入って本当の勉強ができる時に遊びほうける大学生（こういうのを本当の穀つぶしと言う）を大量生産するからです。

まず第一の理由についてですが、先日読んだことですが、ある日本のプロ野球のチーム有名な監督は、選手に「まず野球選手である前に立派な人間であれ」と言っているそうです。なぜなら、野球選手としての人生はせいぜい１５年、これに対して残りの人生の何十年かは社会人として生きるわけ。もし野球のことしか知らなければ、残りの人生は何をして過ごせばよいのか途方に暮れるというわけです。これを受験生に当てはめますと、よい受験生である前によい高校生になるべし、となります。つまり、普通の高校生なら、たとえば家で家族団らんの時間をとる、友達と話したり遊んだりする時間をとる、あるいは趣味や奉仕活動の時間をとる。だから「受験生やさかい時間がもったいない」といって、家族の人や友達と話をしないようなことでは、まず基本的な人間としての生活ができていないということです。受験勉強も友達と一緒にすれば、それを友情を深める機会にすることができるじゃないですか（実際に友達と机を並べて一緒に勉強するかどうかは別にして、とえば学校の休み時間とか登下校の時間に勉強について話ながら互いに情報を交換したり励まし合ったりすることはできるでしょう）。

また、受験だからと言って睡眠時間をあまりに削るのもちょっとね。受験は長丁場ですから、体力にも気を配りましょう。勝負所の第四コーナーを曲がったところの１月２月になって息切れしたり風邪をひいたりないように、今は普通の人間らしい生活をして下さい。睡眠時間を削る代わりに、決めた勉強時間を集中して倍の効率を挙げるほうがよっぽど自分のためにもなります（言うは易し、ですが）。

もう一つの理由についてですが、勉強（学問）とは、アリストテレスによれば「原因についての確かな知識」です。つまり、勉強とは、物事の原因、「なぜ」と尋ねて行きながら真理を探すものです。ところが、受験勉強では、「『なぜ』なんて考えている暇があったら、答えを暗記しとけ」です。もちろん、暗記は大切なことです。私は、受験勉強がまったく無益だと言うのではありませんよ、誤解のないように。ただ、それは学問でいえば、基本に過ぎない、本当の勉強はその後に始まると言いたいのです。ちょうど、算数でかけ算を「二二が四、二三が六」とか、まず丸暗記をしないと先に進めないのと同じです。

ところが、受験勉強の場合、かけ算とは違って暗記することが多すぎるので、大多数の受験生は暗記で疲れきってしまうわけです。それより悪いことは、勉強が嫌いになることです。私が大学で働いていたとき、やっと大学にはいったんやから、これから思い切り遊びたい」と言っていた学生が結構いました。こんな風に考えている大学生は掃いて捨てるほどいるでしょう。もったいないとは思いませんか。せっかく大学で時間と環境に恵まれて色々な勉強ができるのに。高い学費を親から払ってもらって、あるいは国の税金でまかなってもらって、無数の大学生がアルバイトと趣味に時間とお金を浪費して４年も過ごしているのです（無論まじめに問題意識をもって学生生活を利用している人もいます、念のため）。これは日本全体からみても、すごい損失だと思います。高校や予備校の先生には、「大学に入ったら好きなだけ遊べるんやさかい、今は辛抱して勉強を頑張れ」と励ます人があるそうですが、私は腹がたちます。

言わずもがなですが（「言わんでもええけど」を難しく言うとこうなる）、私は皆さんに「受験勉強ボイコットのススメ」をしているのではありません。そんなことをしたら、学校を追放されるでしょう。一生懸命勉強して欲しいけど、同時にその勉強によってよい人間になるように努めて欲しいだけです。みなさんが高校生大学生になってから、上に言ったようなことにならないように、と願ってぼやかせてもらったわけです。

1997. 9.25

朝方はだいぶ涼しくなりましたが、クーラーも暖房もいらない一年中でもっとも過ごしやすく、だから最も安くつく時期ですね。一年中こんな気候だったいいのにと思いますが、でも春夏秋冬の違いがあるものよいことですよ。と言っている本人は、夏の暑さと冬の寒さにはまいっているのですが。時々友人から来る手紙に「南国長崎は冬でも暖かいことでしょう」とあるのですが、私もここに来る前は、長崎が温暖湿潤気候の日本の中でも南の方に位置するので、冬もそれほど寒くなかろうと思っていたのですが、関西では子供のとき以来でなかった霜焼けにかかりびっくりしました。あぁ冬が来るのが恐ろしい。

しかし、日本人は昔から四季の変化を楽しんできたようです。例えば、ご存知『枕草子』には、作者の紫式部、ではなく紀貫之でもなく、山上憶良でもない、そう清少納言が、その第一段に「春って曙ね。・・夏は夜よね。月の頃はモチロン！闇夜もねェ‥‥。蛍が一杯飛びかってるの。‥‥雨なんか降るのも素敵ね。秋は夕暮れね。・・日が沈みきっちゃって、風の音や虫の声なんか、もう‥‥たまんないわねっ。冬は早朝よ。雪が降ったのなんか、たまんないわ」とか書いているでしょう。皆さんも「あれ」で大変でしょうが、今から秋と冬を楽しみながら「あれ」に挑戦してください。

先週は大学受験についてぼやきましたが、みなさんは大学ってどうやって出来たかご存じですか。と言ってもご存じないことを知っているのですが、というのもこの問題は専門家にもまだはっきりわかっていないことがあるのですから。最初の大学は中世のヨーロッパ、大体１２世紀にパリに出来たと考えられています。では、それはどのようにして出来たか。

１２世紀というとヨーロッパが再び元気を取り戻してきた時代です。たとえば十字軍などはその現れですし、この時代には商業や工業で身を立てる都市が沢山生まれました。もちろんその以前にも大きな教会や修道院では、教会人が学べるための学校がありましたが、社会が活発になると、学問を学んで政府の役人や教会の重要な職務に付きたいと考える人も多くなりましたし、またすでにあった学校の教育レベルよりもっと難しいことを勉強したいという人も増えてきました。需要があるところには供給も出てくる。そこで、学問を教えて生活しようとする人たちと、学問をしたいという希望を持つ人たちが集まって、「わしは、これを教えたるさかいに、月に５万円くれろ」「いや５万円は高い。４万円に負ける」、「ほんなら、４万５千円ではどう」、「しゃあないな。それやったら一週間に３日は教えろよ」とか言って、授業料や時間割りなど必要なことを決めて学校を始めたのです。これが大学の始まりと言われています。

当時の学生の要求には、「先生はむやみに授業を休むな」、「始まりのベルとともに授業を始め、終わりのベルとともに終われ」など、現在の学生と先生に、その爪の垢でも煎じて飲ませないといけないと思うようなものもあります。

このように大学が大きくなると、ローマ教皇が教師と学生の自治（自分たちで大学の生活に必要なことを決める権利）を守り、また卒業生に資格を与えるようになりました。また、教皇もしばしばその大学の卒業生だったこともあります。そうすると各国の王様たちも、「わしの国で大学ができたら、人も集まるし、専門の役人も養成できるし、これはええがな」と言って、大学の誘致に尽力したので、パリについで、イタリアやスペイン、イギリスなどに次々と大学が建ち、１５世紀ころにはヨーロッパ全土に大学が出来ました。当時は大学の授業はラテン語で行われ、ヨーロッパのインテリ（知識人）はラテン語ができたので、スペイン人やポーランド人がパリ大学で勉強することは全然変ではなかった。

また、大学は自分の得意技を伸ばして、例えばパリ大学は神学、ボローニャ大学は法律学、サレルノ大学（ナポリの近く）は医学で全ヨーロッパで名を売るようになりました。

でも、当時はどんな授業をしていたのでしょうね。一つは古典（古くて権威のある本、多くは古代ギリシアとローマの学者の本）を読み、先生が解説していくというもの（読むはラテン語で "lectio"（レクチオ）と言いました。英語で授業のことを lecture と言うのはそのため）。このことは、今でも言えます。学問するためにはまず良い本をしっかり読みこなすことから始めるべきということです。

しかし上級になると、討論の形式もとられました。これはあるテーマについて、賛成と反対に別れてそれぞれ自分の意見を言い合い、あとで先生がまとめるという方式です。これらの討論は、あとでまとめられて本になることもありました。有名な（と言ってもこれを知っている中学生は日本で２５人くらいでそうが）、トマス・アクイナス（１３世紀）の『神学大全』という本では、例えば「神は存在するか」という問をたてて、まず「神は存在しないと思われる」と言って、そのわけを三つ挙げている。その後で「しかし反対に」と肯定する文章を引いてくる。そうしてから、神が存在すると考えられる理由を説明し、最後に初めに出した反対意見を一つづつ反論していく、というやり方がとられています。もし興味があれば、中央公論社の「世界の名著」２０『トマス・アクイナス』を調べてください。

このトマスは、生徒（Ａ）に討論をさせるとき、まずの「君の反対者（Ｂ）がどのような意見を言ったかをまず言ってみなはれ」と反復させて、その反対者（Ｂ）に「それでよござんすか」と確かめてから、（Ａ）に「ほんなら君の意見を言ってみなはれ」と意見を言わせたそうです。つまり、相手の意見を十分に知り理解してから、自分の意見を言わせたわけ。

ともかくこのような訓練を１２世紀からしていたヨーロッパの人は討論が上手いはずです。これからの日本人は、おそらくもっと自分の主張をはっきりと述べる必要が出てくるでしょう。また、これからは大学出も会社でも、もっと面接試験が増えるはずです。私も面接試験の試験官をしたことがあります。恥ずかしがって蚊の泣くような小さな声で物を言えば、試験官の評価は最低になります。逆にはきはきと明るく意見を言う人は魅力的です。そんなことも考えて、今から恥ずかしさに負けず、少しずつ訓練しましょう。このクラスはその点でとても言い素質を持った人が多いと思いますが。

自分の意見をもつために普段から年上の人と話すことは役にたちます。ご参考までに。

1997. 10. 4.　A.O.

ついにプロ野球のペナントレースも終わりに近づき、あとは私にはストーブリーグ（球団の人事移動や新人選手獲得やトレードなど）を残すのみとなってしまいましたが、中学３年生のみなさんにおかせられましては、これからがいよいよ勝負どころですね。これから皆さんが、ダラーとした腹とほっぺたを引き締め、下がった目尻と口元を上に伸ばし、中学生活で最初にして最後の真剣勝負を姿を想像すると、こちらも身の気のよだつ気持ちではなく身の引き締まる気分になります、と激励の言葉をかけたいのですが、なかなかその真剣な顔を想像できないのはどうしてでしょうか（失礼）。ずっと以前校長先生が人間の顔で一番美しく見えるのは、必死に頑張っているときの顔と言われたのを思い出します。

今宗教の時間にやっているのは倫理学と言われるものです。今テレビのニュースなどで、よく政治倫理という言葉を聞かれるのではないでしょうか。と言っても、この言葉はもう２０年くらい前からマスコミでお題目のように唱えられる単語なのですが、ちっとも現実味を帯びないのが現状です。また、医学倫理という言葉も耳にしたことはありませんか。もし耳にしたことがなければ、もう少しニュースを見たり、新聞のせめて見出しだけでも読むようにするという決心を立ててください。将来きっと役に立つ。ともかく倫理、倫理と言うけれど、日本では倫理が何か分かっている人は少ない。倫理は人間生活におっって極めて大切なことなのに。もちろん、倫理学を勉強しなくても、先日の授業でみんなが言っていたように、人は生まれつき何が善で何が悪か直感的に知っているから、常識に従って生活すれば大きな問題はありません。でも、少し複雑な問題（たとえば脳死とか内蔵移植の問題とか）が出てくると、その善悪を判断するには、ちゃんと筋道を立てて考える必要が起こってくる。その助けとなるのが倫理学です。

では、その倫理学はいつどこでどういう風に生まれたか。以前哲学という学問が古代ギリシアに始まったと言いましたね。覚えているでしょうか。もう忘れていたら2/97を取り出して読み直してください。と言っても、誰も読み直さないでしょうから、簡単にもう一度説明しますと、紀元前６世紀のギリシア人の中に、「この自然界ば一見すっと色々なもんから成っとるごたんばってん、すべて生まれたり滅びたりすっところば見っと、結局は何か一つんものが形ば変えて様々な物になっとっとじゃなかとやろか。そいやったら、万物の根源なる物があるはずばい」と考えて、その根源の物を探したことが始まりでした。そうしてある人は、「万物の根源は水たい」と言ったり、ある人は「いいや違うで。それは空気じゃ」とか、また別の人は「それは数ざんす」（有名なピタゴラス）と言ったり、あるいは「万物は絶えず変化しとるさかいに、根源の物を探すのは無意味やで」と言ったり、「バカやおまえは。変化しとうごと見えるばってん、本当の存在は変化せん。存在は唯一で不変で永遠たい」とか言う人も出てきたわけ。こう書くと、「なんや、言いたいことばっかり言うて、結局何もちゃんとした結論はないやっか」と考えるかも知れません。たしかにこんなに簡単に書くと、この人たちは思いつきをべらべらと話したに過ぎないような印象を受けるかも知れませんが、この人たちは当時の一流の頭脳の人々で、彼らの考えはそれぞれ意味があって、「ああでもない、こうでもない」と言っているうちに、徐々に何が問題なのかがはっきりして来たのです。

これらの人は、自然（フィシス）についてあれやこれやと考えたので、自然学者と言われます。そして、面白いことに自然学者は皆いわゆるギリシア本土の人ではなく、ギリシアの植民地の人だったのです。これは中学では習わないことですが、今のギリシアにギリシア人が住み着いたのは紀元前１５～１０世紀のことなのですが、ギリシア本土は山がちで耕地が少ないので、昔から地中海の色々なところに船で出かけていって、故郷と同じような町（ポリス）を立てたのです。今でも有名なナポリ（これはネア・ポリス、つまり新しい町という意味）とかマルセイユはギリシア人の立てた植民都市だったのです。

ところが、紀元前４９０年ごろにペルシア人とギリシアの戦争があり（ペルシア戦争と言う）、この戦いはアテネの活躍によってギリシア側の勝利に終わります。それ以降アテネが政治的にも経済的にもギリシアの中心地となるのです。そうなると豊かさと名誉を求めて、たくさんの人がアテネにやって来て、この町は文化の中心にもなり、多くの思想家がここで活躍することにもなりました。アテネが栄えたもう一つの理由は、ペルシア戦争後民主政治が発達したことです。「以下は7/97を参照」と言っても参照しないでしょうから、もう一度軽く説明しますと、民主政治では議論討論が大切。そこで弁論術（難しい言葉では修辞学）を教える家庭教師がわんさと出てきた。彼らは自分を知恵者（ソフィスト）と呼び、出世を夢見る若者に「本当か嘘か、善か悪かはどうでもええ。相手を言い負かしさえすればええんや」と言って（つまり自然法なんかないと言ったわけ）、自分たちを売り込んだわけです。

この状態を憂いたのがソクラテス（BC.469-399）。彼は、学問の目的はお金もうけではなく人を良いものにすることと考えたのです。そのために、善とはなにか、善い人とはどういう人か、善い行ないとはどういう行ないか、悪とは何か、と言った問題を自分で考え、またほかの人々にも考えるようにさせたわけ。これが倫理学の始まりです。ソクラテスは、自分を死刑にしようとした裁判の中で、「アテネ人諸君、・・最も偉大にしてかつその知恵と偉力とのゆえに最も名高い都市の民でありながら、出来る限り多くのお金を貯めることや、名聞や栄誉のことだけを心配して、かえって知恵や真理やまた自分の霊魂を出来る限り良くすることなどについては少しも気にかけないことを、君たちは恥ずかしいとは思わないのか」と言っています（プラトン著、『ソクラテスの弁明』）。 今の日本人にも言える

ソクラテスは倫理学を建て始めたが完成しなかった。この事業は、彼の弟子のプラトン（BC.427-347）とアリストテレス（BC.384-322）によってほとんど完成されます。しかし、このギリシアの最高の哲学者たちにもはっきり分からなかったことがあります。それはなぜ人間は悪を行うのか、ということです。ソクラテスは、人間は何が善であるかを知れば、必ず善を行うと主張しました。つまり、誰も故意に（わざと）悪を行うものはなく、人間が正しくないことをするように思われる場合、それは人が善を知らないからだと言うのです。アリストテレスも大体同じ説明をしています。でも、そうでしょうか。人間には、「わかっているけど やってしまう」ということも あるでしょう。答はまたの機会に。

合唱コンクールや弁論大会、それぞれ頑張って下さい　1997.10.9.　A.O.

中間テストの真っ最中、陣中見舞い申し上げます。「人生らくあり♨や苦もあるさ♪」と歌いながら、この試練を乗り越えて下さい。ということで今日はみなさんが難しいテストに取り組んでいる最中ということを考えて、いつものようにデ深遠なだめになる内容の文章はひかえて同じくだめにはなるのですが、読みやすい感動ものを紹介ッたい。てなわけで、ヂストに疲れた頭で哲学の文章を読めば、脳味噌が腸捻転を起こしたりして、明日学校を休むんでことになると、業務上過失致死なんかで長崎地方裁判所に訴えられたりしたらいやですから。諸君は鈴木アナウンサーというひとを知っていますか。私は昔ライオン番組の司会をしているのを見て軽い人だなと思っていたのですが、次のことを読んで自分の浅はかな判断を思い知りました。

世間では、よく才能のあるひとを問題にするが、人は誰でも他人にない素晴らしい才能を持っているのだと私は信じている。

才能のまったくないひとなど、この世には存在しない。才能がないと絶望している人がもしいたとしたら、それは、周囲もその人自身も、自らの内に秘められた才能の存在に気がついていないのである。

才能について考えるとき、私に忘れられることのできない一人の少女がいる。それはまだ私が十代の頃に出会った少女である。

私は毎朝三時に起きてこどもたちの朝食をつくった。六十人人分の朝食。しかし実際はそれだけでは足りない。約半数近い三十人が学校へ通うので、その子たちの昼の弁当も用意しなければならないのだ。給食はまだ始まっていなかった。つまり、朝はまずなっと百人分の食事づくりから始まるのである。

そうこうしているうちに、冬が来てしまった。寝具も不十分だから、小さいこどもたちはいつまでたっても寒さのなかにあった。私はイッチャクの床の上に寝具をしき、犬の牙にかんで寝巻の裏地中にあった。

どうせ死んでしまうのだから、せめて生きている間ぐらいは、この世に生きていたあかしを立てたいと願った。そして私は小さい頃から読書が好きだったので、どこかの静かなところで一行でも多く本を読みたいと思って、はるばる北国へと旅立ったのである。

そこで、戦争は終わり、私は兵隊にとられることもなかった。そのとき私は十八歳だった。

戦争が終わってまもなくのことである。一人のアメリカ人教師が私を訪ねてきて、こんなことをいい出した。

「いま日本には戦争で親をこしたこどもたちがたくさん放浪しています。私たちだけではとても手が回りません。あなたにも手伝っていただきたいのです。こどもたちの面倒をみてもらえますか」

私はこの申し出を快く引き受けた。そのとき私の頭にあったのは、“どこかへ奉仕活動に行けばいいのだろう”というごとだった。

「ところいですよ。私の中をみることなら喜んで協力いたします」

翌朝になると、また教師さんがやってきた。だが、その姿を見て私は興を抜かされたりに驚いた。教師さんは一人で来たのではなかった。下は三歳から上は十三歳までの浮浪児をなんとか十人も連れてきたのである。

（1）可哀想な

（2）背筋凍　海峡と雷鼎色で有名。また日本で一番のリンゴの産地でもあるごとはこの作じ

この続きはまた今度。試験がんばって下さい。少々がんばって血が出たり骨が折れたりしませんし、まして死ぬことなどありませんから、安心して勉強してください。

拝啓十二期生様

テストが帰って来て悲喜こもごも、阿鼻叫喚の三年一組かと思いますが、成績が悪くても間違えても自暴自棄にはならないでください。もしそうなったら、せっかくのエネルギーを溝掃除や草刈りなどの、地域社会の役に立つようなことに費やすようにしてください。しかし成績が悪かったら、気合いを入れて反省しなければ、私が中一の時から言ってきたように、泣きの涙で暮らすようになるので、是非ともまじめな反省をお願いします。さて、

それは洗濯だった。朝から晩まで彼女は黙々と洗濯をした。何しろ六十八人分である。私は朝三時に起きて食事づくりをし、半分のこどもが学校へ行っている間に買い出しに行く。帰ってくると小さいこどもに昼食を食べさせ、すぐに夕食の準備に入らなければならない。その他いろんな雑用がある。もし、これに洗濯までやらされたらおそらく私は三日ともたなかったと思う。

しかし、その精薄の少女は、冬になっても洗濯を続けてくれた。洗濯機などあるはずもない。すべて手洗いである。厚い氷の張った津軽の水の冷たさはいまさら説明するまでもないだろう。彼女の手はしもやけとアカギレで饅頭のようにふくれ上がり、しかも血だらけだった。

私はこの少女に何かお礼をしたいと思った。しかし、アメ一つ、せんべい一枚ない生活なのだ。でも私が「ありがとう」というと、おそらく態度でわかるのであろう、顔を見上げてかすかに微笑してくれた。ほかの小さなこどもたちが、「おねえちゃん、ありがとう」というと、あ、笑ってくれたのかなと思うくらいかすかに表情を崩してくれた。それがその子にしてやれるただ一つのお礼であった。

また、私は少しでもヒマがあると、彼女の手を自分の腋の下に入れて暖めてやった。十分でも二十分でも、時間があればじっとそうしていた。夜は毎晩のように、その子の手を腋の下にはさんで寝た。私はいまでも覚えているが、あまりの冷たさに自分の心臓が凍りつくようであった。しかし、それが私にできる精いっぱいのお礼だったのである。

どんな人間にも才能はある

その後まもなく私はその孤児院を去った。何人かの後継者が現れてくれたからである。しかし、私がいなくなってちょうど一週間後に、その子は施設の門の前でクルマにはねられて、即死した。耳が不自由だったあの子は、クラクションの音に気がつかなかったのであろう。

だが、私はこの幸薄い一人の少女との交友を通じて、つくづく感じたことがある。それは神様はどんな人間にも、たった一つだけは、他人にない素晴らしい才能を与えてくださっているということである。

その才能は勉強で伸びる人もいるし、器用さで伸びる人、勇気で伸びる人、やさしさで伸びる人、才能というものは、さまざまな伸び方をするのである。それが二十代で伸びる人もあれば、七十代で伸びる人もある。

あの子は洗濯をすることで自分の持っているたった一つの才能を発揮した。あの子は親の名前も顔も知らないわずか十余年の短い生涯を終えた。あの子はたった一つの才能を自分のためにも生かし、六十七人のこどもたちにも分け与えて死んでいった。私は、いまでもあの子は、きょうも天国のどこかできっと皆の洗濯をしてやっているにちがいないと信じている。

これは『気くばりのすすめ』という一〇年くらい前に有名になった本から引用したものです。この話のタイトルは「才能について」です。皆さんは、この鈴木アナウンサーの言うように、誰にでも才能があると思いますか。私は個人的に、この意見に賛成です。

ただ、ここで著者が言う才能とは、飛び抜けた天才的な人がもつ才能のことではなく、地味であるが確かに人の役に立つ資質を言っていることに注意してください。この少女のすごいところは、洗濯の技術ではなく、その目立たないしかもつらい仕事を文句も言わずにこつこつと続けたことではないでしょうか。そして、これは時には天才的な仕事よりずっと人の役に立つ。この「黙ってこつこつ続ける」ことは、言ってみれば誰にでもできる。けど、簡単ではない。

皆さんの中には、どうしても一つか二つ、あるいは五つか六つの苦手な科目があるかも知れません。でももし、にも関わらず「こつこつ」勉強するなら、その人には才能があると言い切れる。そして、将来きっと何かの分野で活躍すると思います。今、毎日決まった時間勉強するというのはなかなか難しいことですが、これができたら将来どんな仕事についても、安心して見ておれるので、そんな人になった欲しく、先生たちはときどきいやみ（シェー）を言ったり、ガミガミ言ったり、怒鳴ったりするのです。どうか、意志の強い人間（意志が強い人間には軽薄な人はいない）になるよう努めて欲しいです。

もうひとつ、この話で私が勝手に考えたことですが、みなさんの中には「天国や地獄なんてあるもんか」と言っている人もいるでしょうが、もしそうならこの世はまったく不公平とちゃいまっか。だってそうでしょう。この女の子の人生は一体全体何だったのでしょうか。運良く鈴木アナウンサーがこうやって本に書いてくれてそれがベストセラーになったのですが、名前がわからないから誰にも誉めてもらえない。確かに、あの施設の子供たちと鈴木アナウンサーから感謝されたけど、すぐに交通事故で死んでしまったので、楽しい生活はこれぽっちもしていないでしょう。

あの人を感動させることをしながら人知れず死んで行ったあの子に対して、世の中には自分は何も苦労せず、親のすねをかじって安楽な生活をしている人、さんざん悪事をして他人に迷惑をかけたり傷つけたりして自分は威張るくさって生活している人。悪事がばれたら、「そんなことは記憶にございません」とかしゃーしゃあーと言ってのける人もいるわけ。もし人生が地上の人生だけで終わりなら、これはちょっと不公平やと思いませんか。著者は、あの女の子が天国にいると言っていますが、私もそう思います。そして、天国で終わりのない幸福を味わっていると思います。それが正義というものじゃないでしょうか。もし天国と地獄がなければ、良心に従って生きるのは、まったく馬鹿げたことになるでしょう。

というようなことを皆さんも考えてくれれば嬉しいです。

一九九七年十月二〇日

A.O.

「子を持って初めて知る親の恩」とか、「親孝行、したいときには親はなし」と言うのを知っていますか。今日授業で少し見たことですが（残念ながら、消しゴムを投げること、それを避けることのみに注意を集中していた不届きものも、舟を漕いでいたけしからん人もいたようだが）、親に対する子供の義務とは大切な勤めなのです。家族のみんなが健康なときは、それほど考えないかもしれませんが、非常事態になると親子の情とは何ににもまさって有り難いものだということをお話したい。

昭和１９年秋に学徒動員で出征した学生さんたちが、戦場で綴った日記や手紙を集めて、戦後『聞けわだつみの声』という本ができました。私もかつて読んで感動したのですが、そのいくつかを紹介したいと思います。それは親子の情というものが今もいつも同じであることを理解するのに役に立ち、また、現在の私たちの享受している平和を感謝できるのではないかと思うからです。これを読めば、もう親に向かって生意気な口を聞いたり、先生の口まねをしたりしなくなる、という淡い希望を抱きつつ。

最初は、昭和２０年４月元山（朝鮮半島）から沖縄に神風特攻隊として出撃した２２歳の京大生（少尉）が出陣直前にお母さんに書いた次の手紙です。「お母さん、とうとう悲しい頼りを出さねばならないときが来ました。『親思う心にまさる親心、今日のおとづれ何と聞くらむ』（吉田松陰の最後の句）。この歌がしみじみと思われます。本当に私は幸福だったです。我ままばかり通しましたね。けれども、あれも私の甘え心だと思って許して下さいね。晴れて特攻隊員として選ばれて出陣するのは嬉しいですが、お母さんのことを思うと泣けてきます。母チャンが、私をたのみと必死で育ててくれたことを思うと、何も喜ばせすることができずに、安心させることもできずに死んで行くのがつらいです。・・・ひょっとすると博多の上を通るかもしれないので楽しみにしています。陰ながらお別れしようと思って。・・母チャンが私にこうせよと言われたことに反対して、ここまで来てしまいました。私としては希望どおりで嬉しいと思いたいのですが、母チャンの言われるようにした方がよかったかなあと思います。でも、私は技倆抜群として選ばれるのですから、喜んでください。・・ともすればずるい考えに、お母さんの傍らに帰りたいという考えに誘われるのですが、これはいけないことなのです。洗礼を受けたとき、私は「死ね」と言われましたね。・・すべてが神様の御手にあるのです。神様の下にある私たちには、この世の生死は問題になりませんね。・・・私はこの頃毎日聖書を読んでいます。読んでいるとお母さんの近くにいる気持ちがするからです。私はこの聖書と賛美歌を飛行機につんで突っ込みます。・・・（結婚の話を断るので）許してください。これはお母さんにも言わねばなりませんが、お母さんは何でも私のしたことは許して下さいますから安心です。・・・お母さんは偉い人ですね。私はいつもお母さんに及ばないのを感じていました。お母さんは、苦しいことも身に引き受けてなされます。・・私はお母さんに祈って突っ込みます。・・もうすぐ死ぬということが、何だか人ごとのように感じられます。いつでもまた、お母さんにあえる気がするのです。逢えないなんて考えると、ほんとうに悲しいですから。」

次は２３歳の慶応出身の方。出水の基地に待機していた時、四国から訪問に来たお母さんに合われる日の日記。「・・・軍人になっても母が恋しいのであります。幼児のように、　学生時代はそうでもなかったのですが、海軍に入って特に痛切に感じます。意志が弱いからでしょうか。それとも人の子としての情なのでありましょうか。・・自分には母がある、有り難いことだと思いました。遠路はるばる逢に来てくれる母が・・。」

「お母さん、あなたはよく言っておられましたね。私が学校を出たらいっしょに京都で暗そうよと。・・お母さん、今となっては私と暮らす望みもなくなりました。・・現在何を頼りにあなたは生きるのですか。老いし母よ。私はあなたが気の毒でならないのだ。」

時々戦争中のフィルムで日本の戦闘機がアメリカの戦艦目指して突っ込んでいくのがありますよね。戦艦からは高射砲や機銃が雨あられと打ってこられる中を遮二無二突っ込むのを見たことがありませんか。そして大部分は撃ち落とされてしまう。あれだけを見ていたら、なんとも思わないかもしれませんが、あの飛行機の中には、このような生身の人たちがいたのです。そう考えて映像を見ると、かわいそうで見てはいられなくなります。

奈良時代の万葉集の防人の歌の中には「父母が、頭かき撫で幸くあれて、いひし言葉ぜ忘れかねつる」（父母が私の頭を撫でて無事でいろよと言った言葉が忘れられない）とか、「水鳥の発ちの急ぎに父母に、物言わずに来にて今ぞ悔しき」（水鳥の飛び立つような、出発のあわただしさに、父母に別れの言葉も言わずに来てしまって、今になって後悔している）という歌があります（と偉そうな顔をして言いますが、実は今調べて初めて知ったのです）。

「父母を敬え」は、戦後何か古くさい軍国主義的な考えと見なされた傾向がありますが、これは軍国主義的でも何でもなく、ただただ人間性に従った掟です。古代のエジプト人も、２３世紀の日本人も同じ。そういうのを自然法と言います。

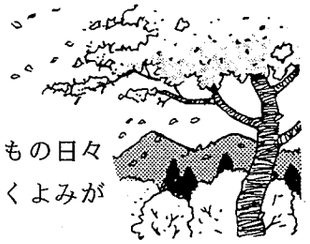
ただ、上の例は戦争という、私たちの平凡な生活とはだいぶ違う状況の中のことなので、特別に感情が強く現れていると思われます。でも、親子の情は、戦時でも平時でも同じでしょう。今は｛自分のことなんか全然考えてくれていない」なんて万一思ったとしても、いざとなったら大変な心配をされるはずです。あるいは逆に「親はうるさい」と考えている人もいるかもしれませんが、子のことを考えて行っているわけですよね。

また、上の手紙を書いた人たちも、平和なときには家族の中でけんかもしたでしょう。あの少尉さんも、将来の進路についてはお母さんと意見が違ったようですね。これは当然です。家族といっても異なる人間ですから。でも異なるけれど、信頼の絆によって結ばれている。意見が違ったり（意見に多様性があることは決して悪いことではありません）して時々けんかもするけど、一つにまとまり信頼しあうことができるためには何が必要でしょうね。　私の意見で恐縮ですが、一つは家族のありがたさを考えることでしょうか。と何年かすれば皆さんも家を離れることになるでしょう。子供が育って独立するのは自然の理です。もちろん、そうなっても親子の縁は永遠に続くのですが、ともかく親といっしょに住めるのはもうあと数年しかないので、それまでの時間を大切にということです。

1997. 10.27　A.O.

先日特攻隊員の人たちの手紙を紹介しましたが、あれは『ああ同期の桜』という本から引用しました。そのついでに少し読んでいくと、あの本がどうしてできたかが簡単に書いてありました。どうも戦後、戦争を回想するのははばかられたようで、遺族の人たちは黙っていたようです。ある人がこう言っています。「終戦後、一時は学徒動員の若者たちが勇躍して征った気持ちや、遺族の思い出を、一片のセンチメンタルだと何かしら軽んぜられ、残された者は今日まで、何も言わずにひたすら歯をくいしばって耐えてきた」と。この本の前書きにも「死者は死者であるがゆえに、また永らえた者はいろいろな気おくれと遠慮ゆえに、２０年間沈黙のうちに時を送った」。そうして戦後２０年たって、これらなくなった人たちの遺書や日記や手紙、また遺族の人たちの回想などを集めてできたのがこの本だったそうです。私も読み直してみて、これも知って欲しいと思うものが続々出てきたので、そのうちのいくらかを紹介させて下さい。

ご主人に先立たれ親一人子一人だったあるお母さんの手記です。息子さんの基地（宇佐、大分県）の近くに引っ越してきて、息子さんの外出が許されたとき、親子水入らずで話すことができたのですが、昭和２０年４月、何のお別れの言葉もないまま帰らぬ人となったようです。お母さんは出撃のことを知らないので「落花の音にも耳を傾け、物音のたびに縁側に走り出て、今にも笑顔がそこに現れるかと、立ち尽くしたことが幾度かありました。が、ついに初雄は帰って来ませんでした。・・・初雄は思い残すことなく瞑目したでしょうが、ただ一つのものを失った私は残念です。心残りです。それは親の夢に過ぎないかも知れませんが、この子に何か才能があるならば、学業を終え社会人になってから十分にそれの発揮されるのを願い、将来に期待をかけて育てて来ましたものを・・・。あれから２０年の歳月が流れました。『去るもの日々にうとし』とか。しかし私の想い出は、年ごとに咲く桜とともに、強くよみがえり、生命の続く限り消え去ることはないでしょう。」



これは妹さん。「２０年も経った今でも、ぬっとどこかから、首を出しそうな気がするのです。小さなやさしい目をしただんまり屋の兄が・・。その兄は、昭和２０年４月１６日に戦死した。最後に『空母に突入する』と無電を打って来たそうです。本当に怒りに燃えて、空母を闘牛士の赤マントに見立てて突っ込んで行ったのでしょう。日頃はおとなしい牛のような中村栄三の肉体は、その日限りで再び私たちの前には姿をあらわさなかったのです。」

「帰らざる息子の誕生日来る毎に　年齢かぞえみるおろかしの母。」

「夢の間に２０年。セブ島（フィリピン）より転出の途中行方不明という公報を戴いております以上、当然のことながら遺骨の箱の中あの『堂宮実』の紙一枚。それ以来息子の最期の様子を何とか聞きたいと、それのみで今日まで生きて参りました。」

次のは、まだ戦争中に戦地にいる一人息子にお父さんが書いた手紙です。「吾々両親は、完全に君に満足し、君をわが子とするすることを何よりの誇りとしている。・・・吾々夫婦は、今までの２４年の間におよそ人の親として受けえる限りの幸福はすでに受けた。親に対し、妹に対し、なおし残したことがあると思ってはならぬ。・・・お祖父様の孫らしく、また吾々夫婦の息子らしく、戦うことを期待する。」戦時中ですからとても勇ましい文章ですが、その裏に父親としての無念の気持ちがにじみ出ているとは思いませんか。

最期に、再び特攻隊としてなくなった青年の遺書のような手紙で、残された家族への気持ちを綴ったもの。「お父さま、お母さま。本当に優しく、心から私を可愛がって頂きましたこと、有難くお礼申します。この短い文の中に、わたしのすべての気持ちを汲んで下さい。これ以上のことを言うのは、水臭く、妙な感じがすると思います。私は一足先に死んでいきますが、私が、あの弱かった私が、国家のために死んでいけることを、喜んで下さると思います。長い間お世話になって、何一つ父さん、母さんに喜んで頂けるようなことも致しませず、誠に相済まぬと思っております。私の死は、せめてもの御恩返しだと思ってください。・・良和ちゃん、詳しいことは兄さんやお父さん、お母さんから聞いたことと思う。体を第一、次に勉強だ。立派な日本人になって、兄さんの後を継いでくれ、国家を救う者、これからの日本を背負う者は、良和ちゃんたちだよ。敵が九州の南まで来ていることを思って、毎日毎日、一生懸命にやることだ。日本の宝だよ、良和ちゃんは。兄さんの最期の言葉を、無にしないようにしてくれ。最期の瞬間まで戦える、強健な身体と精神の養成に努めよ。お父さん、お母さんにあまり心配かけるな。和子ちゃん、日本人らしい女になれ。強く優しい女性となれよ。良い母親となり、良い子を生んで日本の宝となせ。兄さんの代わりに、お父さん、お母さんに、孝行してくれ。」

戦争の話ばかりですみません。でも、私は、戦後の日本の発展がこの人たちの犠牲と無関係ではないと思うので、知っておいて欲しいのです。最期の人が弟と妹への忠告は、今では「軍国主義の古い考え」だとして非難される可能性があります。でも、そうでしょうか。第四戒は「父母を敬え」ですが、この「父母」の中には国も含まれます。キリスト教は、人間が自分の生まれた家族はもちろん、土地や国を愛するのは徳（良いこと）だと教えます。国を愛することを英語で "patriotism" と言います。"patria" とは「祖国」のことです。私たちが、自分の国や地域を愛して、より良い国にしていこうとすることは大いに誉められるべきことです。だから、皆さん、政治問題に少しは興味を示してください。政治によって国を良くにも悪くにもなるから。その意味で今の行政改革の問題は大切ですぞ。

この「祖国愛」と区別しないといけないのは、"nationalism"（日本語では「国民主義」と訳される）で、これは自分の国あるいは民族が一番で、他の国は劣っていると考えることです。第一次世界大戦は、もろに国民主義の結果起こった惨事です。教会は、この "nationalism" を断罪しています。

どの国にも長所と短所がある。人間と同じ。

私たちは、日本を愛すると同時に、他の国の優れたところも認める必要がある。「カトリックであるとは、だれにも負けないぐらい祖国を愛し、同時に、あらゆる国々の気高い念願を自分のものとすることである。どれほど多くのフランスの栄光が私の栄光であることか。同じように、ドイツ人、イタリア人、イギリス人・・・アメリカ人、東洋人、アフリカ人が誇りとするたくさんのことは、私の誇りである。カトリックとは、大きな心、広い心を持つことだ」（『道』５２５）。もし、みながこのように努めれば、戦争なんか起こらないでしょうに。

また、日本の歴史や文化や良い伝統もよく知るように努めたいものです。そのためにこそ、国語の勉強、特に古典や漢文の勉強は大切だ。受験を楽にするために高校で漢文を教えるのをやめようという人がいるみたいですが、まったく浅はかな考えだと思います。それではまた。

1997. 10.30

昨日久しぶりに教室で授業しましたが、月曜日はなかなか思うように進まないのが残念です。そこでこの手紙をもっと書きたいのですが、書きたいことは山ほどあっても、それを上手にまとめるのは時間がかかるので、時々不発の週もあるのです。先週みたいに。ともかく、今は中学３年でも１０年後は２５才、その未来の諸君を考えて、もういっちょ前に社会人のかっこなんかして、車なんか運転してスピード違反で警察に捕まったと思ったら、その警官が三川台の卒業生だったりして、なんてことを想像しながら書いているのです。

高校では、社会は、日本史、世界史、地理、現代社会のうちから一つか二つを選ぶことになるのですが、私は個人的に世界史を勧めます。その理由は二つある。一つは、中学では、日本史、地理、公民はかなりのレベルまで学習するのですが、世界史は非常に不十分だからで、また高校で勉強しないと、その後から勉強しようと思っても簡単ではないからです。もう一つの理由は、世界史の知識が国際化が進む現代社会において必要になことが多いと思われること。今から１０年後、出張で例えばパリに行ったとしよう。商売相手の会社の人が町を案内して、「ここでパリコミューンのときに市街戦が行なわれたのです」とか言われて、「パリコミューンて、何ね。そいはフランス料理ね」なんて言ったら、相手は「こんな教養のない人は信用できへん」とフランス語で考えて商談がパーになるかもしれません。

ところで、世界史の勉強をしたらすぐわかることですが、西洋の歴史にはキリスト教の影響がすごく大きく、教会の関係する事件が多い。そして、教科書には、カトリック教会に関して時々ひどい誤解が平気で書かれているのです。２年くらい前に、現在の日本の歴史の教科書が、明治以降何でもかんでも日本が悪いというような印象を与えると言って、『教科書の教えない歴史』という本が出てベストセラーになったことを覚えていますか。これと似ていると思いますが、歴史の教科書にはカトリック教会は極めて批判的に書かれています。そこで、私も『教科書の教えない教会史』を書くことはできないにしても、いくらかの明らかな間違いは、教えておきたいのです。その第一の問題として、悪名高い「免罪符」。

皆さんはロシアの文豪ドストエフスキーの『罪と罰』という本を知っていますか。「罪」と「罰」は似て非なるものです（似ているけど違うということを難しくいうとこうなる）。だから「罪が赦される」のと「罰が赦される」ことは別のことになりますよね。これを例を挙げて説明したい。

私は小学生のころよく友達と野球をしました。野球に適した広い場所は少し遠くにあり、また普通中学生に占領されていたので、我々は普通アパートの間の空き地を使っていました。そうすると、よくボールがアパートのベランダに飛び込むわけ。そして時々窓ガラスを割ってしまう。今でも覚えているのは、一度ある家の台所のガラスを割ったのですが、そのガラスの側には叔母さんが作った夕ご飯（魚のフライ）が置いてあり、めちゃくちゃ怒られた。ともかく、いくら恐くても近所の人は顔なじみですから逃げても仕方がないし、逃げたらボールを返してもらえないので、いやいや謝りに行くわけです。普通は小言を言われて釈放されるが、時々赦してくれないおっちゃんやおばちゃんがいて、「おまらじゃらちがあかん。親を呼んでこい」と言われる。そこで誰かのお母さんに来てもらって謝ってもらう訳です。

でもトイレの読者はぢのもとだそうです。

でも、ことはこれでおしまいではない。ガラスを割ったのですから、バラバラに散らばったガラスの破片を掃除して（掃除した記憶はないのですが）、窓ガラスの弁償をしないといけない。つまり、悪いことをしたら、二つのことをしないといけない。一つ目はその悪い行い（この場合は他人の家のガラスを割ったこと）、もう一つは与えた損害を弁償すること。

これと同じことが罪の赦しにも起こるわけ。罪とは神様に侮辱を与えることです。たとえ、罪を犯しているとき、自分は神様を侮辱しているんだという意識がなくてもです。というのは、罪とは神様の掟を破ることですから。たとえば、家でお父さんが家族全員そろって夕食を食べる、みんなが揃うまで夕食は食べないという規則を決めたとしよう。それなのに、ある子供がいつも勝手に先に一人で食べたとすれば、この子が「僕は別にお父さんを憎んでいるわけじゃないよ」と言ったとしても、行いによってお父さんを侮辱していることになるでしょう。これと同じです。

だから、罪を犯したら、まず神様に罪を赦してもらう必要がある。しかし、その後でその罪によって生じた損害を弁償する必要があるわけ。これを償いと言う。カトリックの教えでは罪は、完全な痛悔をするか、「赦しの秘跡」によってしか赦されない。しかしひとたび罪が赦されたら、償いはいろいろな方法ですることができる。たとえば、お祈りとか慈善事業とか。この世で償いをし残したまま死ぬと、人は煉獄というところで残っている償いをしないといけない。天国に行くには霊魂が完全に清められていないといけないから。しかし、人間は怠け者ですから、普通は自分から償いを一生懸命することはないですよね。そこで教会は、１３世紀ごろから信者が進んで償いをするようにと、また、自分のためにもらった償いの赦しを煉獄の霊魂に譲るようにと、「免償」ということを積極的に進めたのです。それは、これこれのお祈りをしたら、これだけの償いに、これこれの善業をしたら、これだけの償いになると、教会が決めたわけ。もちろん、免償を受けるためには、前もって罪を赦しの秘跡によって赦されていなければならない。さて、皆さんの教科書には「ルターの抗議。免罪符の販売は、教会のために良い行いを積めば、罪が赦されるという考えによっていた云々」（１０４ページ）とあるでしょう。ここの間違いが分かりますか。それは罪の赦しと罰の赦しを混同していることです。免罪符（それを買えば罪が赦されるお札）なんて存在したことはなかった。この免罪符というのは、実は償いが赦される（または減らされる）ために、当時古くなっていたローマの聖ペトロ教会の改築のための寄付をすることでした。だから、免罪符ではなく、免償符なのです。このことはルターもちゃんと分かっていたのです。

と説明しても、「ややこしか、どげんなっとるとかなんかわからんばい」と言われるでしょう。確かに罪と罰の区別は、ちとむつかしゅうござる。私の知り合いで、かつて某予備校の世界史の人気先生で、今は京都の某私立大学の教授をしている人に、ある日「免罪符は本当は罪を赦すものではなく償いの赦しですから、本来は免償符と呼ぶべきなんですよ」と言うと、「それは知らなかった」と言っていましたから、皆さんが分からなくても仕方がない。けど、高校でそのように教えられたら、これは間違ってるでと分かってください。

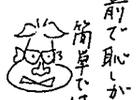
質問、その他があればいつでも受け付けております。

それでは、気温の変化の激しいおり、風邪に気をつけてください。

1997.11.11　　A.O.

昨日は柳原先生に教えてもらいディベート形式の授業ができ、私はとても喜んでします。中学３年生にして、あのような複雑な問題についてはきはき意見を言ったり、またちゃんと人の言うことを聞いたりできるのは、実に大したものだと感心しました。

みなさんにとっては受験は来年の１月末から始まりますが、大学入試は実はもう始まっています。１１月になると推薦入試という形式の入試が始まるのです。それは大学が、高校の成績やら他の実績（スポーツや他の活動）を評価して生徒を採る制度です。これで合格した人は、年が明けて行なわれる入学試験（一般入試と言います）を受けずに大学に入れるわけで、高校生活の残りを受験勉強から解放されて過ごすことができるってわけ。ところで、この推薦入試には必ず面接試験がついています。普通は一人で、二人の面接官（大学の先生）の前で面接されるわけですが、受験生が多いときには、団体で面接を行うこともあります。私もこれらの面接官の仕事をしたことがあります。そのとき、落ち着いてはきはきと発言できるかどうかが、とても大切になってくる。もちろんよく発言したとしてもあまりにも出鱈目なことを言うだけだったらだめですが。また、真面目な問題について何か意見を持っているかどうかもチェックポイントです。そのようなことを考えても私は今日のような授業がしばしばできたらなと思うわけであります、はい。



ところで、今日授業中に出てきたことで、「人間はルールに従って生きる者だ」という意見が出ました。これは正しいのですが、ではそのルールとはどのようなものでしょうか。実はこの問題は以前授業で説明したのですが、大切なのでこの機会を利用してもう一度説明させて下さい。人間が従うべきルールには二種類ある。一つは、誰でも認めることですが、国や地方自治体の法律（人が定めたので人定法と呼びます）。と言うと、「人の定めた法律の他に従うべき法律があるの」と聞くでしょう。

ちょうど自然界の動きを定める自然の法則があるごとく、人間がかく動くべしを教える法律がある。これは、人間が定める法律以前にあるものだから、「自然法」と呼ぶ、それは「道徳法」とも言い換えられるし、簡単に言うと「人の道」となる、と言ったことを覚えておるでしょうか。

しかし、授業でも言ったように、この自然法を認めない人もようさんおる。そのような人は、「人間の行いの善悪を定めるのは、人の定めた法だけで、道徳法なんてないんだ」と考える。つまり「どんな法律でも、制定されたら、それは絶対に守らなければならない」、言い換えれば、「悪法もまた法なり」ということ。実はこの考えを実践してひどいことになったのが、ナチス・ドイツです。何度か言いましたが、彼らは安楽死を認める法律を作って、「楽に死なせてあげる人」の範囲を広げていって、挙げ句の果ては、老人、障害者、精神病患者など、彼らにとって「役に立たない人間」を殺すことが許されるようになったのです。自然法がないと考える人は、また、良いことと悪いことは多数決で決めることができると主張する。先日誰から言ってましたが、ある国で離婚の賛否を問う投票があったのですが、これはそういう考えが下敷きになっている。

自然法があるかないかは、みんなが考えてください。ここではカトリック教会の考え（私もこれに賛成）を説明します。天に軌道のあるごとく、人には守るべき道がある。（念のため言っておきますが、このことはアリストテレスや孔子などのギリシアや中国の聖賢も教えている）。この道は万物の創造主が造ったもので、人間の勝手になるものではない。それゆえ多数決で決めるなんてことは論外。この道を外れれば、必然的に人間は不幸になり、社会は混乱する。人間が作る法は、もし自然法に反するならば、それは法律ではない。だから、従う必要はあらね。「悪法は法にあらず」なのです。だから、「離婚が法律で認められているから、してもかまわない」と言うことは筋違いで、問題は「離婚が人の道かどうか」を考えるべきなのです。これこそ授業でみんなに考えてもらいたいことなのです。このことは堕胎にもっとはっきりと当てはまるが、それについてはまた来年。

ところで、この世間には、「道徳に従って生きようと努めるなんて理想主義や。そんなことしとったら、この弱肉強食の世の中で生きていけへんで。せやから、善悪よりも、損得を考えて生きまひょ」という人も大勢います。ここで、最近聞いたある人の物語。その人はある西洋の国の大会社の部長クラスの人でした。でも会社の経営が難しくなり、社長から「お前の部下２０人の首を切れ」と言われました。でも彼は、部下がみんな長年会社のために働いてきたこと、家族がいることなどを考えて、「そのような社員を一方的に解雇するのは不当です。私にはできません」と言いました。すると社長は、「ほんならお前が首や」となった。「長いものには巻かれろ」式の考えの人なら、この人のやり方は「いわゆるお人好し」で、理想主義者の烙印を押されるでしょう。実際、その人は途方にくれました。家族もいましたし、仕事がなくなれば食べていけない。でも、退職金のことで会社と争い、正当な退職金（５年間仕事なしで食べていけるくらいの額）をもらって、今は新しい会社に仕事を見つけたそうです。このような生き方をした過去の偉人についてもまた話したく思っています。

みなさんは、どう思いますか。この世間が自分の損得だけを考えて生きる人で一杯なら、明るく住み良い社会になるでしょうか。この人のように、自分を犠牲にしてまで、回りの人のことを考える生き方をする人が一人でも多くいたほうが良い世の中になるのではないでしょうか。でも、それは私たち一人一人にかかっています。

現在毎日ニュースに出てくる総会屋の事件に巻き込まれた大企業の幹部たちは、結局「理想主義じゃやっていけん。少しくらい悪いことでも、我々の得になるんやさかいに目つぶっとこ」と考えていたわけですよね。あの脱税事件に引っかかったプロ野球選手たちも、「馬鹿正直に税金払っとったら、損するばかりや。少々ごまかしてもかまへんやろ」と考えたのでしょうね。正しい生き方では損をすることも多いでしょう。でも、その人は、お金より大切な信頼を得ます。そして、しばしば後で得をする。その得は、お金より、人々から尊敬を受けるという形になることが多い。「尊敬なんか、いくらしてもろても、一銭にもならへん。わしゃ、お金の方がええで」という人は、どうぞ自分のポリシーを貫いてください。晩年結局後悔することを保証します。

ということで、どうか皆さんも自分の人格を磨いてください。その人格の一部分が仕事です。仕事において、回りから尊敬を受ける仕事人になるように努めよう。でないと、いくら良いことを言っても、誰も聞いてくれないでしょうから。みんなの場合、仕事は勉強ぞ。

注意。道徳に従って生きることと、馬鹿正直（悪い意味で）に生きることは別。頭を使うべし。

1997. 11. 18　AO.

昨日授業のとき、「先生はキリスト教の教えを全部信じているのですか」という勇気ある質問がありましたね。私は皆さんがときどきする鋭い質問を受けるのが好きです。というのは、それは私が考える機会になりますので。普段は当たり前と私が思っていることで、君たちにとっては変だと思えることがたくさんあるでしょう。その中で確かに重要なことがあるのです。それを知らせてくれるのが、みんなの質問って言うわけ。ともかく、昨日はその質問に「はい」と答えましたが、これはわざわざ言うまでもないことなのでもう一度繰り返しますが、私はカトリック教会の教えを全部信じています。もしそうでなければ、まず司祭になるはずがないし、今の仕事も絶対にしていない。またもし信じていないなら、信じていないことを教える大偽善者になる。私は少なくても、心で嘘じゃないかと思っていることを正しいとは言いたくない。ただし、カトリック教会の教えの中で信者なら信じないといけないという教義（ドグマと言う）は、極めて少ないのです。このことも重要なことなので、またいつか話したい。今日から何度か、このカトリックの教えの中で、最も基本的なことについて説明したく思います。それは、何を隠そう、神の存在です。

カントという有名なドイツの哲学者は、「哲学の大問題は三つ。神と霊魂と物自体」と言ったそうです。この中で「物自体」というのは、カントは人間は外の世界を知りえないと考えていたからですが、普通の人間にとって物自体を知ることは別に問題にならないでしょう。でも、神と霊魂は違います。

神の存在の問題は確かに多くの哲学者や思想家を悩ましたのですが、でもそのような頭のよい人たちだけが考えた問題ではありません。この問題は実は、人間ならだれでも考える問題です。同じ難問でも、例えば相対性原理とか、不確定性原理（どういうものかは忘れましたが）なんて問題は、ほんの一握りの専門家だけが、「ああでもない、こうでもない」とか言って悩んでいる難問ですが、「神は存在するか」は子供でも考える問題です。というのは、次回に説明するように、神の存在の問題は、人間はどこから来たのか、あるいはどこへ行くのか、つまり何のために生きるかの問と密接に拘わっている問題だから、自分は生きているということを意識する人はみな、何らかの形でこれを考えるわけ。

『徒然草』の著者、病気でも健康だった吉田兼好は、８才のときお父さんに「仏とはどういうものでしょうか」と質問しました。お父さんは「そんなことほっとけ」とは言わずに、まじめに相手して「仏とは人間がなるものだ」と答えた。（子供の質問から逃げずに、ちゃんとまじめに答えてあげるのは偉いお父さんだと思いませんか）。兼行法師は「では人間は、どうやって仏になるのですか」。「それは仏の教えに導かれてなるのだ」とお父さん。「人を教え導いて仏にするその仏は、誰が教え導いて仏にしたのですか」としつこく食い下がる。「その前の仏が教え導いて、仏になられたのだ」。「では、最初の仏は、いったいどういう仏様だったのですか」。お父さんは笑って「空から降ったのかな、土から沸いたのかな」と言った、という話を残しています（２４３段）。この８才の兼行法師の質問は、結局神が存在するのかしないのか、ということでしょう。お父さんはこの質問に答えることができなかった。やはり難問ですね。

神様のことを考えるのが難しいのは、はっきり言って、神様が見えないからです。見えないだけでなく、聞こえない、匂わない、手で触れない、のないない尽くしだからです。

ところで、近代になって哲学者と言われる人達の中に、「わしら人間が知ることができるものは、見えるもんだけや。せやさかい、見えへんもんについては、あるともないとも言えへん」という考え方が広がりました。公民で有名なジョン・ロックはこの考えの先駆者で、これが懐疑論とか不可知論とか言われる考えです。この考えはやがて１９世紀になると、「見えるもんは測れる。測れるもんだけが証明できる。証明ができへんのやったら、科学やない。科学は見えるもん以外のことを扱ったらあかへん」となりました。これを実証主義と言います。実証主義は２０世紀になると行き詰まったのですが、ウイルスみたいに色々と形を変えて生き延びています。そのお陰で、神様については「信じることはできても、それが存在するともしないとも言えない」と考える人がインテリの中で多いのです。

見えるものだけを相手にする、というのは実際にはできない問題です。現実生活では、私たちは見えないものをいつも気にかけているでしょう。前も話したように、例えば他人を見るとき、その人の顔、身長、肌の色、外観など見える所だけが分かれば、それでその人を理解したと満足できますか。それで満足する人は、ひょっとしたら脳みそがない、少なくとも脳みそを使ったことがないかも知れません。だれでも、相手のやさしさとか、寛大さとか、意志の強さとかの度合を考えに入れるでしょう。それらはみな見えないものでしょう。『星の王子さま』という本に、「大切なことは目に見えない」とあります。スポーツの試合でも、単に選手の数字的データだけで勝負は判断できません。もしそうなら、試合が始まる前に各選手の身長、体重、５０㍍走の記録、懸垂、握力、垂直飛びなどのデータを比べれば勝敗が予測できる、とちゃいまっか。ところが、しばしば試合は外面的なデータより、選手の精神力によって左右されることは、皆さんも経験済みでしょう。

もう紙面がなくなってきましたので、人間は見えるものから見えないものを探求する能力をもっているとだけ言っておきましょう。現代の日本人の中には宗教は科学が発達すればなくなるという１９世紀にヨーロッパで言われて結局嘘だったことが今世紀に証明されたうわ言を信じている人が少なくありません。もしそうなら、立派な科学者はみな無神論者になるはずですよね。科学の分野で秀でながら、神を信じていた多くの人のいくらかの例を挙げておきます。

みんなも、外に出て自然に親しんで下さい。
1997.12.9

「昆虫記」のファーブルの言葉

昆虫の驚くべき本能の世界を見て，そこに偶然の一致しか見ないようにしようとしてもむだである。このような調和は偶然では解明されえない。世界は一つの無限の知恵によって導かれている。私は，観察すればするほど，物の神秘の背後に輝くこの知恵を，いっそうよく見るようになった。そのために，人が私を嘲笑することも知っている。しかし，そんなことはとるに足らない。私から信仰をもぎ取るよりは皮膚の皮をはぎ取るほうがたやすいかも知れない。私は神を信じるのではない。神を見ているのだ。

物理学者マックス・プランクの言葉

不幸における私の最大の助けは，幼い時から私にしっかりと根づいた，全能全善の神への不屈の信仰であった。宗教と科学は，今日，多くの人が考え，怖れているように，互いに矛盾しているのではない。むしろ，相互を補なっているのである。

センター入試模試、お疲れさまでした。今日はテストで頭も疲労困憊していることでしょうから、あまり考えずにすむようにと哲学と関係のないことにしいたのですが、やっぱり難しくなりました。イエス様はよく「聞く耳のあるものは聞け」と言われたのですが、私も同感です。この手紙は、みんなのためになると思って書いていますが、読みたくなければまったく読む必要はありません。以前は、せめてファイルにしまってあとで読んでくださいと言ってその気持ちは今も変わりません（ただし、今日ものもの賞味期限は３年です）が、読む気がなければ捨ててしまってもまったくかまいません。

先週朝の会で進路について話しましたが、その続き。もしみんなが大学に行くならば、大学にはいろいろな学部があって、学部を決めないといけません。つまり、「僕はＡ大学に行きたい」と言っても、受験の願書はその大学の法学部とか理学部とか、学部に出さないといけない。学部には大きくわけて理科系（工学部、理学部、農学部など）と文科系（文学部、法学部、経済学部、商学部、経営学部、教育学部など）に分かれる。私が高校生のときは、いわゆる高度経済成長期で、理科系（特に工学部）全盛期でした。だから「成績の良いものは理系へ」とうような考えや、また理科系には数学が必須だから、「文系には数学のできへん奴が行くんや」という考えもありました。ところが、大学に入った年、ご存じ石油ショック。と途端に人気が文系に移ったのです。なぜか。それは理系出身者はメーカー（物を作る会社）にしか入られないが、文系を出ていればどこでも就職できるからです。でも、日本は石油危機を乗り越え再度経済発展を成し遂げる。と再び理科系が幅をきかすようになりました。今はどうでしょうか。

当時は猫もしゃくしも理科系を志望した。

私は高校のとき文科系を志望していましたが、クラブの親友が「今は理科系がもてるけど、結局国や会社などの組織のトップに立つのは文系出身者やで」と言ったのを覚えています。これは本当で、政治家になりたければ、数学や物理や化学よりも法律や経済の知識を持っておかねばなりません。だから、政治家の大部分は法学部出身です。

組織のトップに立つ人には、細かい知識は要求されません。そういった専門的なことのためには、その道の専門家を部下としてもっていて、必要なときにデータを教えてもらえば足りる。トップのするべきことは、それらのデータと回りの状況を分析して、正しい判断を下すことです。たとえば、日本国を考えてみましょう。トップに立って国を指揮するのは、総理大臣で、その総理を補佐するのが国務大臣。例えば、経済関係の政策を立てるのは大蔵大臣ですが、実際は大臣は経済の細かなことを知らなくても大蔵省の役人（官僚。ここに東大出身の頭の切れる人材がいるはず）がやってくれて必要なデータを教えてくれる。ここで大切なのは、大蔵省の官僚が必要かつ十分な判断材料を大臣に提出するということです。大臣の役目は、それを正確に分析して総理に提案すること。だから、大蔵大臣には、確かに細かなことを暗記する能力は必要ないけど、部下が提出したデータの意味を理解し、全体的にまとめる能力は必要だ。これが総理大臣になると、経済問題だけでなく、外交、教育、文化など、国民の生活のあらゆる面に関して、細かいことは知る必要はないが、全体的にそれを見て判断を下せる能力が要求される。たとえば、総理大臣は原子力発電が、水素の原子が分裂したらどれだけのエネルギーが出るとかの詳しい理化的な知識は必要ない。また、原子力発電が我が国のエネルギー問題にどれだけの割合を占めているのか、どのような危険が考えられるか、外国ではどうなのか、なども正確な数字を知る必要はない。それらのことは、部下に調べさせたらすむ。しかし、総理大臣にはそのデータを最終的に判断することが求められるわけです。ここで、総理大臣に必要なことは、全体を見ること、そして各部署に適切な人（こういうのを人材という）を配置すること。そのためには人の能力を正しく評価する目を持たねばなりません。

ここで思い出すのは、以前話した中国の国家官僚の採用試験、科挙のことです。科挙ではどんな試験科目があったかというと、それは主に文章を書く能力だったそうです。「文章を書く能力よりも、自然や歴史や地理の知識について聞いたほうがええんとちゃう」と思うでしょうが、中国人の考えは「組織のトップに立つ人は、細かいことは知らんでええ。それより全体を見渡せることが肝心や」と言うものだったからです。全体を見渡せる能力が、文章を書く能力で判断できると考えたところに、中国ではいかに文章が大切にされていたかが伺えますね。でも、さすがに日清戦争に敗れてから、「これはあかんで、科挙のやり方を変えよう」と言って、文章よりも時事問題（現実の政治、国際、経済の問題）を聞くようになりましたが、これも保守派（有名な西大后の一派）の巻き返しで失敗し、清国の運命は風前の灯火となってしまうのです。

吉川英治の『三国志』には、まだ劉備玄徳に知り合う前の諸葛孔明について、あるお爺さんが「彼は大略を知っておる」と評すところがあります。つまり、細かい知識はともかく全体を掴んでいるということです。受験勉強は細かい知識を要求されますから、細かいことを覚えてやりましょう。でもそれは本当の勉強の目的ではないことも忘れないで下さい。たとえば、英語で単語を覚えることは目的ではない。目的は文章が読めること、か英語でコミニュケーションがとれることでしょう。英単語を６万覚えていても英語の新聞を読めないなら、その英語の勉強は何の役にも立たなかったと言えるでしょう。歴史は年代を覚えるための学問ではない。それらの歴史的事実を知って、大きな歴史の流れを掴むことが目的です。この大きな流れを掴んで初めて、現在の様々な事件の意味が理解できるようになる。

ここいらで言いたいことをまとめますと、①、進路を決定するとき、世間の風潮だけに従わないこと。自分が好きなこと興味があることをある程度考慮に入れることです。と言ってもある程度、です。完全に自分の好きな仕事ができると言うのは滅多にないことだから。②、いつも社会にでたらどうするか、ということを考えながら勉強すること。今やっている勉強は、社会生活をするために役に立つ知識を与えてくれるけど、不十分であることを忘れないこと。③、それを補うとために勧めたいことですが、良い本を読むこと、自分より経験が多く思慮のある人と話すこと、よい友達（その人と付き合うことで自分がいろいろな意味で高められるなと思う人）を探して友情を大切にすること、など。最後に、つまらない軽薄で、人間を堕落させるしか目的のないようなテレビ番組、雑誌を軽蔑することもお勧めします。時間を自分を駄目にするようなことに使うなんて、本当に馬鹿なこととは思いませんか。それよりもっと良いこと役に立つことがたくさんあるのに。

それでは カゼに気をつけて。　1997. 12. 15.　A. O.

センター入試が終ったかなと思ったら今日は学力テストで、一難去ってまた一難、「涙の後には虹も出る」と考えて耐え忍びましょう。これから３月までは、広島カープの黄金時代を築いた古葉監督という人のモットー「耐えて勝つ」を実践するチャンスかも。昨日書いたことには沢山付け加えないと誤解が生まれると思い、二日続けて書かせてもらいます。試験で頭が疲れていたら今は読まずに、十分休息を取った後で気が向いたら読んでください。

その前に、この手紙で私が望んでいることは、人生についての重要な問題をどのように考えることができるかを知らせて、みんなが将来そういう問題に直面したときに、考えるヒントを持ってもらいたいということです。人生の重要な問題については、現代の学校教育のカリキュラムにはそれを解く助けとなる授業はなく、先生が個人的にそのような話をしなければ、みんなは何も指導されずに高校を卒業するということになってしまう。大学や社会では、実に雑多な考え方が溢れている（そのうちのあるものは人に害を与える）のですが、それらに対して無防備な状態でなく、各自が自分のしっかりした考えを持った上で、それらに相対することができればと思うのであります。だから、ここに書くのは私の個人的な意見で、本当は皆がそれらを自分で考えて、「なるほど」と思うなり、「こいは違うぞ。おいはこげん考えるばい」と言ってもらって結構毛だらけ猫灰だらけなのですが、まだ１５才の青年にはそれは無理かも知れません。だから、「そげん考えもあっとばいね」と思って、頭の記憶の引き出しにしまっておいて、いつか問題にぶち当たったときに引き出しから取り出して自分の考えの足しにしてくれたら、と思っているわけ。

では本論。昨日言ったことの二つの点にもう少し説明を付け加えたい。一つは、理科系の人は結局文科系出身者に使われる身になると言う点ですが、だからと言って理科系が駄目とか、理科系の人は専門的な細かいことしかできないと言うのではありません。ましてや理系の人は必要ないというのでは毛頭ない。資源に乏しい日本は、今も将来も優れた科学技術を持たなければ繁栄することはできない。だから、優秀な科学者と技術者が沢山必要です。そのためにも、理科が好きな人が理系の学部に行ったり、技術を習得する専門学校などに行くことが好ましいわけ。

もう一つは、トップに立つ人のことばかり話したけど、みんながトップになれるわけでもない。トップになるためには、頭脳だけではなく、人を引きつける人徳や度胸などがいる。頭脳だけの人は、むしろ参謀になってトップを助けるのがいいでしょう。諸葛孔明みたいに。またみんながトップになる必要もない。それどころか、もし皆が政治家になれば、誰が車を作るのか、誰が病人を治療するのか、誰がご飯を料理するのか、誰が郵便を配達するのか、なんて常識でもわかるような変な社会になってしまう。人間とは、本当にうまくできていると思いますが、人それぞれ様々な才能があり、それぞれが自分の才能をある程度活かせる仕事が普通はある。

ミ、いうとも、頼りになるのは理系の人。

トップの人は、特に大きい団体の上に立つなら、それだけ大きな責任があることも忘れてはならない。司馬遼太郎が書いていましたが、戦争に行くと自分たちの指揮官にはともかくよい作戦を立てる人が欲しい。たとえ道徳的によい人間であっても作戦が下手だと、その人のお陰で多くの兵隊の命が失われるから、と言っていました。その最良の例が、ノモンハン事件とインパール作戦でしょう。トップが無謀な作戦を立てて実行したお陰で、何万という人がモンゴルの平原でソ連の戦車に引かれて死に、あるいは何十万の兵隊がビルマのジャングルで疲労困ぱいの末飢え死にしたのです（これらの作戦に関与した士官たちは道徳的にもひどい人たちのようですが）。以前江本というプロ野球の投手が「ベンチがアホやから勝てへんのや」と言って首になり、その後スポーツ平和党党員で参議院議員になりましたが、野球ならまだ遊びですみますが、軍隊や政治なら無実の人を不幸にするわけで、トップの責任は重大です。

仕事さえできれば道徳はどうでもええという考えには私は賛成できません。道徳的に悪い人は、良心の声に従わなくても平気なのですから、本当に回りの人々を幸せにすることはできないと思うからです。現在日本で起こっている大企業の不祥事の事件は、政界や財界のトップに立つ人々の道徳のレベルが低いことが一つの原因ではないでしょうか。

ただ、司馬さんの言いたいことはよくわかります。そして、これはトップについてだけでなく、みんなに言えることでしょう。もちろん、下にいる人の責任はトップに立つ人の責任よりも軽いですが、でも責任はある。どのような仕事についても、まず自分の仕事をよく果たす人でなければ、回りに迷惑をかけるわけ。と言う意味で、現在中学生ならば、勉強をまじめにして欲しいわけです。

皆さんは昭和元禄という言葉を聞いたことがありますか。それ日本が昭和４０年ころから読売ジャンアツの９連覇とともに、前代未聞の平和と経済的繁栄の時代を迎えたので、それを江戸時代の元禄時代に例えたのです。確かに昭和は戦後非常に安定した平和な時代だっと思いますが、今後は日本は国内で戦争が起こるようなことはないでしょうが、戦国時代や幕末のような不安定な時期に入るのでは、と危惧しています。平和な時代には学歴や家柄といたものが幅をきかせますが、非常事態の中ではそのような外から自分を飾ってくれるものは役に立ちません。たとえば地震のとき、役に立つのは高学歴の人ではなく、あるいはかっこいい人でなく、緊急の状況の中で落ち着きを失わずてきぱき処理ができる人でしょう（以前に話した実践知性に優れた人）。戦国時代に「おほほほ、ミーは桓武天皇時代からの武士の家柄ざんす」などと言って偉そうにしていた高貴な貴族や守護大名はほとんど没落し、実力のある庶民や貧しい侍が大名にのし上がっていった。幕末に本当に活躍したのは、大名クラスの武士ではなくほとんどが下級武士だったでしょう。

精道の教育がうまく行けば、たとえ乱世になっても、どんなところでも「どっこい生きている」と言える人間を育てることになるのではないかと思いますが、どうでしょう。私がこのプリントで少しだけでもそのために役に立ちたいと思っているわけです、はい。また、体力も大切です。『シートン動物記』に書いてあったと記憶していますが、犬の中でも雑種というのは、筋肉の強さや足の速さでは、ブルドックやシェパードには負けるのですが、生命力は一番あるのだそうです。例えば、無人島に血統書つきの犬と雑種を置き去りにすると、雑種が一番後まで生きているらしい。そういう雑種のような体力と精神力を身に付けてください（犬には精神力はないでしょうが）。

この手紙の内容について、異論、反対、抗議、怒りなどのある人はどしどし応募して下さい。

1997. 12. 15.　AO.

もうすぐクリスマスなのですが、日本でもクリスマスはキリストの誕生を祝う日であることはよく知られています。が、聖書にはイエス様の誕生日がいつだったかはまったく書かれていません。でもキリスト信者にとって、キリストの誕生は神が人となって生まれた日ですから、それをどうしてもお祝いしたいという気持ちがあったのは当然でしょう。そこで、当時ローマの異教徒の間で１２月２５日に無敵の太陽神の誕生を祝う祭りがあったので、信者たちは自分たちの神様の誕生をその日に祝うようにしたらしい。そのうち太陽神の祭りはすたれ、クリスマスは残ったわけ。もちろんお祝いの仕方はごミサでした。聖書によれば誕生は夜だったから、ミサも深夜に行なわれた。そのうち、朝早くと午前中の終わり頃にもミサを立てるようになり、今ではクリスマスのミサは３回あります。クリスマスというのは英語で「キリストのミサ」と言う意味です。

そのほかにいろいろな習慣が生まれます。１３世紀にはアッシジのフランシスコという聖人が、教会や家の中に人形などを使ってベトレヘムの馬小屋を表わす（学校の玄関にあるもの）ことを始め、この習慣は世界中に広がりました。キリストの誕生の様子を歌った沢山の歌も作られ、今でも世界中で歌われています。また、その誕生は人類を照らしたという考えから、イブの晩に広場などを光で照らしたり、ミサの間にろうそくを灯したりする習慣もあります。１６世紀から北ヨーロッパの国々では木を立てて飾ることが始まったが、これがクリスマスツリー。

プレゼントを配る習慣はローマ時代からものらしい。最初は赤ちゃんのキリストがプレゼントを持ってくるという考えでしたが、プロテスタントはそれをお爺さん（いわゆるサンタクロース）に変えてしまいました。でもスペインでは、プレゼントを持ってくるのは東方の博士たちで、それゆえプレゼントの日は１月６日（ご公現の祝日）です。イタリアでは、クリスマスの晩にヨゼフとマリアに部屋を断ったおばあさんがいて、その人は後でその二人が誰であったかを知り、後悔して罪滅ぼしに子供にプレゼントをするようになったということになっています。

聖徳太子は小さい頃「廐戸（うまやど）の皇子」と呼ばれたのですが、（ここから大脱線が始まる）それはお母さんが馬屋の前を通るときに生まれたらしいからです（正確には知りませんが）。でも、馬屋の前で生まれるなんて天皇家の皇子にはふさわしくないですよね。これはすでに当時の日本（６世紀後半）にキリストの誕生の話しがなんらかの形で中国を通して伝わっていて、偉い人が馬屋で生まれたということが知られていたからだと言う人もいますが、これは歴史的に証明されてない。

中国にキリスト教が伝わったのは、今分かっている限り唐（618-907年）の時代です。ペルシア（今のイラン）にはネストリウス派というカトリックから離れたキリスト教の一派が勢力を持っていたのですが、７世紀にイスラム教がその地方を征服すると、それから逃げて中国までやってきたのです。唐という国は、中国の歴史では珍しく外国の文化に対して寛容で、このネストリウス派のキリスト教は景教と呼ばれて広がります。この人たちは、例えばマリア様のことを「輝かしい姫」と呼んで８月１５日に被昇天（マリア様が体も霊魂も天に上げられたという教え）の祝日を祝っていました。「その晩は大きな火をともして、『かがやかしい姫』を祝い、死者のことを示す小さな明かりを川に流して、聖母が天国にみちび行いて下さるように祈る習慣があった。そのころ中国に渡っていた弘法大師（空海；774~835年）はこの話しを日本に持ち帰り日本風になおして紹介した。こうして、はじめて『かぐや姫』の話が伝えられた」。お盆の習慣もこれに起源があるそうです（デルコル神父、『主日ミサの友』、1934ページ、参照）。弘法大師がキリスト教の影響を受けたことはどうも確かなようですが、私自身詳しく調べたことではないことも言い添えておきます。

このように文書で知られるキリスト教の中国への到来は８世紀ころなのですが、私は古代から中国と西アジアやローマを結んでいたシルクロードを考えれば、１世紀に生まれたキリスト教がその本体全部は無理にしても、一部が変形した形で伝えられても不思議ではないでしょう。でも、これは飽くまで推測に過ぎません。　ここで脱線が終る。

最後にクリスマスにちなんだ話をしようと思います。これはアメリカの短編小説です。知っている人もいることでしょう。正確な内容は忘れたので、少し脚色を加えますが・・。

むかし博とさくらという江戸っ子の若夫婦がなぜか分かりませんが長崎に住んでいました。二人とも裕福でなかったので、もう夏ごろからクリスマスには何をプレゼントしようか考えていました。８月のある暑い昼下がり、博が浜の町を歩いているとショーウインドウに見事な長崎産のべっ甲の櫛を見つけました。「これはきれいだ。さくらのあの黒い長い髪にはこれが似合う。兄さんも喜んでくれるサ（さくらには寅という少々はめを外した兄がいたのですが、これは話しに関係ありません）」と思って電車賃や煙草代を節約してお金を貯めていました。がクリスマスイブになっても、まだ何万円か足りません。「こうなったら、おやじの形見の金の懐中時計を売るしかないな。」かくして、狙っていた櫛を買い取ってルンルン気分で循環８番のバスに乗って家路を急いだのでした。

他方、さくらは「博さんは立派な金の懐中時計を大切に持ってるから、時計の鎖を買ってあげたらさぞ喜ぶだろうな」と思って、スーパーでパートの仕事をこっそり始めました。博は印刷会社（この会社の社長さんはタコと呼ばれているのですが、この話しには関係ありません）に働いていて夜が遅いので、さくらがパイトをしていることに気がつかないのです。そうこうしているうちにクリスマスイブになりました。しかし、悲しいかな。アルバイトではあの高価な鎖を買えるだけのお金を儲けることはできなかった。そこで、思案した挙げ句ある名案が思い浮かびました。何だと思いますか。

それは自分の髪を切って売ることでした。彼女は当然自分の誇りであった髪を失うのは悲しかったのですが、博さんが喜ぶならそんなことは問題じゃない。時計の鎖を買うと夫の喜ぶ顔を想像しながらアパートの２ＤＫの家に帰って夕食のご馳走を準備して夫を待っていました。博が帰宅したとき、どんなことになったと思いますか。詳しくはオーヘンリーの『賢者の贈り物』を読んでください。この話を読めば、人間の幸せが物にではなく暖かい心（愛）にあるということが分かるのではないでしょうか。

さて、いよいよ今年もあと数日になりました。今年あったよいこと悪いことも感謝したいと思います。みなさんは普段はへらへらしていても「やるときにはやる男」だと思います。この冬休み、風邪をひかずに有効に過ごせるよう祈ります。よいお年を。

来年もよろしく。

1997年12月20日　A.O.

今日の授業ではみんなの元気な姿を見て胸が痛く、いや胸がむかつき、いやほっとしたというのが正直な感想です。冬休みはいかがでしたでしょうか。私は久しぶりに関西の方に帰りました。その間、実家にも帰ることができたし、古い友達にも会うことができて良かったです。

ところで、別にわざわざ言わなくてもわかっていることなので言うのですが、中学生活も残すところ三カ月を切りました。時の過ぎ去るのは早いですね。昔から「光陰矢のごとし」とか「少年老い易く、学なりがたし」とか「犬も歩けば棒に当る」とか言うように、人間はみな人生の短さを実感してきたみたいです。そして、これを実感したときは、もう人生はあまり残っていないんですよね。

むかし「２０歳を過ぎたら時の過ぎるのは速いで」と言われたことがあります。新年早々いきなり難しい話で恐縮ですが、時間って何か考えたことがありますか。アリストテレスたちは「時間はものの変化を計る尺度」と考えた。つまり、一つひとつの物が自分の時間をもっている、そして変化があるから時間がある、変化がなければ時間はない、と考えたわけ。これに対して近代の哲学者（とくにカントと言う人）は時間は一定の速さですべてを巻き込んで進んでいくと考えました。私の経験では、小学校低学年の時はクリスマスや正月が近くなってもなかなか来ない感じがしたし、また永遠に小学生のままで中学生にはなれないような気がしたことも覚えています。みなさんはどうですか。それに対し大人になると、あれよあれよと言う間に、年をとっていくのです。それは、やはり小学生と大人の日々の活動の仕方、生活のリズムがまったく違うということじゃないでしょうか。ということは、よく活動すると（すなわちよく変化すると）、時間は早くなる、ということでアリストテレスの方が正しいという気がします。また、アインシュタインの相対性理論もカントの考えが誤りであることを証明したらしい。

あと残された時間がわずかと思うと、私が心残りなく安楽かな気持ちでみんなの旅立ちを見送ることができるようにこの手紙のペースをあげんば、と思うのであります。言いたいことは山ほどある。その一つが「神」の問題です。

諸君は、「中国残留孤児」って聞いたことがありますか。第二次世界大戦も押し迫った昭和２０年８月８日夜に、当時日本人の植民者と軍隊がいた満州に、日本と中立条約を結んでいたソ連の強力な機械化部隊が侵入してきたことは覚えてますか。そのとき満州を間々負っていた軍隊は、かつては「泣く子も黙る関東軍」と呼ばれた精鋭だったのですが、南太平洋の島々での戦争が激しくなるにつれ、そちらのほうに輸送され代わって学徒出陣で徴兵された大学生が守っていました。ナチス・ドイツと戦うためにアメリカから多大の援助を受けていたソ連の優秀な機械化部隊に、そんな素人の兵隊が、しかも満足な武器も持たずに戦えると思いますか。実は私の高校の先生が、早稲田大学で勉強中に召集され、その時満州にいたので、授業中時々その経験を話して下さいました。

ソ連軍に対抗するために彼らが命じられたのは、火薬を背負って戦車の下に入ることだったのです。その訓練を毎日受けて、先生の部隊の隣の部隊は出撃して全滅。そして先生の部隊がいよいよ明日出陣というときに、運良く終戦になる。しかし、ソ連軍は国際法を無視して、捕虜をシベリアに連れていき重労働をさせたのです。先生は幸いに救護班の仕事を当てられ、凍傷にかかった人の手を沢山切ったそうです。

ともかく、ソ連軍が来たとき満州にいた日本人は我先にと逃げました。ソ連の兵士に捕まれば本当にひどいことをされたからです。その時に小さな子供を持っていた人の中には、赤ちゃんを現地の中国人に預けて、ひとまず生き延びてから後で引き取りに来ようと考えた人も少なくなかった。また現地の満州人にも親切に子供をあずかってくれる人もたくさんいたようです。しかし、戦争が終わると、中国には共産党と国民党の内戦が起こり、１９４９年には共産党が勝つと、日本と中国は国交断絶となり、引き上げた日本人は満州に帰れなくなったのです。そのため、その子供たちは中国人として育っていったのですが、１９７２年田中角栄内閣のたおき日中国交が回復すると、この問題が思い出されたのです。

さて、その時大人になっていたあの孤児たちは、どう思ったと思いますか。「もう今頃日本に帰っても言葉もわからへんし、意味がないやんか」とあきらめたのでしょうか。いや、たとえ日本で生活することは諦めても、多くの人が少なくとも自分の本当の両親、肉親に会いたいと思ったのです。だから毎年日本に来ては、少ない手掛かりを頼りに肉親捜しをされているわけです。本当の両親を持っている私たちにはこの気持ちは理解できないでしょう。でも、少しは想像してみましょう。もし私も自分の両親が誰だか知らなかったら、何の不安もなしに涼しい顔をして毎日を過ごせるでしょうか。人間にとって、自分がどこから来たか（ルーツ）を知ることは、自分が何者かを知るためにとても役に立つことではないでしょうか。

前置きが長くなりましたが、言いたいことは、神の問題は人間がどこから来たか、私はどこから来て、どこに行くのかの問題だと言うことです。もし、神が存在しないのなら、人間のルーツは、まったくの偶然ということになるでしょう。人間（だけでなく、全存在も）は偶然に生まれたのなら、人間が今生きているのは別に何かの目的のためではなく、また意味もないことになりませんか。ただ偶然に生まれてきて、偶然のうちに死ぬわけですから。これに対して、神が存在するならば、そしてその神が宇宙万物を創造したのなら、人間は神に望まれて生まれたわけで、人間の命には目的もあるし、それゆえ意味もある。簡単な言葉で言えば、生まれてきて良かったわけです。もちろん「人生楽ありゃ苦もある」のですから、大変なこともあるでしょう。でも、そんなときでも神様がいると考えるのと、いないと思っているのでは、苦難に対する取り組み方が違ってきます。

ところで、現代の日本では大部分の人が「神や霊魂ちゅうような問題は、理性で考えること自体が無理な問題や」と考えている。あるいはみんなの中には「神父さんはまたへ理屈を駆使して神が存在することを信じさせようと思っているやろけど、そうは問屋が下ろさへんで」と長崎弁で考えている人もあるでしょう。でもそうではない。私が説明したいことは、この問題はどのように考えることができるかということです。でも、私の説明に対する反論は大いにしてください。

また寒くなるかも。快食、快眠、快便、いや快勉でがんばって下さい。

注．今日は時間がなく カットはカットしました。あしからず。

本年もよろしく 1998.1.12. AO.

今年の冬に、吉川英治の『宮本武蔵』という本の一部を読みました。この本は高校時代に読んだのですが、読み直してみるとほとんど忘れていて、まるで初めて読むようなわくわくさで読めました。この本は、単に武蔵の波乱万丈の修業の一生（と言っても佐々木小次郎との巌流島での決闘で終わるのですが）を描いているだけではなく、いろいろな人生観やまた非常に日本的な理想が織り込まれていて、皆さんにも一度は読んでほしいと思う本ですが、今は読んではいけません。試験が終わってからにしてください。そこで今日はそのうち一カ所を紹介します。それは武蔵と弟子の伊織という少年とのある会話です。

「おいらも大きくなったら、柳生様（将軍家の剣道の先生）のようになろう」、
「そんな小さな望みを持つんじゃない」、

「え。・・・なぜ？」、
「富士山をごらん」、
「富士山にはなれないよ」、
「あれになろう、これに成ろうと焦るより、富士のように、黙って、自分を動かないものに作り上げろ。世間に媚びずに、世間から仰がれるようになれば、自然と自分の値打ちは世の人が極めてくれる」、というものです。

人間の値打ちとは何でしょうか。ここでよくある誤りを二つ紹介します。一つは、人の値打ちは持ち物で決まるという考え。つまり、「私はこんな立派な家に住んどるんやで」とか、「見てみ、わしのこの車、この高価な背広、この時計、この下敷きを」とか言って、自分の持っているものを見せびらかす人は、つまるところ自分の所有物で自分の価値を認めてもらおうと考えているわけです。また、テニスでまだ上手くないのに何万円もするラケットを持って見せびらかす人も、持っているものが自分の評価につながると考えているわけです。

もう一つは、所属する団体によってその人の価値が決まるという考え。これは「私は何々大学の出身で、へへへ」とか「私は〇〇証券に勤めております、ひひひ」とか言う人の心底にある考えです。その人に才能がなければある団体には所属できないこともありますが、その才能は人間の一面しかを表わさないことを忘れてはいけません。例えば有名大学出身なら、いわゆる主要五教科に秀でた才能がある人でしょうが、有名大学に入った人が必ずしも、商売の才能、語学を話せる才能、人をまとめる才能などがあるとは限らないわけ。

また、大きな団体に属していることで、その人の価値が上がると考えるのもおかしい。皆さんも入試のために会場に行くと、同じ中学校から何十人も一緒に来ているグループを見ることがあるでしょう。大勢でいるというだけで自分が偉くなったように錯覚する人がいます。でも、別に考えなくてもわかることですが、試験に合格するのは何々中学の人だからとか、受験者数の多い中学から来ているとかではなくで、良い成績をとった人ですよね。ですから、たとえ試験会場で一人ぼっちでも、自分の力に自信があれば、肩身の狭い思いをする必要もびくびくする必要もまったくない。大勢だと偉そうするが、一人だと何もできない人にはなりたくないですね。大勢でデモをするときは平気で警官隊に石や火炎瓶を投げているが、一人では弱々しい学生がいたもんです。

上の二つの考え方は、結局人の価値がその人自身にあるのではなく、その人の外にあるもので決まるという考えです。また、二つに共通するのは、人の価値とは他人が認めなければならないということです。これは多くの人がもつ考えで、だからこそいつもほかの人によく思われようとして神経をすり減らすのです。

人間の価値とはその人の中にあるはずです。ある会社の重役の人が言っていましたが、「今は部長とか課長とか言ってみんながペコペコしているけど、退職すれば残るのは裸の自分だけで、回りの人から同じような尊敬を受けるか不安です」と。だから、人の価値とは、その人の体と精神の力をすべて加算したもので、その中でも特に精神の力、意志の力だと思います。これに小匙一杯の高い教養と判断力といろいろな人徳を加えれば、武蔵の言う「動かない人間」、自分の価値を別に他人から認めてもらう必要をまったく感じない人間ができるのではないでしょうか。

肉体と精神を比べると、確かに精神の方が大切です。歴史上、筋力に優れているという理由で天下を取っり、名を成した人はいません。その種の成功をした人は、みんな知恵と人徳（勇気や剛毅の徳）に優れていた。もちろん戦国時代なら、体力がなければ成功することは難しかったでしょうが、平和な時代になると体力はなくても知力と人徳で大きな仕事をする人が沢山現れます。また、いつの時代でも大きな病気にかかりながら、立派なことを成し遂げる人がいるものです。つまり、体のハンディーを精神力でカバーすることもできるし、ある程度しなくてはならない。これが根性というもの。この力こそ、人間の価値を高める要素だと思います。

しかし、肉体と霊魂は極めて密接に合わさって一人の人間を作っていることをお忘れなく。西洋の近代の哲学を始めたデカルトは、肉体と霊魂を全く混じり合わない、ちょうど水と油のようなもののように考え、二つは偶然一つになっていると言いました。つまり、人間とはまったく関係のない二つの部分から出来ていると教えた。ちょうど、霊魂は車を運転する人、肉体は車であるように考えたのです。もしそうなら、肉体が疲れても霊魂は元気なはず。でも、毎日の経験でそれが間違いであることがわかる。

伝統的な哲学（アリストテレスや後のキリスト教哲学）は、肉体と霊魂はもっと密接に合わさっていると教えます。実際、肉体が疲労すれば霊魂も疲れる。だから、精神をよりよく働かせるために、普通の健康な状態をキープしておくことは大切なことなのです。この意味で、より強い体を作る努力も教育の大切な使命だと思います。もちろん上に言ったように、霊魂が肉体の弱さをカバーできるのですが、そのような状態は短期間なら我慢できるけど、長時間続くと普通の人には無理な要求になります。だから、今は受験勉強でもっとも大切な時期ですが、ちゃんと睡眠時間をとって、規則正しい生活を保つことも気をつけてください。ソルジェニーチンという現代のロシアの作家はスターリン時代の収容所を経験した人ですが、最も効果のある拷問は寝させないこどだと書いていました。人は眠らないと正しい判断ができなくなるそうです。

来週は気温が下がるそうです。風邪など引かぬよう、お気をつけられよ。

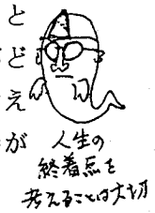
1998. 1.17 大地震からちょうど三年め.　A.O.

拝啓１２期生の皆様

ついに寒波が襲来し初雪も降りましたが、毎年受験の季節は寒いんですよね。高校の先輩で非常に寒がりな人がいて、入試の日にパッチを３枚はいて行ったのですが、「教室の暖房がビンビンにきいていてむせて勉強できんかった」と帰ってきた人がいました。過ぎたるは及ばざるが如しの見本ですね。皆さんもご注意を。

以前予告した「神について」はなかなか構想がまとまらないので、もう一つのテーマ、「死について」にさせてください。これは決して「おばけの話し」のように人を恐がらせたり、「恐いもの見たさ」の好奇心を満足させる魂胆でするのではありません。念のため。

孔子は「死とはどのようなものでしょうか」と聞かれて、「まだ人生の途中で、生ということを満足にわかっていないものには、死は考えても理解できない」と言って答えなかったそうです。孔子にとっての最大の関心は「人がいかに生きるべきか」でしたので、このような答えが出てきたことはある程度理解できます。けど、死のことを考えることは、いかにすればよく生きることができるかという問題とまったく無関係でしょうか。生きることはよく旅に例えられますが、それなら死ぬことは目的地になりますよね。目的地がどこかを知らなければ、よい旅をすることはできないのと同じように、死が何かを考えなければよい生き方もわからないのではないでしょうか。これが、カトリック教会が信者に死について黙想を勧める理由で、この手紙の理由でもあります。



とは言っても、死はそんなに明るい話題ではないことは確かです。毎日友達と死について話す人がいたら、気味が悪いスよね。また、この受験の大切なときに、死について考えて恐くなって不眠症におちいり勉強ができなくなって、業務上過失傷害かなんかで長崎地方裁判所に訴えられ、懲役１０カ月執行猶予２年なんて刑をもらうのはいやですから言っておきますが、いま無理してこの手紙を読む必要はありません。でも、ごみ箱に捨ててしまわないで、ファイルか何かにしまっておいて、またいつかこのような問題を考えるときになったら読んでください。

さて、死後の世界については、いろいろな意見があります。どうしてか、と言うとあの世は、だれも見たことがないし、見ることができないものだから、です。ヨーロッパでは近代になって、見ることも触れることもできない問題、つまり感覚でつかむことのできないことに対しては、「それはわからへんから、考えんことにしよう」という考え（これは不可知論とか懐疑論と呼ばれる）が広がり、現在の日本でもこの考えの人は多い。しかし、以前に何度か言ったように、感覚で捉えられない問題について、人間は考えられるし、普段から無意識に考えている。感覚を越えた対象について考える学問が哲学（とくに形而上学）です。

話しの進め方ですが、以下のようにしたいと思います。つまり、まず死後の世界についてどんな意見があるかを見て、それぞれについて考えてみる。次にもしあるならば、それはどのような所かを考える。その後で、キリスト教はどのように教えているかを説明したい。というわけで、まず死後の世界があるかないかについて見てみましょう。

第一章：死後の世界はないという意見について。

死ぬとは体の働きが止まることだと言えるでしょう。体の機能が止まると、体は腐敗していって最後にはなくなる。問題は、人間はこの腐敗する体だけか、それとも霊魂を持つのかということです。そして、当然、霊魂がないという人は死後の世界なんかないと言います。だから、唯物論者は死後を否定する。すでにヘレニズム時代エピキュロス（紀元前341～270年）という人もそう考えていました。彼は「死なんか恐れることないで。せやかて、今生きてるときは死はないし、死んでしもたらわしがなくなってしまっとんやから」と言って弟子たちを勇気づけていました。

皆さんは先のエピキュロスの考えについてどう思いますか。もしこれで満足なら、この先は読む必要はありません。でも、これで満足する人は少ないのです。人は普通死を恐れ、わからなければ考えないでおこう、とします。そのために今現在目の前にあることに集中しようとする。目の前にあることに集中することは大切ですが、同時に遠くにある目標もしっかり見つめておく必要があるのではないか、と思うのですが。

もし、死後の世界がないから、人間の人生はこの世で終わりです。ということは、人間の幸福とは、この世でできるだけ楽しむということになりませんか。もしそうなら、「受験勉強なんてあほらしいてやってられへん。それより遊び倒せ」て結論に達する。でも少し考えたら、どんなに楽しんでも結局終わりが来て無に帰するなら、それもむなしいことですね。また、もし人生がこの世だけなら、良心に従って善い行ないをしてもあまり意味がない、ということにはならないでしょうか。

唯物論が１８世紀に西洋の知識人の間に流行り始め、それ以後自然科学が目を見張るような発展を遂げた２０世紀の末期の今、世界の大部分の人は来世を信じないのでしょうか。いやその逆なのです。世間には科学が発達すれば、宇宙が自然（神の手を借りずに）に発生したこと、人が霊的な働きは結局脳味噌の働きであること、だから人間も自然の（神の介入なしの）進化の結果猿のような動物から生まれてきたことが証明できる。そうすれば、人間の謎もすべて説明できる、と考えている人が結構います。中３教室の本棚に寂しく飾ってあった『長崎の歌』（永井隆博士の伝記）に、博士が島根の山奥から長大の医学部に入学したとき、まさにそのように考えていたとあります。霊魂とか神とかはまったく非科学的なもので、科学の発達によっていずれ忘れ去れらてしまうものだ、と。しかし、ある日「家に帰れ」との電報を受け取り、急いで帰省。家に帰るとお母さんが危篤でした。その時の模様を博士は次のように書いています。「私が枕元に駆けつけたときにはまだ息があって、じいっと私の顔を見つめたまま事切れた。その母の最後の目は私の思想をすっかちひっくり返してしまった。私を生み、私を育て、私を愛し続けた母が、別れにのぞんで無言で私を見つめたその目は、お母さんは死んでも霊魂は隆ちゃんおそばにいついつまでもついているよ、と確かに言った。霊魂を否定していた私がその目を見たとき、何の疑いもなく母の霊魂はある、その霊魂は肉体を離れ去るが、永遠に滅びないのだと直感した」（４２ページ）。

人はなくなった人をお墓に埋葬する。そして、親しい人だったら、時々あるいはしばしばお墓に行って故人に祈りますね。それは、この永井博士が直感したことをおぼろげながら認めているからではないでしょうか。来世がないと言った人はいるけど、その人たちは決して自分の意見を証明できたわけではないことに注意してください。

1998.1.21　A.O.

拝啓１２期生徒の皆様

いよいよ戦闘開始のラッパが鳴り、各地で激戦が繰り返され戦果も上々のようですが、「勝って甲の緒を締めよ」です。これからも、風邪などに気をつけながら必死でがんばって下さい。

戦いに疲れた頭を少しだけでもほぐすためにためになるお話を一席。それは私の大学時代のある知人の話です。彼は「どじ」という仇名をもらっていたような人でしたが、ある冬にクラブの友人と一緒にスキーに行きました。事件は行きの電車の中で起こった。電車が岐阜県に入りそろそろ雪に覆われた山並みが見えてきたころ彼は席を経ってトイレに行った。彼が帰ってくると、みんなは窓から見える遠くの真っ白な山並みを指さしたりしてわいわい騒いでいた。が、彼一人そのはしゃぎの輪には加わらない。「どうしたんや、気分でも悪いんか」という質問に対する彼の答えは要約すると次のようなものでした。彼がトイレに行って、○○○をするためにズボンを下ろしたとき、なんとズボンの後ろのポケットに入れてあった財布が中に落ちてしまったそうだ。その旨を車掌さんに言ったら車掌さんは親切にも探してくれたが、「残念ですけど○○○しか見つかりませんでした」との答え。こうして楽しいはずのスキー旅行が、まったくの嫌な思い出に変わってしまったという「聞くも涙、語るも涙」の物語でした。教訓。財布など大切なものはズボンの後ろのポケットに入れないこと。

それでは、「あの世シリーズ」の第二番に入ります。前にも言ったように、試験直前の緊張感を守りよいコンディションで試験を受けようと思っているならば、今読む必要はありません。

続第一章；死後の世界はないという意見について。

人間が霊的な魂をもっていない、つまり人間は肉体だけやという考えを持つ人は、必然的に死後の世界を否定します。でも、それでは霊魂の存在を認めたら、必ず来世の存在を認めるか、というとそうではない。たとえば、アリストテレスは、人間に霊的な魂を認めましたが、死後もその魂が生き続けるかどうかは、迷った末結論をひかえました。また、次の二つの考えも、魂は認めるが結局来世を否定する考えです。

その一つは輪廻思想です。これはご存じの通り、生物の魂は現世の行ないに従って、死後別のものに生まれ変わるという考えですよね。この考えを信奉するのは、インド古代ののバラモン教（この宗教がカースト制度を作った）とそれから発展したヒンズー教、そして仏教です。と言っても、仏教の創始者、ゴッタマ・シッダールタ（紀元前 565~485)はあの世については何も話さなかったみたい。弟子達が来世についての教えを作っていった。

私は、この輪廻思想が間違っていると考えられるのですが、その理由は、もしそれが本当なら、私達が生まれてくる前に何であったか（犬か猫かあるいは人か）を覚えているはずだが、何も覚えていないということです。しかし、そう言うと、「輪廻思想では、生物が死ぬとき、その魂は記憶をみんな消されるのだ」と言い返されます。でも、もしそうならですよ、例えば、あなたの一番の親友（Ａ君）が死んだとしましょう。（少し気持ちの悪い例ですみません）。そして、その人は記憶を全部失って、全然別の人（Ｂ君）に生まれ変わったとしましょう。そしてＢ君があなたの前に現れたとしましょう。そのＢ君は、かつてあなたと一緒に遊び勉強したＡ君とは別人でしょう。もう、「私は、Ａです」と叫ぶ魂は存在しないのです。というのは、あなたと一緒に遊び勉強し駄じゃれを言い合って笑いころげたあのＡ君は、それらの記憶をまったく持っていないのですから。Ｂ君とはもう一度始めからつきあいをし直さないと友達にはなれないでしょう。だから、以前Ａ君に言った駄じゃれをもう一度言う必要がある。だから、もし輪廻思想が正しいなら、結局私は死んだら終わりで、その後にまったく別のものが存在し始めるということになるので、気をつけましょう。

もう一つの考え方は、死後人間の魂は宇宙の魂と合体する、とか何とか言う考えです。この考え方は、手塚治のまんが「火の鳥」で見たような気がします。このマンガはけっこう人気があって、私もかつて熱心に読みましたが、今考えてみると、構想は壮大で面白いですが、内容はそれほど深いものではないと思います。いずれにしても、この考えはどうもまじめに主張されているわけではないようです。そして、万一これが本当なら、これも結局人間の魂は死後になくなるということになるのはお分かりでしょうか。というのは、私の魂が死後に宇宙の魂と合体したら、もう私の魂は存在しないのですから。

前回、来世がないと考えたら、人生は出来る限り楽しんで過ごすことが人間の幸せだという考えになる、とか、来世での罰も報酬もないのだから、好きなことして過ごすべきだという結論になる、と言いましたが、覚えていますか。もし、そうなら、来世を信じない人はみな快楽主義者で、不道徳なひとになってしまうのですが、現実は必ずしもそうではあません。例外は一杯ある。それはなぜかと言うと、一つは、人間には、いくら本人が否定しても、良心というものがあって、心の奥底で「善を働き、悪を避けよ」という声を聞くからでしょう。もう一つは、そしてこれが多くのケースに当てはまると思うのですが、人間は口では「あの世なんてあらへん」と言っていても、心底そう考えていないか、あるいはまじめに考えずに口ではそのようなことを言っている場合があるからです。

また逆に天国と地獄を信じていても、目の前の楽しいこと引かれたり、辛いことを恐れたりして、途方もない悪事をすることもある。その理由の一つは、人間がみんな持っている弱さにあるでしょう。むかしむかしのコマーシャル（何のコマーシャルか忘れましたが）で、「わかっちゃいるけどやめられない」というのがありましたが、それです。でも、もう一つの理由は、この場合も死後のことをまじめに考えていない、あるいは理解していないことにある。

実際、死後の問題をまじめに考える人は少ない。とくに大人になって、毎日忙しい生活を送るようになると。でも、これが超まじめな問題であることは、皆さんも理解してくださると思います。でなければ、こんなことをわざわざ書くのは時間の無駄、本当に馬鹿げたことですよね。

それでは今日はこの辺で失礼します。

1998年1月22日

A.O.

設問1. 文中の○○○に適語を入れよ。（ひらがなで）。

今は一年の中でも最も寒い時みたいです。でも、幸いなことにこの冬もいつまでも冬ではなく、そのうち春がやってきます。これと同じようにこの世ではどんなつらいことも必ず終わりが来る。逆に楽しいことも同じなのですが。ということで受験の苦しみもそのうち終わる。また、「人生苦もありゃ、楽もある♯♭」で、高校に入ったからと言って「もうこれ以上何もいらへん。余は満足じゃ」と言うわけには行きませんよね。この世ではすべて相対的（絶対的の反対）だから、あまりに悲観も楽観もしないように。ということで、残りの時間を大切にしましょう。

ところで、この手紙ですが、初めに言いましたように中学３年生、つまり若干１５才前後の諸君には内容が少々難しいものになっていると思います。だから、今は分からないことがひんぱんに出てくるでしょうが、ぜひごみ箱に捨ててしまうのではなく、ファイルに閉じておいて、４年くらいたってから、暇で何もすることがないような時や、眠られない夜にでも、ファイルから引き出して読んでみてください。

精道は小中一環教育なので、小学生を身近に見ることができますね。小学生を見ていると、今中学生の人たちがどのように成長してきたのかがよく分かります。皆さんが小学１年生だったとき、たとえばどんなものに興味を持っていたか覚えていますか。おもちゃでしょうか、昆虫でしょうか、あるいは甘いお菓子、それともマージャンだったのでしょうか。それが小学４年生、６年生と進むにつれて、興味の対象が変わってきたのではありませんか。たとえば小学生の低学年では虫取り、高学年になるとスポーツ、中学生になると株、という風に興味の対象が移っていくことがあります。虫取りに夢中になっている小学２年生に、「ビートルズはよかぞ」と言っても、「そげんな音楽より、カブトムシの方がおもしろかもん」と言うでしょう。それと似ていると思いますが、現在みなさんに書いていることは、中学３年生にはあまり興味のない話題が多いと思います。「そいじゃ何でそげん興味もなかことば書くとね」と言えば、それは「あと数年たてば皆さんも本気でこんなことに悩む時がきっと来る。悩まない人間は成長しないから。けどその時には助言してくれる人を見つけるのが難しい状況になるかも知れへね。その時に、いくらかでも考え方を知るために役に立てば」と思って書いているわけ。だから、保存しておいて欲しいのです。

私も、高校時代に日本史の先生から、「君らは今は英語の歌やアメリカの映画に興味をもってるやろけど、日本人なら大人になったら演歌と高倉健やで」と言われていたのを覚えています。子供の頃は甘いものが好きでしたが今は醤油味、映画は『寅さん』、てな風に純日本的なものに益々関心をもつ今日この頃で、あの先生の言葉がしみじみと感じられる今日この頃です。では、「あの世シリーズ」No.3です。

第二章：あの世はあるという考えにについて

キリスト教やイスラム教などの宗教では、はっきりと死後の世界があることを主張していますし、大部分の人は死後にも死者の魂は生きていると考えています。でなければ、誰もお墓参りや精霊流しはしないでしょう。このように死後の世界があると信じるのは、決して奇妙なことではありません。でも、信じることと、説明できることとは別です。「俺は来世を信じるで」という人でも、「でも、なんでそのように信じるねん」と言われれば、上手に説明できるとは限りません。そこで、今日は、来世への信仰ではなく、来世があると言うふうに説明した人の考えを紹介したいと思います。

古代（むかし）において来世の存在を強く主張して、そのわけを説明したのが、ソクラテスとプラトンです。彼らはこう言います。「我々人間は、魂によってものを知るやろ。また、人間は目に見える滅びる世界だけと違うて、滅びないものについて知るやんか。まあ、例を挙げたら、たとえば、美しいということを考えてみ。美しいもの、つまりこの花、あの絵、あの景色、あの人、といったものは、いつかなくなってしまうけれど、美そのものはいつまでもあるやろ。つまり美とは永遠の存在ちゅうわけや。人間の魂が永遠のものを知ることができるんやったら、魂そのものが永遠の存在ちゅうふうに結論できるわけや。文句あるか」と。これは、少々込み入った説明ですが、「美」の変わりに、「真」とか「善」とかも当てはまります。かくて、ソクラテスは、いくらでも死刑を避けることができたのに、あえて死を選びました。これは言行一致の模範です。

カント（１８世紀のドイツの哲学者）という人は、「人間には心の中で『善を行い悪を避けよ』という道徳的命令があり、これに従って行けば完全になる。しかし、この世では、この命令に従って生きても、損をすることがある、だから、正しい生活をした人を報いるあの世があるはずだ」と言いました。以前「ある薄幸の少女」の話で書いたことですね。

ゲーテ（1749~1832；ドイツのロマン主義の作家）は、人間の精神がこの世では完成されないから、それが完成されるあの世があるはずだとしました（あまり説得的ではありませんね）。

フランスの哲学者ガブリエル・マルセル（1899~1973）（ここまで来ると「もう頭がドカンしそう」と言う人がきっといる。それならば決して無理せず、この紙をファイルに閉じてください）は、愛する奥さんの死を機会に、死について深く考えた結果、次のように言いました。「真の愛とは、愛する相手が時間を越えて永遠に生き続けることを望む。愛するものが死によって消滅するならば、それは愛の終わりになる。しかしもし死後も生き続けるならば、真の愛が成立する。だから、死後の世界はなくてはならない」と。ちょっと理屈としては筋が通っていないのですが、何となくわかるような気がしませんか。これは先日の手紙（28/97）で紹介した永井博士の直感と似ていますね。

みなさんは、チンパンジーやオランウータンが死んだ仲間を埋葬するなんて聞いたことがありますか。動物の中で死者を埋葬する儀礼をもつのは人間だけです。ネアンデルタール人（今から３万年～１５万年前にユーラシア大陸とアフリカに住んでいたらしい）は、すでに死者を埋葬し、遺体のそばに花を添えていたことがわかっています。愛する人の死を悼み、その死後の幸福を願うことは、非常に人間らしいことですが、これは迷信なのでしょうか。次は、キリスト教の考え方を紹介したいと思います。もうよく知っているかも知れませんが。それではお元気で。　1998.1.25　A.O.

申し遅れましたが前回と前々回の番号を29→28，30→29になおして下さい。番号をつけまちがいました。すみません。

「今日は立春、暦の上では春です」とさっきラジオが言っていましたが、受験戦線に突入した皆さんにとっては、そういうこととは関係なく、ただ時間だけが過ぎていくように感じるかもしれません。大本営発表の情報によれば、中学３年生の戦況は連戦連勝だそうでこちらも嬉しいです。こういうのを鎧袖一触、疾風怒濤、当たるところ敵なし、急がば回れ、七転び八起き、とでも言うのでしょうか。しかし、戦上手は物事がうまく行っているときこそ、注意するものです。注意一秒、怪我一生。

『徒然草』に木登りの名人の話があります。その人は高さ２０㍍くらいの木にするすると上って、またさっと下りてきたのですが、最後のところ、つまり地上１メートルくらいになって急に動きがゆっくりになったので、見ていた人が「なんで、あんたそんな低いところで慎重になるん」と聞いたところ、「高いところは緊張して注意してとうからおっちゃけることもないけど、低いところこそ気が緩んで墜ちることがあるからや」と答えたそうです。注意一秒、怪我一生。

何か大きな企画をする人が持つべき心構えとして、「悲観的に準備をし、楽観的にことに当たる」ということがあるのだそうです。別の言葉で言いかえると、準備をするときは最悪の状況を考えながら準備をし、実際に仕事を始めたら、物事を良いほうに考えて進めよ、ということです。ところが凡人は、スポーツの試合を例にとれば、普段の練習のときには「こんなもの、ちょろいちょろい」と言って相手をなめて準備を怠り、いざ試合になると「失敗したらどうしよう」とびくびくしてだらしのない試合をするものです。と言っている本人が凡人なので、私にもこの種の苦い経験があるのですが、平凡か非凡かの分れ目の一つは、失敗の経験を活かすかどうかにあるのではないでしょうか。注意一秒、怪我一生。

ボッス（1450ころ～1516）の「彼方の世界の幻想」の中の「天上界への昇天」ヴェネツィア、ドゥカーレ宮殿蔵

わけの分からないおしゃべりはこれくらいにして、それでは「あの世シリーズ」に移ります。が今回からキリスト教ではどう教えているかを説明します。キリスト教の教えは、イエス・キリストの教えであって、カトリック教会はそれを忠実に伝えていると自負しているわけですが、その教えの中でも信じなければならない部分（これを教義｛ドグマ｝と言う）と、各自が勝手に解釈してよい部分があります。そして、教義の部分は普通とても限られていて、大きな部分がそれぞれの解釈に委ねられています。この「あの世」に関しての教えでも、教義の部分は少ないので、神学者たちが残りの部分について様々な意見を言っていますが、それも紹介したいと思います。

何年か前にテレビで臨死体験についてのドキュメンタリーがありました。臨死体験というのは、事故などでほとんど死にかけたときの体験です。その状態から回復した人たちの証言を集めた番組でした。それによると、多くの人が死にかけたとき向こうのほうに明るい光を見たと言っているそうです。本当かどうか知りませんが、面白いでしょう。左頁に載せた絵は、その番組でも取り上げられたものですが、上のほうに明るいトンネルのようなものがあり、その向こうが死後の世界となっている。そこには何があるのでしょう。

第三章：あの世についてのキリスト教の教え

キリスト教は人間は霊魂と体からできていて、肉体が死んでも霊魂は永遠に生きると教えます。霊魂がいつ体から離れるのか、脳が死ぬときか心臓が止まるときか、は科学の問題で教会は何も言っていません。

しかし、はっきり教えていることは、霊魂が体から離れた瞬間に審判があるということです。これは個人と神様の個人的な審判なので「私審判」と呼ばれます。好奇心を引かれることは、私審判とはどのように行なわれるのかということですが、これについては聖書には何も書いていません。イエス様は、世の終わりにある「公審判」（最後の審判と同じ）についてははっきり教えましたが（マテオの２５章）、私審判については話してれませんでした。そこで、以下に書くことは、神学者たちの言っている意見です。つまり、これと違う考えを言うのもまったく自由てわけ。でも、一様聞いて考えてみてください。

霊魂が体から離れると、瞬間的に自分の人生をまるで映画を見るように見るらしい。そうすると、自分のした良いこと悪いことさぼってしなかった良いことなど一つ残らずはっきり見える。私審判のことを「真実の時」と言うのですが、それはその時には嘘ごまかしができないからです。自分を裁くのは、神様というより自分自身なのです。判決が下るとき、「それはおかしい」と反論する気持ちさえ起こらないと考えられる、ってわけ。

もう一つの注意は、審判とは、古代エジプトの絵にあるように、天使が天秤をもって、「あんたがした良いことは１２０㌘、悪いことは１４０㌘。差し引きするとマイナス２０㌘ですね。残念だけど地獄に行きなさい」と言うようなものではないらしい。善業と罪を比べるのではなく、私たちがどのような態度で人生を過ごしてきたか、つまり根本的に、自分のためだけを考えて生きてきたのか、それとも神と隣人のことを考えて生きてきたのか（結局人の生き方とはこの二つのどちらかになる）が、判定の対象になる、とうわけです。イエス様の公審判についての教えによると、人は生きているときに困っている隣人のことを考えて助けてあげたか、それとも無視したかで裁かれています。つまり、自分のことだけ考えた利己主義者か、隣人に気を配ることができる人であったか。

このようなことを考えると少し恐くなのが普通かも。でも神様は私たちの父である、というイエス様の根本的な教えがある。だから、この父の良い子として生きようとしていれば、恐れることは何もない。もし、今から神様と親しい生活を送っていれば、審判のときに神様は優しい父として接してくださるでしょうから。また家族、友達の中で困っている人はないでしょうか、という気配りにも心がけた方がいい、という結論です。

今恐れるべきはむしろインフルエンザのビールスです。

元気なのは財産ですね。　1998.2.4

南の沖縄ではプロ野球のキャンプが行なわれているかと思うと北の北海道では雪祭り。長崎でも少し暖かい日もあるようになりましたが、３月の上旬までは寒いのが当たり前。気を緩めず、健康に気をつけましょう。では。

第四章；続あの世についてのカトリックの教え。地獄とは。

１４世紀のイタリア人のダンテという人の『神曲』（Divine Comedy）という本を書きました。この本はイタリアルネッサンスの代表的な本で高校で習うでしょうが、ダンテがベルギリウスというローマ時代の詩人に連れられて地獄、煉獄、天国を見ていくというストーリーです（と偉そうに言いますが私も地獄篇のおもしろい箇所を拾い読みしただけです）。私たちもこの順番に見ていきたいと思います。

カトリック教会が地獄について教えていることは次のことです。①地獄は存在する。②それは永遠である。③その苦しみは、二つ。神を見ないことと感覚的な苦しみ。④恩寵を持たない状態で、悔い改めずに死んだ霊魂が地獄に落ちる。

これから、これらの教えを説明したいのですが、それはいろいろな神学者が考えたことで、上の四つのことだけが、カトリック教会の教義（信じるべき教え）です。

○　○　○　○　○　○　○　○

まず、地獄に行く魂とはどのような人か。それは一言で言うと、愛を持たなかった人と考えられる。人間の心を扉をもつ建物と考えてください。ある人はその扉を開いて他の人を入れてくれます。これは他人を愛する人です。他方、誰に対しても扉を決して開かない人もいます。困っている人を見て、自分がしたいことがあるのにその人を助けてくれる人、その人は心の扉を開く人です。それに反して、自分の時間、好み、力、才能などはぜ・んぶ自分のためにのみ使う、他人のためには一切の犠牲はしないという人もいます。地獄とは、そのような生き方をした人が行くところ。他人に対して愛の変わりに、無関心や憎しみのみをもって生きた人が、狭いところにぎゅうぎゅう詰めにされたところと想像したら分かり易いかも知れません。オェ（吐きそうになること）。互いに憎しみ会っている二人は、この世では顔も見たくないので、遠くに離れて住むようにしますよね。でも、地獄ではそうは行かない。ぴったりくっついて顔を横に身ながら生きるわけ。オェ。人間は神の被造物ですから、人間を憎む人は結局神を憎んでいることになる。そこで審判のとき神を見ると、神から離れたいと思うわけです。ですから、地獄に行く人は、どうも好んで行くらしい。

地獄の苦しみについて。地獄の苦しみは、神学者によれば二つある。一つは神を見ないこと。もう一つは何かの感覚的な苦しみで、聖書には火で焼かれる苦しみと言われています。こう言うと、「二つ目は恐いけど、一つ目、つまり神様を見ないことは別に何も苦しいことはないんじゃないの」と考えるでしょう。ところが、実は一つ目の方がずっと苦しいらしいのです。なぜか。それは、この地上では私たちは神様についてほんの一部しか知らないので、それがどれほど素晴らしいかが分からない。そこで、この世では神様を知らずに生きても別に大した不便は感じないわけです。けど、霊魂が体から離れて神を直接見ると、その美しさ（神は美そのもの、善そのもの、真そのもの）など完全性を目の当たりにすると、それに引きつけられざるを得ないわけ。地獄に行く魂は、神に引きつけられながら、それを手にすることができないので魂が引き裂かれるように感じると言われます。

前にも言った比較ですが、６才の子供に「人を愛し、人から愛されるとは素晴らしいよ」と言っても、「そんなことより、飴玉をしゃぶる方がよか」と言うでしょう。このように生きている人間は、神の愛よりお金や快楽や名誉の方に強く引きつけられるのですが、真の神の姿を見れば、それらは芥のように見えるはず。

感覚的な苦しみは、聖書に何度も書かれているから、火があると考えられます。聖書には、地獄の風景を描いた箇所はありません（あったらここで写真を載せたいですが）。ただ、ある人たちに神様が特別に地獄を見せた、と言われることはあります（こう言うのを私的啓示と言います。別に信者でも信じる義務はありません）。例えば、１９１７年ポルトガルのファティマと言う村でマリア様が出現されたと言われているのですが、あるときマリア様はルチアという女の子（当時１０才。この方は後にシスターになって今も健在です）に地獄を見せたそうです。それは火の海でした（詳しいことを知りたければ『ファチマの牧童』、８８ページを読んでください）。また、１６世紀に聖テレジアも同じ経験をして、その様子を少し述べてから、「ここで私が感じたことは、ほんのわずかでもそれを想像させることもできませんし、人は決してそれを理解できないでしょう」と言っています（興味があれば、『イエズスの聖テレジア自叙伝』、中央出版社、４０１－４０２ページを参照）。

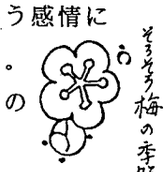
地獄が永遠であることについて。「神様が愛深い御方なら、どうして永遠に人を苦しめることを許されるのか」とか、「人間は有限の存在なのに、無限の罰を受けるに値するような悪事ができるのか」などという反論があります。教会の中でも、３世紀に出た有名かつ立派な神学者オリゲネスという人は、「地獄に言った魂も結局浄化を受けた後天国へ行く」と考えたのですが、この説は認められませんでした。なぜか。それはイエス様が、余りにはっきりとしかも何度も地獄も天国も永遠であると言われたからです。これは人間が決めることではなく、神から教えてもらった通りに伝えるしかないことです。

それにしても、永遠の罰は神の愛に反するというのもなるほどとうなずける。しかし、神は愛であると同時に正義である、ことも忘れないでください。また、最低の極悪人でも、死ぬ瞬間に「神様、お赦しください」と悔い改めれば、赦されることも。もし、ユダが最後の瞬間に赦しを願っていたら救われているわけです。このことは無限の愛の現れだとは言えませんかね。例えば、６０年間ずっと君の悪口を言い続けていた人が、死ぬ間際に「赦してくれ」と言ったとすると、君は赦せますか。他方、赦しを願わない人を神様が赦せないというもの、少し考えればすぐ分かる。というのは赦しを願わない人に、「赦してやろう」と言っても、「なんでわしを赦してくれるの。わしは悪いことしてへんのに」と言い返されるでしょう。

死ぬ直前に自分の非を認めて赦しを願うことは、普段から悪いことをしたときにそれを認めない人には難しいことかと思います。正直一番、罰永遠、でしょうか。

1998. 2.7　長野オリンピックの開催の日。なぜか興味のない私です。　A.O.

聞くところによれば、若い人の間で「切れる」という言葉があって、「切れたら何をしても許される」と考えている人が多いとか。そして、そういうノータリンに限って簡単に切れるらしいのです。「切れる」ということは、知性の働きを停止して怒りという感情によってのみ動くということですから、その時は動物と同じになっているわけです。簡単に動物と同じになる人は、馬や鹿と違うところがないのだから、馬鹿と呼ぶのは極めて適切なことかも知れません。



本来の人間は、外からの刺激に対して、それを受けとめ分析し判断して、「善い」と思ったことをするように努力する。でもこれができるためには、刺激に対する反応を押さえることができなければならない。それをセルフコントロール（自制）と呼びます。昨年セリーグの新人王になった広島の澤崎投手はセルフコントロールがよくできると言われていました。つまり、カッとなる場面でも、感情を押さえて冷静に状況を判断できたり、調子が悪いときも悪いなりの投球ができるわけです。これが人間らしい動き方。感情はそれ自体悪いものではない。だから善いものなら伸ばしたらいい。けど、悪いものなら、それをコントロールしないと動物と同じになるわけです。

第五章：煉獄について

皆さんはソルジェニーチンというロシアの作家のことを聞いたことがありますか。ロシア語では「それじゃ、兄ちゃん」と発音されるのだそうです。この人は、スターリン時代にソ連の将校で第二次世界大戦中に大きな活躍をしたのですが、友人に書いた手紙の中でスターリンを批判していたのが見つかり収容所に入れらる。１０年間の収容所生活を生き延びて、学校の先生をしながら小説を書き、政府からさまざまの妨害を受けながらも『イワンデニーソビッチの一日』という本でノーベル文学賞を受けた（１９７０年）人です。

この人の作品の中に『煉獄の中で』という本がある。この「煉獄」とは、科学者たちの収容所のことを指しているのですが、その理由はソビエトにあった無数の収容所は普通は肉体労働をさせるもので、普通の人なら住まないような極寒の場所にあり、設備も粗末で食べ物もわずかなので死ぬことも珍しくない。これに対して科学者の収容所は、寒くもないし食べ物もあるし、仕事は研究（といってもスターリンから命じられた国家もための研究で、小説では盗聴器で写し取った声を聞き分ける機械の開発が命じられていた）というわけで、一般の収容所を地獄とすれば、こちらは煉獄だというわけです。

ちょっと脱線ですが、ロシア革命が起こるとすぐにレーニンは強力な秘密警察士を組織し、たくさんの人を「人民の敵」として摘発しました。その目的の一つは、反政府の活動家を根こそぎにするためですが、もう一つの目的は、その人たちを収容所に送り込み、ただ同然の奴隷を確保することでした。スターリンは各州に摘発する人数をノルマとして課して、それが達成できなければ責任者自身が銃殺か収容所送りになった。こうやって大運河や鉄道、発電所などが次々と作られていったわけです。まったく同じ目的で、第二次世界大戦が終わると満州で捕まえられた日本の軍人や民間人も、国際法に反して抑留し働かせたのです。６０万人が抑留され１０万人が亡くなったと言われます。ついでながら、さっきの『イワンデニーソビッチの一日』は、その収容所の普通の一日を描いたもの。『収容所群島』という本では、いかにして逮捕され、尋問され拷問を受け収容所に誰にも気づかれず送られるかが、ソルジェニーチンが実際に収容所で知り合った人たちの証言をもとにして書かれています。ここで脱線を終わります。

しかし、カトリックは、煉獄はそんな甘いもんやないと言う。教会の公式の教えではないのですが、大部分の神学者は煉獄の苦しみはこの世のどんな苦しみよりもひどく、地獄のそれと同じであると教えます。

この煉獄（purgatory）という言葉は、実は聖書にはなく、またそれができたのはヨーロッパの中世（５世紀から１６世紀の間）なのです。そこで、ルターは「煉獄なんてのは、カトリック教会がでっちあげたことや」と言い放ち、死後は天国と地獄しかないとし、プロテスタントはこの考えです。カルビンの支配していたジュネーブで、あるとき老人夫婦がお墓の前で祈っていたら、「なにを祈とるんや。ひょっとしておまえたちは煉獄を信じとるんとちゃうけ」と言われて罰せられたという事件が起こりました。

それではカトリックはどうして煉獄の存在を主張するのでしょうか。まず、聖書には、確かに「煉獄」という言葉はありませんが、次のようなカ所があります。まず、イエス様の言葉に「聖霊に反する罪は、この世でもあの世でも赦されない」（マテオ、12章、32）というのがあります。これに基づけば、「あの世で罪が赦される」ことがあるわけですよね。ところで天国には罪のない人が行くし地獄に行けば罪は赦されない、ということは天国でも地獄でもなく、死んでから罪が赦されるところがあるやんか、ってわけ。もう一つは、「彼自身は、火を通るようにして救われる」（コリント前、3章、15）という文。これも天国なら火はないし地獄なら救われない、じゃからして火で浄化されて救われるところがある、って結論を引き出すのです。

また、もう一つの論拠は、キリスト信者は昔から死者のために祈る習慣があったことです。というのは、もし天国と地獄しかなければ、亡くなった人のために祈るのは無駄でしょう。なぜって、天国に行った人のためには祈る必要はないし、地獄に落ちた人のために祈っても役に立たないから。だから、もしキリスト信者が最初からそういう習慣があったなら、聖書には載っていないけれども、イエス様か使徒たちから口頭でそのように教えられたと考えられるわけです。

煉獄の火の罰は厳しくても、そこで苦しむ霊魂は喜びにあふれていると考えられます。なぜならば、ここには希望があるからです。その火は罪の汚れを落とすのに役に立つし、その後で神様に会うことを知っているからです。ちょうど、みなさんが偉い人に会いに行くとき、ズボンにちょっとした泥のしみでも見つかったら、まずその汚れをとってから会いに行こうとするのと同じです。もし天国と地獄しかなければ、天国に直接行けると確信している人は少ないでしょうから、大変こわいことになるのではないでしょうかね。

風邪かな、と思ったら卵酒をお勧めします、と言いたいところですが、未成年には飲酒は禁じられているので、卵お茶か、卵コーフィーはどうでしょうか。おいしかったら教えてください。私は試す気がない。

でもまず寝ることでしょう。　1998. 2月9日

かつての同僚の先生が手紙をくれたのですが、そこに次のようなことが書かれていました。「ただ今入試の採点中です。今年は数学の採点に当たりましたが、数学では一問で１０点くらいの差がつき、いまさらながら受験の基本的技術（答えを分かりやすく書く、消しゴムで消す場合はきれいに消すこと、など）の大切さが痛感されます」と。

私も何度も入試の採点をしましたが、まったく同じ意見を持っています。学校でのテストなら、回答者が誰か分かっているから、「こいつはもともときたない字を書くやっちゃ」と加減したり、また「こいつには自信つけさせなあかんからな」と思って、少し緩めに点を付けてくれるという私のようなやさしい先生もいるかも（この優しさはあだとなる）。けど、入学試験はまったく違う。「だいたい自分が採点しているのは誰の答案かはまったく分からへんわけや。そもそも何千枚もの答案を採点しないとあかんやろ。せやから、きたいない字で書かれとったら、それだけでペケにしてまうかも知れへんで」と言いたい。

汚い字というのは、へたな字とは違う。下手でも丁寧に書かれていたら、「この子は、一生懸命に書いている」と、間違っていてもマルにしたくなる。ところが、雑な、汚い字は、「こいつはがさつな人間やろ」と、その人間性まで疑ってしまう。みんなも、一度採点する側の気持ちを考えてみてちょ。決まった時間内で、たくさんの採点をしないといけないときに、読みにくい字を書いていたら、万一採点する人が老眼だったら、いちいち眼鏡をはずして「これは一体何を書いとんかいな」と見てくれるでしょうか。もちろん、どこにもまじめで優しい人がいますが、大多数の人はじゃまくさいことはしないのが現実と違いまっか。それはみんなでも同じでしょう。自分の答案を書いたらちょっとそれを眺めて、これは採点し易いかなと考えてください。試験中となりと話すと、カンニングととられる。そうなると全教科ゼロになる。まぎらわしい動作はやめよう。

でも、上に言った受験の基本的技術は、普段からしていないとなかなかその場限りでできるものではない。だから、普段の心構えが大切になるわけです。学校での試験は、その意味でも、入試の練習だったわけ。試験に限らず、普段の生活の中で、「小さいことに気をつける」癖、面倒くさいと思う気持ちに打ち勝つことを心がけていたら、いざ鎌倉、というときに頼りになる人間になるでしょう。

第六章；天国について

菊池寛という作家が『極楽』という短編小説を書いていますが、その中では極楽とは何の苦しみもなく寒さも暑さも感じない状態のうちにずっと蓮の花の上で座っているところで、とても退屈なところとして描かれています。確かに天国は苦しみのない状態ですが、それだけならその状態が長く続くととても退屈になると想像してしまいますよね。

聖書には、天国があること、そしてそれが永遠の幸福であることははっきりと教えられていますが、それでは天国とはどういうところかについては具体的なことは説明されていません。「神は人の目の涙をすべてぬぐわれ、死ももうなく、悲しみも叫びも苦労もなくなる」（黙示録、21章、4）とか、「今の時の苦しみは、・・光栄（天国）とは比較にならないと思う」（ローマ人への手紙、8章、18）とか言われていますが、それではどんな楽しみがあるのかについては何も言いません。

そこで神学者たちはいろいろ知恵を絞って考えたのですが、その結論は天国の幸せは二つ、すなわち①神を直接見ること、②親しい人々と永遠に共に暮らすことです。神を直接見る（これを至福直観と言います）とは、実際に聖書に「神を顔と顔を合わせて見る」（コリント前、13章、12）とか「神をそのまま見る」（ヨハネ第一の手紙、3章、2）とあるからですが、これがなぜ幸せなのかは現在の私たちには完全にわかりません。地獄とは神を見ないところだと言ったときに説明したように、神は善そのもの、美そのもの、無限に完全な御方などなどですから、その御方をあるがままに見ることは人間の能力の全欲求を満たすことなのだけど、今は神のことはほんのちょっぴりしか分からないのでその素晴らしさも分からないのです。

二番目のことは、もっとピンと来ますよね。この地上では、「会うは別れの始め」と言うように、どんなに親しい人でもいつかは別れなければならない。みなさんももうしばらくすればほとんどのクラスメイトと別れ別れになるでしょう。また高校で新しい友人ができるけれど、３年たったらまた分かれる。大学に入っても、就職してもまた同じ。結婚したらその相手とずっといっしょに住むわけですが、夫婦でさえも死ぬときは独りぼっちで死んで行くわけです、はい。そう考えると、この世は無常だという『平家物語』の言葉（これは仏教の考えですが）がなるほどと感じられます。

でも、キリスト教の天国はこの無常とは無関係。天国でかつて別れた人と会えれば、それからはお別れの挨拶をする必要はない。これはうれしいことではないでしょうか。また、先になくなった人と再び会えるのも大きな喜びのはず。また、この地上ではどんなに親しい人でも、ちょっとした嫌な点があるものです。この地上では完全な人はいないから。だから、どんなに愛しあっている人たちの間でさえけんかがあるでしょう。でも天国では、そういうわだかまりは全くなく本当に良い関係で一緒にいることができるってわけ。　そうは言っても、天国の幸福を想像することは難しい。ある人は、「この世では苦しみの経験の方が幸福の経験より多くて鮮明やから、地獄については想像するのは簡単やけど、天国については想像しにくい」と言っています。ただ、天国の幸福は、この世で考えられる限りの幸福を無限に超えるものだと思って間違いない。神様はけちじゃないから。だから、皆さん一人一人自分がもっとも幸せだと思っている状態を考えて、それを無限に超える幸福が永遠に続くものが天国だと思ったらいいのではないでしょうか。

ともかく、キリスト教の教えは、神はこの永遠の幸福を与えるために人間をお造りになったということです。それを考えると、今の受験の苦しみもそう大したことに見えないのではないでしょうか。この天国は、「暴力で手に入れる」（マテオ、11章、12）とイエス様はおっしゃいました。この暴力とは掟を守ること、すなわち愛することです。「姦通するな、殺すな、盗むな、偽証するな、むさぼるな、その他すべての掟は、『隣人を自分と同じように愛せよ』という言葉に要約される」（ローマ人への手紙、12章、9）と書かれてある。

今日は５月下旬の気温らしい。けどまた寒くなるはず。健康管理に気をつけてください。

1998.2.13.　もうすぐ春だ

今日も授業をボイコットせず、ヤジも飛ばさずまじめに質問や返事をしてくれて誠に謝謝。そのお礼ではありませんが、また頭がねじれるような複雑な手紙を書きます。

前回天国について話しましたが、キリスト教ではこの世界の歴史にはいつか終わりがあり、その時に最後の審判が行なわれ、その後は天国と地獄が永遠に続く、と教えます。だから、人間にとって本当の悪は永遠の罰のみ。そして、その原因が罪ですから、この世で恐れるべきは罪を犯すことのみという結論になります。

けど、ここで一つの問題があるのです。これはかなり難しい、というより理解不可能な問題なのですが、説明だけさせてください。仏教に自力本願と他力本願という二つの考えがあるのを知ってるでしょう。自力本願というのは、自分の努力によって、つまり厳しい修業をすることによって悟りを開けるという考えで、禅宗（日本では鎌倉時代に始まった曹洞宗と臨済宗など）がそれです。他方、他力本願とは、救いは人間の力では達成不可能で、ただただ仏のご慈悲にすがるしかないという考え。浄土宗（法然）や浄土真宗（親鸞）や法華宗（日蓮）がそれでしたね。親鸞によれば、生涯に一度だけでも「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば、どんな悪い人でも救われる。

それでは、キリスト教は自力本願、他力本願のどちらなのでしょうか。ここで、キリスト教と言ってもプロテスタントとカトリックを区別しなけばいけません。プロテスタントの創始者のルター（1483～1546）は、親鸞と同じ考え方です。つまり、ルターは「人間はアダムとイブの原罪によってとことん堕落してしもた。全人類はその堕落し切った本性を引き継いどるから、ええことしょうと思てもできへん。つまり、人間がする行いはすべて罪や。せやけど、イエス・キリストを信じたら、その信仰のみによって救われるんや」とドイツ語で言った。つまりこちこちの他力本願です。この場合、人間は自由に善業を行うことができず、信じさえすればあとは神様が一方的に救ってくださることになる。

それに対して、カトリックは、確かに天国に行くのは人間の力では無理で神の助け（恩寵）がいるが、人間がその助けを受け入れて協力する必要がある、と教えます。アウグスティヌス（４～５世紀）は、「神はあなたなしにあなたを造られたが、あなたなしにあなたを救うことはない」（分かるかな）と説明しています。カトリックでは人間に自由を認めるわけです。だから、カトリックの考えでは、地獄に落ちる人がいるならば、それはその人が自由に悪を選択した結果である、いうならば自業自得なのだ、なるほど、となるわけです。

でも、問題はそう簡単ではない。なぜならば、「人間は自由やと言わはっても、神様は初めから一人一人の人間がどんなことをするかをご存知でっしゃろ。そうやったら、地獄に落ちる人がいるとして、神様はそのことを分かっといてその人を造られるんやさかいに、結局人間の運命は前もって決まっとるわけで、自由なんて見せかけとちゃいまっか」と反論ができるからです。人間の運命が生まれる前から決まっているという考えを「予定説」と言います。これはフランス人の宗教改革者カルビン（1509～1564）の有名な説です。彼はスイスのジュネーブを支配して、後では自分の始めた宗教を他の国にも広げるために宣教師を派遣し、特にオランダとイギリスで成功を収めました。この信者たちは、当然「予定説」を聞いて恐れました。「ヒェー、も、も、もし私が地獄に予定されていたら、どうしたらええん」と。それに対してカルビンは、「心配せんでもええ。あんたらはこの世で成功しているやろ。現世での成功は神様の祝福を受けている証拠やから、救いに予定されていると考えて間違いないんや」と言って安心させた。そこで、カルビン派の信者たちは、一生懸命に働き、儲けたお金を貯金して倹約に倹約をかさねて成功していったのです。

ついでですが、この考えに従えばこの世で成功していない人は滅びに予定されているわけで、「そんな人間は人間じゃねえ」という結論が出てきてもおかしくないでしょう。アパルトヘイトの南アフリカは、もともとカルビン派のオランダ人が植民したところですし、アメリカ合衆国もイギリスの清教徒が植民を始めた国だと言えば、人種差別と予定説が関係があることが予測されますね。

もう一つついでですが、カルビンは非常に厳しい道徳を信者に強制しましたので、彼らは清教徒（Puritan）と呼ばれました。実際彼の支配したジュネーブや、彼の教えを引き継いだクロムエル（1599～1658）の独裁下のイギリスでは、たばこだめ、お酒だめ、ダンスホールだめ、映画館もゲームセンターもだめ、となったのです。

これに対してカトリックは、この予定説を誤りとして断罪しました。「でも、こんな問題については、何を根拠に結論を引き出すんや」と問われれば、それは聖書です。聖書にいかに書かれているか、それこそが最終的な根拠なのです。誰も死後の世界を見てから帰ってきて「おい、天国ちゅうところはこんなところやぞ」と話した人はいないのですから、人間の言うことはどれも想像に過ぎない。けど、聖書が神様の霊感を受けて書かれていると信じるキリスト信者は、聖書に頼るわけです。それでは聖書には何と書いてあるか。この点について一番大切な言葉はこれ。「すべての人が救われて真理を深く知ることを神は望まれる」（ティモテオ前、2章１、4）。神がすべての人の救いを望まれることは、聖書の他のカ所からも結論できる教えです。だから、もしそうなら神がある人をわざわざ地獄に落とすためにお造りになることは絶対にありえない。

神はすべてをご存じ（全知）というのは本当。だから、誰が救われ誰が滅びるかも神はご存じ。でも、ある人が滅びるということを知っているということと、その人を滅ぼすということは別と考えなければいけません。私たちが悪いことをしたとき、神が前もってそうするように決めていたから私たちがその悪を行ったわけではなく、やはり、自分で進んで自由にそれを選択したのでしょう。でなければ、たとえ悪業をしても、本人の責任ではなく、前もってそれを決定していた神様の責任になる。

とはいっても、この問題は最終的に人間には理解不可能なのです（人には理解不可能な啓示された事実を奥義｛ミステリー｝と言います）。ただ、カトリックの教えとして三つのことだけ明確にしておきます。①神は誰をも永遠の罰に定めるということはない。②神は私たちが善を選ぶように助けを与える。③しかし、善を選ぶか悪を選ぶかは私たち人間に任されている。言い換えれば、私たちは自分で自分の運命を決めることができるということです。だから、「人生、明るく生きなきゃ損だ」という結論になる。

1998.2.16　A.O.

オリンピック村でアメリカのアイスホッケーの選手が暴れて器具などを壊したそうです。また、大麻を所持している人も複数いたとか。スポーツ選手のこの手の事件を見るたびに、「スポーツができても別に何にも偉いことがないのに、ちょっと優勝して人気者になった（らいで）鼻高々になるのは人間が貧しいねぇ」と江戸弁で思ってしまいます。それに対してスケートの清水選手が「これからもメダルに恥じない人生を送っていきたい」と言っていたのには感心させられました。人間の評価はスポーツや勉強やその他の技術で決まるわけではない。

今日から何回かにわたって、皆さんが卒業する前にどうしても言っておきたいこと、何をかくそうイエズスキリストについてお話しするつもりです。その前に福音書について迫ってみたいと思います。（頭に引きつけを起こさないため、体調が悪い人は読まないこと）。

○　○　○　○　○　○　○　○　○

第一章：福音書がいつできたかについて話される章。

なまけものはよくない。

もちろんよく勉強することは立派なこと。

新約聖書の中には、イエズスキリストの教えと活動を記録した四つの福音書、最初の教会の様子を書いた『使徒行録』、使徒たちの手紙、そして預言書である『黙示録』がありますが、ここではイエズスキリストの伝記である４つの福音書だけを扱いますそれではまず、この四福音書が書かれた年代について見て行くことにします。

四つというのは、マテオ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書であることはみんなも知っているでしょう。でも実はどの福音書にも「これは私マルコが、ローマで紀元６２年に書いた」とかいうふうに、著者がいったい誰で、いつどこで書かれたかを示す文はないのです。では、どうして誰がいつ書いたのかが分かるのでしょうか。

第二章：その前にまず新約聖書を書いたのは誰かについての説明がなされる章。

まず、どうして第一、二、三、四番目の福音書が聖マテオ、聖マルコ、聖ルカ、聖ヨハネのものだと言われるのかという点ですが、それは非常に昔からたくさんの人が証言し、そのように伝えられて来たからです。「でもそんな伝えなんか信頼できるの」と疑ぐる人もあるでしょう。もし、ほんの二三人か四五人、あるいは六七人の証言しかなければ、簡単に信用しない方がいいに決まってる。でも、福音書の著者は誰かについての伝えの場合、それが書かれたのとほとんど同時代の教会がそう伝えて来てそれを信じているのだから、十分に信用できる、ってわけ。

でも疑ぐりぶかい人は、「でも、福音書を書いたのは別の人で、その人が自分の書いたものを本物らしく見せるために、マテオとかマルコの名前をつけたんとちゃうやろか」と考えるかも。もし、この仮説のように福音書を書いた人が別人で、自分の書いたものに信憑性を与えるために、使徒や一番古いキリストの弟子の名前をつけたのなら、ヨハネは別にして、後の三つの福音書の著者にどうしてマテオやマルコやルカの名前を選んだのでしょうか。というのは、この中でイエズスキリストの直接の弟子はマテオだけで、マルコとルカは１２使徒ではない。ルカに至っては生存中のキリストに直接顔を合わせたこともないのです。マテオは１２使徒のひとりですが、１２人の中では別に目立った人ではなかった。もしこの仮説のように、後で福音書を書いた人が偉い弟子の名前を自分の書物の著者にでっちあげるなら、ペトロかヤコボ、またはアンドレアなどの、もっと格の上の弟子を選んだはず。「じゃあどうして、マテオやマルコやルカが福音書の著者になってるのか」。それは本当にその人達が書いたから、というのが一番妥当な答えとなるわけ。

第三章：いよいよ本論に戻って新約聖書が書かれたのいつかが明らかにされる章。

さて、頭の血のめぐりが速い皆さんはもうお気付きになったかも知れませんが、これらの福音書の著者はみな１世紀の人、つまり紀元１００年以前に死んだ人なのです。平成３年に死んだ人が平成１０年に本を書いたなんておかしいでしょう。この４つの福音書の著者が１世紀の人であれば、だれが何を言おうが、四福音書はみな紀元１世紀中に、つまり西暦１００年の前に書かれたのです。みなさんの持っている教科書や資料集を調べてみてください。ときどき「新約聖書がつくられたのが２世紀」と書いているものがありますが。これは１９世紀にプロテスタンとの神学者たちが言っていたことで今では認められていない古い説です。

第四章：なぜ新約聖書の年代が分かるかについて説明がされるようで説明されない章。

「でもどうして、福音書の書かれた時がわかるの」と聞く人がいたら素晴らしい。さっき言ったように、福音書のどこにもそれがいつ書かれたのかを示す文はない。そこで、それを探す手掛かりは、①他の人の証言、すなわち伝え。②書かれている内容をよく調べる。③他の本に引用があるかどうかを調べる。などです。

聖書という本は人類の歴史上最も読まれたばかりでなく、最も調べられた本でもあるのです。だから聖書については、今まで何千何万の研究があるわけ。そこで、もしそれらの研究を逐一（一つ一つ全部）紹介していたら、時間がいくらあっても足りない、すなわち日が暮れてしまうので、ここでは証拠を二つ紹介します。一つは、１世紀の末にクレメンスというローマ教皇のこと。この人が教皇職にあった９６年頃にコリントという町の教会のもめごとを解決するために手紙を書いたのですが（そしてこの手紙は今も残っているから、もしよければ読んで下さい。ただし外国語で）、その手紙の中でマテオとルカの福音書が引用されています。もう一つは１０９年に殉教したアンティオキアのイグナチウスの手紙には聖ヨハネの福音書の引用がしばしば引用されている（この手紙は日本語に訳されているので、「嘘やろ」と心の中で思っている人は是非それを読んで確かめて下さい」）。

今挙げた証拠だけでは不十分と思われる人、もっと詳しく知りたいという篤学（学問に熱心）の人のために参考文献を上げておきます。

①一番簡単なのは、講談社『新約聖書』の中にある説明。　②次にすこし難しいかも知れないけど、茨木晃『新約聖書の成立について』、中央出版社、　③少々難し過ぎて、成人するまで待つ必要があるが、岩下壮一、『カトリックの信仰』、講談社学術文庫．

これらの本を読めば、福音書の書かれた時代についてもっと詳しく説明があって、マテオとルコとルカは７０年以前に、ヨハネは９０年代の末に書かれたと考えられていることが明らかになるでしょう。（次号に続く）。

こういう感じで１０枚くらい話が続くので、覚悟していてください。読みかけて気分が悪くなったら、即座に読書を中止してペパーミントガムでも噛んでください。

1998.2.21.　A.O.

知事選挙も終わりほっと一息ついた今日ですが、皆様にはまだまだあれが残っていますので、気を抜かぬ毛も抜かぬように心して生活してください。今日のビデオはいかがだったでしょうか。世の中には本当に立派な生き方をする人がいるのですね。日本もまだまだ捨てたものではない。皆さんもよい日本を作るためにがんばってください。さて、

第五章：福音書が書かれたのが１世紀中であることがなぜ大切かがしつこく説明される章。

今まで福音書が１世紀中にできたと言い続けたけど、「それがどうしたん。べつに福音書がいつ書かれてもかまへんやんか」と心の底で思っている君、よく聞いておくんなはれ。

福音書が１世紀中に書かれたもので、その著者がマテオ、マルコ、ルカ、ヨハネということは、福音書はすごい信頼度の高い書物だということになるのです。マテオとヨハネはイエズス様と３年間いっしょに過ごした弟子ですから、自分の目で見たことを書いたわけです。ヨハネは福音書の中で自分が書いたことについて「これを見たものが証明する」、つまり自分は見たことを書いたのだと何度か言っています。

マルコという人は、子供のときイエズスキリストを知っていたけど、キリストと一緒に暮らした訳ではない。あとで大きくなってペトロがローマに行ったとき通訳として一緒に働いたようで、ペトロの話をもとに福音書を書いた。だから『マルコ福音書』はペトロの福音書とも言われます。ルカは、全くキリストを知らなかったし、ユダヤ人でもなかったから、いろいろと調査して福音書を書いた。「私もすべてのことをはじめから詳しく調べ、順序よく書いてあなたに送るのがよいと思った」（１章､3）と初めの部分で書いている通りです。

さて、四つの福音書を読み比べてみるとすぐに分かるのですが、マテオ、マルコ、ルカの三つは内容がよく似ている（そこでこの三つは共観福音書と呼ばれる）。でも、もっと注意深く読んでみると、似ているけれど微妙に、あるいは結構違っているところがよくある。また、ヨハネの福音書に至っては、前の三つに全く書かれていないことが書いてあったり、逆に共観福音書のどの本にも書かれてある事件が抜かしてあったりするんです。これを見ると、「もし福音書が目撃者か、それに近い人が書いたのなら、違うところがあるのはおかしい。違うところのあることは、著者が嘘を書いたという証拠じゃないか」と標準語で考える人もあるでしょう。それについてひとこと。

みんなの中で４人がある日遠足に言ったとしよう。次の日に、先生に「君達、昨日の遠足のことを話して下さい」と言われて、その４人が遠足について話し始めたら、同じ出来事について話すのに、一人一人の話は少しづつ違っている筈。それもそのはずでしょう。同じ出来事についても見る人が違えば、その感想もすこしは違うはずでしょう。もし、４人が全く同じことを言ったとしたら、先生もそれを聞いていいる人たちも「これは口裏をあわせたに違いない」と疑ってしまいますよね。だから、裁判のときに裁判官は、証人が複数いて、その証言がぴったり会うなら、「この証人たちはちょっとあやしいで。きっと証言の前に打ち合わせをしたにちがいあらへん」と考えるのです。

四つの福音書で、同じ事件なのに書いていることが少しずつ違うのは、まさにそれらを書いた人が、自分は本当にあったことを書いているんやと自信満々でいた証拠です。だってそうでしょう。たとえば、ルカは自分が福音書を書くとき、すでに少なくともマテオの福音書は知っていたのだから、もし自分の書くことが本当に起こったことであるという自信がなかったら、わざわざマテオの言っていることと少し違うことを書くでしょうか。ルカがマテオやマルコと同じ事件に言及ながら、すこし違ったことを書いたのは、それが本当だというかれの確信を示すものです。ヨハネの場合はもっとはっきりする。ヨハネは上に述べたごとく、一番最後にまた三つの福音書が出来てから３０年以上も経ってから第四の福音書を記した。その内容は前の三つとかなり違うものです。もしヨハネがありもしないことをでっちあげようとしたなら、なんでそんなに違うことを書いたのか説明がつかないでしょう。

さて、ここまで噛んで含むようにくわしく説明したことのまとめ。福音書、つまりイエズスキリストについての記録は、１世紀中に、直接の証人か、もしくは直接の証人からの証言を調べた人によって書かれたものである。

いよいよこれから本論に入りたいのですが、ちょうど時間となりました、で今日はこんへんで失礼します。でないと、これ以上やるとこれから受験に備えて必死に勉強している人たちの頭をめちゃめちゃに混乱させて、その結果長崎家庭裁判所に訴えられるかもしれないからです。

第六章：と思ったけどやっぱり少し続ける章。

せっかく福音書を読んでも、ある人たちは奇跡の話につまずきます。つまり、「これはええお話やけど、結局つくり話でしょう。だって、奇跡なんかあるはずないもの」と言うわけ。もし作り話だったら、まじめに読む必要もないし、ましてやごミサの説教で詳しく解説するなんて「ばかばかしくってやってらるか」と言いたくなります。

福音書以外の本でイエズス様の奇跡が記録されていれば、福音書の奇跡が本物である証明になりますが、ユダヤ人の古い本である『タルムード』に「ナザレトのイエスは魔術を行なって人々を惑わした」と書いてあるのは注目に値するかも知れません。しかし、福音書が歴史的な本である、すなわちそこに書いてあることは想像の産物ではなく、事実を事実として書かれたということは、さっきからしつこく言っているように、聖書が１世紀中に目撃者によって書かれたということを認めれば、納得されるのではないでしょうか。

つまり、聖書が書かれたのが１世紀中なら、当然そのころまだキリストの敵もたくさん元気に生きていたはずです。だから聖書に書かれていることがウソ八百なら、すぐに「あのキリスト教徒達が聖書と読んでいる本は嘘だらけやで。あんなものを信じたらあかんで」とその人達は宣伝カーに乗ってマイクのボリュームを最大にして町に宣伝しに行ったはず。けど、その種の攻撃はなかったのです。キリスト教を憎んで破壊しようとした人達はたくさんいたけど、その人達も聖書が嘘だと証明できなかった。だから２０世紀の末の今まで聖書は多くの人に読まれ信じられ続けているわけ。

これでイエズスキリストの伝記である福音書が、少なくとも空想の産物ではないことを説明したことにさせてください。ではまた。

1998.2.23.　B.O.

今日は急用ができてすみませんでした。難しい試験だったのですが、結構よく書けているようで感心しています。３月になって、入試や卒業式が秒読み態勢に入りましたが、インフルエンザはもちろんのこと、サッカーでアキレス腱断裂、ふとももの肉離れ、足首のねんざ、または顔面神経痛、ありは腸捻転などにならないようにくれぐれも気をつけてください。

それでは、福音書についての説明を続けますが、これもやはりかなり頭を使う内容なので読むならば覚悟して読んでください。

第七章；福音書がどのようにして書かれたかについて説明が試みられる章

前に福音書がイエズス様の直弟子か、孫弟子によって書かれたと言いました。４つの福音書の中で最も古いと考えられるものがマテオ福音書で、それが書かれたのは５０年代だと言いましたが、覚えているでしょか。実はマテオとマルコの福音書の書かれた年代は、あまりはっきりしていません。しかし、確かなことは、キリスト教が始まってからすぐに書かれたものではないということです。

イエズス様が十字架刑でなくなったのは紀元３０年４月７日である可能性は非常に高いそうです。どうしてそこまで正確にわかるかは、本当は授業で説明したかったのですが。ともかく、ということは使徒たちが宣教を開始してから最初の福音書ができる５０年頃までの間、弟子たちは聖書を持っていなかったことになりますよね。その間ペトロたちは、どのようにして人々にイエズス様の教えを伝えていたのでしょうか。ちょっと想像すればわかるように、弟子たちは口で伝えていた（口頭の教え）はずです。教会が生まれたころの歴史を記録している『使徒行録』（著者はルカ）には、弟子たちの説教の多くが載っています。もちろん、おそらく最初からイエズス様の教えはメモの形で記録していた人がいたと考えられます。が、初めの頃はそれを一冊の本のようにする必要もなかったし、おそらく時間もなかったのかもしれません。

ところが、時代が下るにつれ、弟子たちも東はインドから西はスペイン、北は黒海の沿岸、南はエチオピア、はたまた葛飾柴又までの世界の色々な場所に散って行き、殉教していく人も増えていくと、「口で教えられたものを書き留めておこう。でないと、忘れられたり、間違ったことを教えたりするかも知れないから」という心配が起こってきても不思議ではないでしょう。

教会は、いくらかの人に神様が霊感を与えてその聖書を書く仕事をさせたと教えます。そのような霊感があるのかどうか、信じる信じないは皆さんの勝手ですが、ともかく初代の教会の人は、そのように信じました。ですから、聖書と考えられたもの（これが４つの福音書や『使徒行録』や使徒たちの手紙や『黙示録』です）は、非常に大切にされました。当時はコピーの機械がありませんでしたから、重要な本は書写されたのですが、当然書き写すときに間違いが出てきます。聖書と、他のギリシアやローマの文学や歴史の本を比べると、写本の数においても、また写し間違いの少なさにおいても聖書に勝るものはありません。これは、信者が聖書を神の啓示を記録していると信じていた証拠の一つです。

第八章；イエズス様の教えは福音書に全部記録されているのではないことが話される章

キリスト教はナザレトのイエズスを神が人間の本性をとった方であると信じる宗教です。だから、イエズスの言葉と行いが教えの基礎になる。それでは、そのイエズスの教えと行いを知るには聖書を読めば十分なのでしょうか。

イエズス様は大体３年間人々に教えられました。ある人物が３年間にしたことを一冊の本に全部書き記すことができると思いますか。それはちょって難しいんじゃないでほすかね。ヨハネは福音書の一番最後のところに「イエズスが行なわれたことはこのほかにも多いが、一つ一つ記したなら全世界さえもその書かれた本を入れることができまいと私は思う」と言っています。

さっきも言いましたように、福音書は、最初に口で伝えられたものを書き残したものですから、口頭の教えのうちに書き残されずに残ったものもあるはずです。教会はその伝えを「聖伝」と呼んでいます。「聖伝」の方が「聖書」より先にある。ところが、「こんな聖伝なんて嘘っぱちや。それは教会がでっち上げた教えや。キリストの教えは聖書にしかない。聖書だけ信じたらええんや」と言った人がいます。それがルターで、プロテスタントはこの考えを踏襲しています。彼らのことを「福音派」というのはその意味です。

でも、もし聖伝を信じないのであれば、実は聖書も信じることができなくなるのです。なぜと言うに、前のプリントでも言ったように、福音書の中に、いつどこで誰がこの書を書いたのかは勿論、「この書物は神の霊感を受けて書かれた」なんて文章は出てこないのです。それでは、どうしてその書物が聖書（つまり神の霊感を受けて書かれた書物）だとわかるのか。それは、イエズス様の弟子たちが、最初からそれらの書物を聖書として認めて、そのように教え伝えたから。つまり聖伝によって、どの書物が聖書で、どの書物が聖書でないのかがわかる。ちょうど聖伝は、聖書という壁を支えているつっかえ棒みたいなもので、それがなければ聖書も倒れてしまう。実際ルターは後で、自分の教えに反することが書いてある聖書（「善業を伴わない信仰は死んでいる」と言ったヤコボの手紙）を「これは聖書と違う」として、聖書のリストから排除しました。

皆さんは、『ペトロの福音書』とか『トマの福音書』とか『ヤコボの福音書』とかいう本があるのを知っていますか。前に「もし福音書がでっち上げなら、その著者として１２使徒の中でも格上の使徒の名前を付けたでしょう」と言いましたが、これらの本はまさに空想の産物です。これらの本を読むと本物の福音書がいかに優れているかがわかります。たとえば、『トマの福音書』はイエズス様の幼い頃のことが書かれているのですが、たとえばこんなカ所があります。「イエズスが安息日に粘土をこねて雀を作った。あるユダヤ人がこれを見て『安息日に禁じられていることをする』とヨセフ様に言いつけた。ヨセフ様はイエズスを叱った。すると彼は手を打って雀に叫んだ。『行け』。すると雀は羽根を広げて鳴きながら飛んでいった」。ヨハネの福音書では、イエズスは３０歳になるまで一つも奇跡を行なわなかったと書いてあります。

これを読んでくれた皆さんが、で頭痛、肩凝り、めまい、耳鳴りなどに襲われませんように。

1998. 3. 2.　A.O.

ついに朝の会の話しも終わり、ほっとした人もいるかもしれませんね。いやきっといる。世界の思想史は、高校では「世界史」か「現代社会」で習いますが、これらの科目は選択性なので心配しなくてよいです。でも、もしこれらの勉強をして、分からないことが出てきたら、相談してください。ところで今朝、「高校では本をたくさん読んでほしい」と言いましたが、この点に関して一つの注意。

皆さんは『ドンキホーテ』という本を知っていますか。これはスペインが「日の没することのない帝国」と言われた時代を生きたセルバンテス（1547~1616）という人の名作です。私が今まで読んだ中で（と偉そうに言いますが、私の読書量は大したことがない）、一番面白い本がこれです。彼はこの本を出すまでは無名だったのですが、この本で一躍有名になりました。けれど、当時の文壇（有名な作家の世界）からは「これは単なるお笑い本や。文学的には価値のない本だす」と馬鹿にされ、セルバンテスは富も名誉も手に入れることなしに寂しく世を去ります。しかし、１９世紀にロシアの文学者ツルゲーネフという人が「シェー、『ドン・キホーテ』はマンガではないざんす。シェークスピア（１６世紀のイギリスの大文学者）の『ハムレット』とも比較できる大文学ざんす」と評価したので、世界中の注目を浴びるようになりました。

前置きが長くなりましたが、この本の内容を簡単に紹介します。むかしむかし、スペインの田舎ラマンチャという地方にキホーテという郷士（貧しい武士）がいました。彼は、当時大流行していた騎士物語という種類の本を朝となく昼となく夜となく、寝食を忘れて読みふけっていました。ちょっと説明しますと、この騎士物語というのは遍歴の騎士（水戸黄門のように世間を旅して悪党を退治する騎士で、常に彼をじゃまする幻術師や、騎士を密かに慕っている姫が脇役として登場する）のアクションとロマンを描く小説で、１６世紀のスペインで猛威を振るい、皇帝カルロス５世だけでなく、後に聖人になるアビラのテレジアやイグナチオ・ロヨラという人たちも一時この種の本を読みふけって後で後悔しています。

ともかく、ドン・キホーテはその種の本を何冊も読みふけった結果、脳味噌がパサパサになり、現実と小説の世界が区別できなくなった。そこで、彼は自分こそこの世にはびこる悪代官や悪徳商人を退治するべき遍歴の騎士である、自分が出かけることを一日千秋の思いで待っている不幸な人々が世の中にいっぱいいると考えるようになったのでした。そこで、彼は納屋にしまってあった埃をかぶった武器や甲や鎧を出してきて修理し、痩せ細った老馬に鞍をつけてそれにまたがって旅に出かけようとしました。その際思い出したことは小説では遍歴の騎士は必ず従士（お付の人）がいることでした。そこで、同じ村に住んでいたサンチョ・パンサという人のよいでぶっちょの農夫に声をかけ、「わしがちょっと手柄をたてて、領地を褒美にもらったら、おまえを太守にしてやっけん」と騙して（悪気はなかったのですが）一緒に旅立ったのです。当然家の人たちや知り合いは大反対していたので、ある朝早く二人はこっそり村を出たのです。

ドン・キホーテの目にはすべてが小説の世界のように写る。例えば、旅先の宿屋はお城に、そこの女中さんは御姫様に、羊の群れがいればどこかの国の大軍団に、風車を見れば悪者の怪獣に見えたのです。サンチョが、「旦那さま、あれは風車ずら」と注意しても、「それはわしに仇なす幻術師が魔術をかけてそのように見せとるのじゃ」と言って見向きもしないわけです。道々で彼に合う人も、ちょっと話すと彼が完全にいかれていることに気づき、彼に悪いいたずらをするという、面白いと同時に悲しい、泣き笑い劇場なのです。

この本は、読書について重大なことを教えています。すなわち、「なんでもええから、本を読みなはれ」という忠告がいかに危険なことかということです。本は頭に影響を与える。「本は心の糧」と言いますが、食べ物にも健康に良いものと悪いものがあるように、本にも言い本（良書）と悪書がある。「健康になりたかったら、なんでもいいからようさん食べることや」と言う人はないでしょう。栄養のないものや、ばい菌のついているものは除外する。読書も同じ。ですから、本を読む場合には、読む前にその本についの情報を得てから読みましょう。悪書を読むのは時間も無駄だけでなく、頭の健康を害することもある。また、読み始めてから、その本が自分を堕落させるように思ったら、その場で読書を中止することです。

もう一つの注意。昔（紀元前３世紀）中国の趙（ちょう）という国に趙奢という軍師がいました。彼は一流の兵法家で、彼のおかげで趙はよく秦の攻撃を防いでい（しゃ）ました。彼には趙括（かつ）という息子がいました。趙括はまだ若い時から父の下でよく兵法を学び、あるとき父と議論して父を言い負かせたこともあったぐらいでした。しかし、父はよしとは言わなかった。母がその訳を聞くと、「兵は死地の事だ。括はそれをたやすく口にする。括を将とすれば趙は負ける」と言ったそうです。しかし、王様は若い趙括を気に入り、趙奢が死ぬと彼を軍師に取り立てた。この裏には秦のスパイが「秦がいやがることは、趙括が将軍になることだ」という噂を流していたこともあった。作戦が成功したのを見て秦は趙に攻めこんだ。出陣した趙括は以前の将軍のしていた配置をすべて変えて臨んだが、結果は大敗北（長平の戦い。BC.261年）。これで戦国の一雄だった趙が滅ぶのです。

似たようなことは三国志にもあります。諸葛孔明がある戦いで、自分の弟子の馬謖という将軍に重要地点を守らせたところ、兵法書の浅はかな知識に頼って、彼は孔明の指示（ばしぼく）とは異なる軍の配置をしたために大敗北を喫し、せっかくの魏を倒すチャンスをフイにしたという話です。この後孔明は敗北の責任を問うて馬謖に死刑を言い渡しますが、これが有名な「泣いて馬謖を斬る」です。

趙括や馬謖のようなことを机上の兵法と言います。つまり、本ばっかり読んでいても、現実を知らねばだめだということです。今日みんなに本を読んでほしいと言いましたが、本だけではだめということも忘れないでください。読書と同時に、スポーツや屋外での活動や芸術やらを通じて同時に沢山の友達を作って、いろいろな人と交わり、現実世界と人間をよく知るように努めてください。また、頭だけではなく、健康な体も財産になります。

それでは、残された一週間くらいは寝食を忘れて勉強してください。

1998. 3. 5　　A.O.

皆さんは勉強で忙しくて知らないかもしれませんが、現在長野でパラリンピックが行なわれています。その前に冬期オリンピックがあったのですが、マスコミは盛んに「感動」という言葉を口にしていました。確かに逆境の中で苦しい練習の末重圧にも負けず金メダルに輝いた清水選手、前回の失敗を挽回した原田選手、一人で参加したモンゴルのスキー選手やアフリカの選手など感動も多かったです。けど、私は元来天の邪鬼な質で、「スポーツを持ち上げすぎるんとちゃうか」と反感を感じました。中学生のバレーの全国大会を「さわやか杯」と言ったり、他の高校スポーツを青春、感動、汗と涙、なんて言いますが、スポーツ選手がみんなさわやかで、高校の運動クラブが青春感動物語なんてまったくのきれいごとだと思うからです。先日大学クラブの選手たちが起こした不祥事、プロ野球選手の脱税事件など、スポーツができることとその人が人格者であることは別問題であることを、如実に示しているのではないでしょうか。スポーツで秀でるためには、人格形成などはどうでもよいと考えている人が少なくないことの証拠ではないでしょうか。私は、皆さんが適正があるなら高校でもクラブで活躍してほしいですし、別に有名選手にならなくてもスポーツで体を鍛えて欲しいですが、スポーツ礼賛の雰囲気には騙されないようにしてほしいです。

感動ということなら、パラリンピックの方が感動的なような気がします。また、毎日朝から晩まで会社や店や学校や家で、日々の仕事を一生懸命して家族を養っている無数の男女の生き様の方が、確かにちっとも目立たないけど、スポーツ選手のそれよりずっと感動的なこともしばしばあるのではないでしょうか。

さて、今日は、先日話した『ドン・キホーテ』から、人格形成に非常にためになるくだりを紹介したいと思います。きっとこれを読めば、心を改め、日々精進の生活を始めるであろうと期待するからです。

○　○　○　○　○　○

ドン・キホーテとサンチョ・パンサが数々の奇妙な冒険に出くわしながら、旅を続けていた。あるとき森に入った後に日が暮れて真暗になってしまったが、あまり遠くないところから、「激しい水声のうちに、鉄のきしりや鎖のひびきのまじる音が」一定のリズムで聞こえてきた。生まれつき臆病なサンチョは震え上がったが、ドン・キホーテは勇気百倍、槍をしごいて楯に腕を通し馬に飛び乗り「これこそわしが待ちに待った冒険じゃ」。サンチョ、３日してもわしが帰らなんだら、姫のところに行ってわしの死を告げてくれ」と言い残して去ろうとした。

サンチョは、こんな暗いところに一人で残されることに恐怖して、それだけはやめてくれと泣いて頼んだり、ナンセンスなお話を即興で考えて時間かせぎをしようとするが、主人の固い気持ちは微動だにしない。そこで、こっそり主人の馬の前足を紐で縛った。馬が動かないのを見て、サンチョは「これは神様がわしの願いを聞き入れてくださり、馬に動くなと命令されたでがす」。さすがのドン・キホーテのあきらめて夜が明けるまで待つ気になった。以下岩波文庫の『ドン・キホーテ』永田寛定の訳を引用します。(若干言葉を変えています)。

このとき、もう近づいた明け方の寒さのせいか、それともサンチョが何か腹のゆるむ物でも食べたのか、またそれとも、自然のことだったのか（一番そうらしく思えるのはこれだが）、人には代わりを頼めないことをする意志と願いが従士（サンチョ）にわいた。しかし、心に根を張った恐れがあまりに大きかったので、一ミリたりとも主人から身を話す気になれなかった。といって、したいことをしないですますことは、やはりできなかった。そこで、二つのことを一度にしようとしてしたのが、主人の鞍の後輪にかけていた右の手を離すことだった。そうして、たくみに音も出さずに、ズボンのひもをほどいた。ズボンが花結び一つきりで留められてあったのだ。ひもがほどけたズボンはすぐにずり落ちて、足かせのようになった。サンチョはそれを待って、シャツをできるだけまくりあげ、あまろい小さくない尻っぺたを外気に突き出した。これを、当人は、今の恐ろしい状況と苦しい思いから抜け出すためにしなければならないことの山と考えたようだが、その山を超えると、もっと大きな困難にぶつかった。というのは、音を立てずに○○○をすることが難しく思えたのである。そこで歯を食いしばり、肩をすぼめて、できるだけ息をつめた。しかし、それほど気をつけたにもかかわらず、なさけなや、わずかばかりの音 ── 従士をあんなにおびえさせた音とはかなりちがったもの ── を、とうとう立ててしまった。すると、ドン・キホーテが聞きつけて言った。

「今のは何の音じゃな、サンチョ」。

「知りましねえだよ、旦那様」と従士は答えた。「何か新しいことだべ。冒険や不幸はつれを呼ぶものだからね」。

再び運をためした。今度はすばらしくうまくいって、前のような音もさわぎもなく、あれほどつらい思いのお荷物を、きれいに落としてしまった。ところが、ドン・キホーテは、耳が鋭かったように、鼻もよくきいたし、サンチョがぴったり抱きついて、湯気をほとんど一直線に立ち上らせたので、においが騎士の鼻に届かないですむってことにはいかなかた。だから、においをかぐやいなや、しのぎのために指二本で鼻をつまんだ。そうして、多少ふにゃふにゃ声で、こう言った。

「サンチョ、おまえは大そうおびえとるらしいぞ」。

「はいおびえとりますだ。けんど、それがおめえ様に今とりわけどうして知れますだね」

「今とりわけおなえがにおうからじゃ。しかも、香水の匂いではないな」。

「そうかもしれねえけんど。わしが悪いでなく、おめえ様がわしをこんなま夜中に、こんなさびしい場所へつれてきたせいでがす」。

「３歩か４歩むこうにどいておくれよ、わしの友」とドン・キホーテは始終指を鼻わしから離さないで言った。「そして、今後は身の分を忘れず、わしに対する礼を守らっしゃい」・・・・

今日は、このような話で皆さんの肩をほぐせたらと思いました。それではまた。

今日のは家族の方に見せないで下さい。ショーガです。　1998.3.7

ついに入試も終わり、皆さんにも春がやってきました。もっとも、本当の春は発表が終わったときでしょうが。これで後は野となれ山となれ、適当に学校に来て適当に遊んで帰る毎日で卒業式までずんだれれていていいやんか、なんて口が裂けても言えません。まあ、毎日を味わいながら有終の美を飾ってください。

この通信もいよいよ終わりですが、最後にもう一度なぜこんなことを書いたかを説明させてください。それは第一回の手紙で言ったことですが、この世界にはいろいろな思想（考え）があって、人は意識しないでもなんらかの考えに従って人生を生きる。間違った考えに従えば不幸になるし、正しい考えなら充実した人生を生きることができる。と言うと世間には「わしには別に肩苦しい思想なんてものは関係ない」と言う人がいる。けれど、そのような人も、例えば「人生なんて楽しければええんや」とか言うでしょう。それも一つの人生観です。でもこれは正しいのでしょうか。ここで間違うとへんな人生を送ることになる。実際今の日本で多くの人間がこの考えを実践している。その結果、薄っぺらい毎日を過ごし、絶えず欲求不満に苦しんでいるわけ。

相手が偉い人でも人生観の話しなら簡単に信用しない方がよい。

つまり、思想（考え）と言うものは、体には何の影響も及ぼしませんが、人の頭に大きな影響を及ぼし、時に糧となるが時には害となるのです。人がどのような人生観を持つかは、その人とその人の家庭、さらに回りの人々の仕合わせに係わってくる。たとえば両親がしっかりした考えを持っていたら、その子供は家庭でどれほどのよい教育を受けることでしょうか。

ところで、この現在社会には、「自由とは何でも好きなことが出来る権利」という啓蒙主義の影響で、どんな考えをしようが、またどんな考えを社会にまき散らそうが、それは個人の基本的人権である、と考えられています。でも、これは正しいでしょうか。

昨年Ｏ１５７が猛威を振るったとき、日本ではヒステリックな感じがするくらい衛生対策を実行したことを覚えていますか。給食を作る人たちはマスクをして、なま物はみんな火を通して、カイワレ大根は捨てられてしまった。このとき、「誰が何を作ろうが、何を売ろうがそれは基本的人権やろ」とか「カイワレ大根がかわいそうやんか」と言って抗議した人はいなかったね。健康を害するものにはこれほど神経質になり（これは必要なことですが）、公共の福祉のために個人の権利を制限することもちっとも悪いとは思わないのに、これがひとたび思想になれば、少しでも制限を加えようとすると、「表現、思想の自由」を楯にとって抗議の声がゴウゴウと沸き起こるのです。

皆さんは知らないでしょうが、戦後日本のインテリ（知識人）の多くはマルクスの考え（マルクス主義とか共産主義とか呼ばれた）をまるで絶対の真理かのように考えました。マルクスの考えに従えば、世界の労働者は資本家に抑圧されているから暴力によって資本家と資本家と結託している政府を倒し、労働者による政府を打ち立てなければならないのです。そういう目で世界を見れば、世界は善と悪の２つに色に分けて見えるようになる。つまり労働者は善、資本家は悪。大衆は善。政府は悪。ソ連、中国、北朝鮮や善。アメリカは悪の権化。という風に。そして、どこでも労働者は抑圧されているように見える。その不正をぶっつぶしたのがソ連であり中国であった。日本も同じようにしなければならない、と考えたのです。

戦後大学にはそういった考えを信奉する先生が多かった。彼らは、学生たちにその考えを様々な機会に吹き込んだのですが、その結果６０年代の後半には日本中のほとんどの大学で学生運動が起こり、ひどい暴力が大学の内外でまかり通ったのです。そして、一部の人たちは、武力で革命を起こすために銃を盗み山の中に籠もって革命のための訓練をしたのですが（まるで革命ごっこ）、そのうち仲間割れが起こり何人もがリンチで殺された（これが連合赤軍事件）。それが警察に見つかると浅間山の旅館に立てこもり銃撃戦の末に逮捕されたのですが、この事件で警察官が二人死んでいるのです。大学紛争では、反乱学生を押さえるために大学から呼ばれた（多くの大学の先生は自分で火を付けて、その火が広まると、機動隊を呼んで処理してもらった）機動隊の人の中で死んだり怪我をしたりした人も出たのです。連合赤軍の人たちの裁判が最近ありましたが、あるメンバーの父親が、「息子がしたことは悪いことだが、それをけしかけた当時の大学の先生たちがまったく裁かれないのはおかしい」と言っていましたが、本当にその通りだと思います。

マルクス主義は１９８９年のソ連の崩壊によってそれがまったくの妄想であったこと、本当に非人間的な制度を作ったことなどが明らかにされてしまいました。でも、現在は、たとえば環境問題や人口問題、そして人間の基本的な側面、例えば家族とは何か（「どうして家族がいっしょに住まないといかんのか」、「同性どうしの結婚はなぜいけないのか」「夫婦の仲が悪くなったら別れたらええやんか」という人もいる）、性とは何か、自由とは何か（「麻薬をすって何が悪い」とか）などの、昔よりもっと身近な問題で、とても奇妙な考えが進歩的なものとしてマスコミからお墨付きをもらっています。

世間には要注意の思想が放し飼いにされています。もちろん、普通は人間には常識というものがあって、簡単には変な考えには惑わされない。常識とは、人間が長い歴史の間で築き上げてきたもの、親から子に、年配者から年少者に伝えられてきたものです。それは、生活の知恵とも言えるでしょうか。この常識によって、日本人は戦後の知識人の世論の操作にも係わらず無難な道を選んだように思います。

しかし、誤った考えが先生とか、テレビの有名ニュースキャスターや立派そうな哲学者の書物から来るとき、簡単に信用してその結果クルクルパーになる危険がある。また、思想には、１００％正しいとか１００％間違っているというものは非常に少ない。間違っている思想にも正しい面がある。それだからこそ、騙されるのです。特に純真な人ほど、それらの考えが一見したところ立派な理想を掲げるときに騙されることがあるのです。

もう一つ難しいことですが、「意見」と「真理」を、また「仮説」と「定説」を区別しないといけない。意見や仮説ならば、それが絶対正しいとは言えず、もっとデータを調べたり、討論で話し合うことができる。つまり賛成と反対が出て当然なのです。それに対して、真理は話し合いの結果決まるものでない。問題は、意見なのに真理だと、逆に真理なのに意見だとすることです。この種の混乱が結構多いのです。

結局また頭がねじれるような話になりましたね。すみません。ではまた。

1998. 3.13

拝啓１２期生の皆様

透き通った青空が広がって、まるで試練を終えた受験生を祝福しているようですね。一時は永遠に続くかと思われた（誰もそうは思わなかったかもしれませんが）受験勉強というつらいことも終わり、この世ではどんなつらいことも終わりがあるという哲学的真理について深く考えておられる方はいないでしょうね。寒い冬の後には必ず暖かい春が来るわけです。それも生きていればのことですが。また、逆にどんな楽しいことも終わりがある。だから、そのようないつかは終わるものではなく、永遠に続くものを見つけることが大切ってわけ。

前にキリスト教えのおこりについて話したいと言いましたね。この話をするために福音書がどうやってできたかを説明したのですが、その後で、「こんな複雑なことを書いたら、受験勉強に差し障りがあるかも知れへん」と心配になってやめてしまったのですが、その受験も無事終わった今、少しだけ説明させてもらって馬のはなむけにさせてください。

１０年前に使っていた歴史の教科書には、キリスト教のおこりについて以下のように書いてありました。「紀元１世紀前半に、イエスが現れ、なやむ者、貧しい者は神の愛によって救われると説いた。この教えはやがて『神を信じるものはみな救われる』と信じられるようになり・・」。「これのどこが悪いの」と疑問に思うでしょうね。けど、この書き方は、実は一番大切なことを抜かしているのです。つまり、最初にキリスト教を伝えた人々は、イエス・キリストと一緒に生活した何十人かの人たちですが、彼らが伝えようとしてことの中心は、「ナザレトのイエスは、十字架につけられ、死んで葬られ、三日目に蘇った」ということでした。このことは、当時の教会の詳しい記録である『使徒行録』や、パウロやペトロの手紙を読めば一目瞭然です。また、同じ時代のローマ人の歴史家は、その頃ローマ帝国全体に広がりつつあった新しい宗教（キリスト教）について、「この宗教は、死んだイエスという人物が生きていると主張している」と言っています。

キリスト教が仏教やイスラム教と根本的に異なる点はここにあります。仏教を始めたシャカは、自ら厳しい修業をつんで、あるとき悟りを開き、その自分の経験と考えを人々に伝えたのであって、決して自分を神だとは言わなかった。イスラム教の創始者マホメットは、商人として中近東の各地を旅して、そこで知ったユダヤ教とキリスト教から感化を受けて、４０歳のある日天使ガブリエルから啓示を受けたと言い、自分は最後の預言者だと主張しましたが、かれも自分が神だとは言いませんでした。

それに対し、イエスキリストは、修業をして悟りを開いたとか、ある時神から啓示を受けたとかいった形跡はありません。初めから自分が知っていたことを間違いのない真理といて教えました。イエス様が、何か難しい質問をされたとき、「ううむ。ちょっと待ってよ。考えるから」とか、「それは難しい、私はこう思う」とか言って自分の意見を言うようなことは一度もありませんでした。いつも間髪を入れずはっきり答えています。

またイエス様は旧約の預言者たちとも違います。彼らは、教えを述べるとき、かならず「神はこう仰せられる」とか「神のおつげ」とか言います。つまり、自分たは、マイクロフォーンのようなもので、声を出すのは神である、というわけです。それに対して、キリストは、「聖書にはかくかくしかじかと書いてある。しかし私はこう言う」という風に、自分の権威によって教えた。だから、聞いていた人々は彼の教えに驚いたのです。

人類の長い歴史の中で自分が神だと宣言し、またほかの大勢の人々がそう信じたのはこのときだけです。でも、いったいどうしてある人が神だなんて、信じることができるのでしょうか。その理由の最大のものがイエスの復活になるわけです。初代教会の信者たちは、そのように考えて、キリストの復活を述べ伝えたのです。ですから、この点を教科書が書かないのは、片手落ちというわけです。

「でも、復活なんて、昔の人が迷信深かったから信じたんじゃなかね」と考えるでしょう。多くの人が、「現代は科学の世界だから現代人は復活なんて信じられない」と考えています。けど、現代人も結構簡単に迷信を信じるのです。

それはともかく、福音書を読むと、イエス様が死んだのが金曜日。その後、熱心な数人の婦人たちが香料を買って、日曜日の朝早く（土曜日は安息日で動けなかったから）墓に行ったとあります。何のために？それは遺体に香料をぬって、遺体の腐敗を防ぐためでした。つまり、この人たちはイエスの復活（イエス様自身が何度か自分は復活すると予言していたにも関わらず）を信じていなかった。また福音書を先に読み続けると、この婦人たちに天使が現れ「主は復活された。弟子たちに伝えに行け」と言われ、弟子たちにこの良いニュースを伝えに言った。弟子たちは信じなかった、とあります。キリストの死後２０年もたたない頃（紀元５０年ごろ）、パウロは同時の文化の中心都市アテネを訪れ、大勢の聴衆をまえにキリスト教を説きました。しかし、彼が「神は一人の人を復活させた」と言うと、聞いていた人のほとんどがパウロをあざ笑って立ち去ったのです。

つまり、復活、死んだ人が蘇ることは、今から２千年前の人々にも信じられなかったできごとだったのです。しかし信じた人々もいた。なぜ信じたのでしょうか。それは、復活を伝えた人たちが、その教えのために命を落とすことも厭わなかったからです。ちょっと考えてみてください。人は嘘をつくことがありますが、自分の損になのにあえて嘘をつく人はいないでしょう。「おまえはアホか、嘘つき」と罵られ、または殴られ蹴られ、挙げ句のはてには殺されることさえあるなら、私なら「先日三つ山で河童を見た」なんてことは言いません。

１９７８年に出た北朝鮮の宣伝の本に、金日成が「絶世の愛国者であり、伝説的英雄であり、朝鮮革命と世界革命の偉大な首領である」とした後、次のような超能力を持っていると書いてあります。「①天下妖術を使う。②東西南北を飛んで移動する。③実際の距離を縮じめて移動する。④山・川を縮めて、一夜に千里を移動する。⑤一度に八カ所、あるいは十カ所に同時に出現する。⑥顔形がまったく同じ金日成が７人いる。⑦瞬間的に千変万化する。⑧天に消えたり、地下に潜ったりして姿を隠す。⑨気象を自由自在に操ることができる。⑩古今東西どの兵書にもないような巧妙な戦法を編み出す。」（稲垣武、『悪魔祓いの戦後史』、p.289）。これが本当だと言って死んだ人はいないようです。

明日の予餞会が心配です。

1998. 3.16. A.U.

いよいよ明日が卒業式でなんとなく寂しい気持ちがします。みなさと過ごしたこの３年間のことが懐かしく思い出されては吐きそうになります、なんて嘘です。本当によいクラスでしたね。

でも試験の発表のことも気になっている人もあるでしょう。そこで、私の個人的体験を一つお話ししましょう。それは私が大学生のための寮に下宿していたときのことです。

大学では大きな試験は前期と後期の二つしかありません。でも後期の試験に落ちれば、翌年もう一度同じ科目をとるはめになる。私の寮の後輩のある私立大学の２回生（２年生のこと）が１月の寒い日に試験から帰ってきて話してくれたことです。彼は前年ドイツ語の試験に落ちたので、その年も同じ科目を受けなければなりませんでした。その試験に訳の問題が一問あったそうです。その訳文には彼が知っている単語がほとんどなかった（これはもちろん本人の不勉強のせいですが、ドイツ語のような第二外国語は、大学ではあまり丁寧に教えないので、彼の責任だけではありません）。そこで、英語の知識を頼りに（英語とドイツ語は似ていることがあるので）、まるパズルを解くように推理を進めて行った挙げ句、彼は「肺は二酸化炭素を出し、酸素を吸収する」という訳を得た。この文はしっかり筋が通っているので、本人は自信満々で試験が終わった後他の友人と答え合わせをした。最初は彼の自信たっぷりの態度に不安を感じていた友人たちも、辞書を調べながら答えを合わせていくうちに大笑いになったのです。というのは正解は「その少女がいつまでそこにいたか誰も知らない」というものだったから。つまり、試験の出来映えなんて本人にはなかなか分からないものだから、ほかの人たちが自信満々でも心配する必要がないということです。

さて今日も聞いても聞かなくてもよいことを言わせてください。まず第一。中学から高校への進学は、結構大きな変化なのでつまらないことでも戸惑うことがあります。例えば、勉強。数学などは、単元ごとにまったく異なった内容が出てきたりして、よく分からないうちに次の単元に進んだりする。そして、最初の試験に悪い点をとったりしたら、「俺は、数学の才能がないんちゃうか」と早合点して落ち込む人もいる。これは初めて仕事をするときにもありがちなことなのですが、経験のないときは、ちょっとした失敗で非常に落ち込み、逆にちょっとした成功で、「わしはやっぱり天才や」と思い込み高慢になることがあります。けどこれはどちらも誤り。そのような失敗は、慣れていないからだけで、時間がたてばできるようになる。もちろん失敗したときに、なぜ失敗したか考えて対策を立てる必要がありますが。

ともかく、悩みがあれば（あるのが当然）、精道の先生に相談に来てください。精道は、在学生のためだけでなく、卒業生のためでもあるから。

次に、友人関係。友達は、自分の我ままを押さえて誰にでも親切にしようとしていれば（と言ってもこれは簡単ではないです）自然にできるものです。世の中には人に親切にするより自分の利益を最優先させることを信条にしている人もいますが、実際は人を助けることによって自分のためにもなるのです。たとえば、勉強であることが分からない人がいるとする。ある人は、「自分だけ知っているほうが試験のときに有利だ」と考える。けれど、本当はその人に教えてあげた方がよい。そうすると、教えることによって、かえって自分の理解も深まるのです。もちろんその人が教えてほしくないなら別ですが。人間とは、互いに助け合って生活するものです。

また、本当の親友にはしっかりした人を選ばんとあかん。それから、精道の友達とも、たとえ別の学校、別のクラスになっても、付き合いを続けていって欲しいね。友情を続けるためには、時々会うことが大切です。

それと、皆さんの宗教のノートや他の授業で書いた（書かされた）作文は保存しておくとよいと思います。大きくなって読んでみたら、自分が中学生のときに何を考えていたのかが分かっておもしろいと思います。また、何度も言いますが、このプリントもごみ箱に捨てたり、古紙回収の人に渡したりせず、いつか読んで下さい。この前に読んだ本で、「人間には、ある年齢になるまではいくら説明しても分からないということがある」と書いてありました。私はまったく同感です。今の私に今は分からなくても、この後１０年後に分かることもあるでしょう。そして皆さんに書いてたことを見ると、その大部分は、今ではなくあと１０年くらいたったらピンと来るのではないかと思います。

現在の日本だけでなく、先進諸国では宗教的なことを社会生活の片隅に隠してしまうのが普通のライフスタイルであると考える人が多いようです。皆さんもこれから神様のことやなど学校で聞く機会が少なくなるかもしれません。でも、神様のことや神に祈ることなどは人間が幸せに生きていこうとするなら、どうしても無視できない問題です。私が宗教の時間やこのプリントを通じて説明したかったことの一つは、宗教ということが非科学的なことでも、ちょっと変わった奇人変人のためのものでもなく、普通の人間にとって大切なものであるということです。高校では勉強やクラブに忙しく、忙しさに流されてそのような問題を考えずに過ごすことも大いに可能でしょう。けど、将来きっとそのような目の前のことでは満足できず、何かより深いものを求めるときが来るはずです。そんなとき、変な占いに頼ったり、怪しげな宗教をのぞいたりせず、精道で習ったことを思い出して、相談に来てほしいと思います。

それでは、体に気をつけて。これからのますますの飛躍を祈っています。これからの日本は君たちの肩にかかっているのですぞ。

1998.3.18.　尾崎